
黄昏の国のアリス

涼村怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の国のアリス

【Zコード】

Z1350D

【作者名】

涼村怜

【あらすじ】

ふわふわと浮かぶような感覚から穴に落ちるような感覚へ・・・
目が覚めたとき私は記憶を失っていた。周りの美形兼変人に振りまわされるアリスと周りの美形兼変人のお話。アリスのハートを射止めるのは一体誰?逆ハーレムもの。

1・アリスと時計白兎 前編

（序）

今日は何をしよう。ああ、そうだ。

机に大量におかれた手紙の山をあさる。
その中から細く綺麗な字で書かれた1通の便りを手にとった。

「やつと会える、なんて・・・」

内容を再確認し、そう小さく呟いた。

嗚呼、何度、どれだけ待つたであろうか。
この日がやつてくるのをどれだけ
。

「行きましょうか

そつと上着を着ると外へと足を進めた。
春になつてきたので外は暖かい。

片眼鏡をかけた青年は蒼色の髪を小さく揺らしながら足早にかけて
いった。

（アリスと時計白兎1）

ゅらーり、ゅらーり・・・ふわふわと。

浮かんでいるような感覚から、穴に墜ちるかのような感覚へ・・・

手足も身体も動かない。

高いところから落とされたような、そんな感覚。

・・・少しずつ手足の感覚が戻ってきた。

指先、手の平からわかる地面。

少々チクチクする。

田は閉じているものの、眩しいように感じた。

「ひ・・・」

おやおやおやおや田を開ける。

ここは一面の草原だった。

わつかのチクチクするものは芝生で、春の、匂いがした。

「うー、うー？」

金色の宝石のような髪をひとつくりと搔き揚げる。

日光を受けてキラキラと輝く。髪は少しウェーブになっていてふんわりと波打っている。

「私・・・私の・・・名前は、アリス」

何もわからなかった。ここがどこだか。

自分自身のことさえも。わかるのは“アリス”といつ自分の名前だけだった。

「何で・・・何も思い出せないの？」

何も何も思い出せない。

思い出そうとしても頭痛がアリスを襲う。

「アリスッ」

不意に後ろから声がした。

「え？・・・・わつ」

振り向くと同時に誰かに抱きしめられていた。
気が付くと男性特有のがつちりとした腕の中。

「会いたかったです、アリス」

深海のような青い瞳と空のような蒼い髪。

そして白い兔の耳と片眼鏡、首にかけた時計。
おまけに端麗な顔立ち。

どうして美形な青年に抱きしめられているのだ？！

「あつうううえ？」

思わず変な声をあげるアリスに、青年は心配そつに覗き込む。

「どこか打つたり怪我したりしていないですか？」

「あつあのー私の事知っているの？というかあなた誰」

アリスがそう言つと青年は傷ついたような表情を見せた。

「私が誰かわからないんですか？」

ポツリと青年は訊ねた。アリスは「クリと頷いて、言ひ。

「え、ええ。自分の名前はわかるけど……私が何者なのか、ここがどこなのが全て」

「と、いひとは……記憶喪失」

青年は誰に言つわけでもなくそう呟く。
記憶喪失。それは記憶を失くすこと。

だが、今のアリスにはそれ以上に気になることがある。

「痛つ。アリスなにしてるんですか？」

アリスはどうしてもこらえきれなかつた。
少々ピクリと動く白い兔耳が気になつて氣になつて仕方が無い。
つい、引っ張つてしまつた。

「え、えつと痛い……？」

アリスが言つとクスリと青年は笑つて、引っ張つているアリスの細く白い手首を握る。

「はい、痛いです。……私は正直、痛い思いをするより痛い思いをさせぬほづが好きなんです」

にっこりとした微笑に黒いものが見える。

「あ、あ、あなたもしかして……？」

「はい。どちらかとこりとうです

100万ドルの笑顔、というのはこのよつたな表情だろうか。
嬉々とした様子でアリスに笑いかける。
一方、アリスは表情を凍り付かせた。

1・アリスと時計白兎 前編（後書き）

登場人物紹介

主人公・アリス（17歳）

瞳：蒼色　髪：淡い金髪

武器：ダガー・オートンフアイ

特技・・・家事全般

趣味・・・お菓子作り

備考・・・美人で何かと美形兼変人に縁がある。

黄昏の国の女武官で、強いと評判。

よく美形兼変人に振りまわされる生活を送っている。

反響の国のキングから求婚され（しかも監禁）逃げ出したときに記憶を失う。

2・アリスと時計白兎 後編

「アリスと時計白兎」

（「つていつたわよね？まざい。この人、変人……？」）

アリスは青年の手を振りほどこうとするが
しっかりと手首を掴まれていて、青年は離そつとしない。

「（しようがない。離してくれないし、耳引っ張った私も悪いし）
あの、じゃあこのまま聞くわ。こはどじー私、何者？」

諦めたアリスにフツと笑んでから一呼吸おいて話始めた。

「こは『黄昏の国』と呼ばれる国の草原です。

アリス、あなたはこの国の武官……すなわち軍人のようなもの
です。

私もあなたと同じ武官で、あ、名前は“時計白兎”といいます。
時計兎……と呼んでください」

今更だがそう自己紹介をした。

アリスは少しだけ首をかしげ、青年の顔を覗き込む。

「時計兎？それが名前？」

「はい。変わった名前でしょう？」

私はこの名前が嫌いですけど、あなたのその可愛い声で呼ばれる
なら好きになれますね」

アリスは後半部分を聞かなかつたことにして話を続けてとつながす。

「それで、「」の国には王であるスペード。

スペードの妹で、女王であるハート。

ジャッククラス
王の近衛であるクローバー。

エースクラス
王の補佐であるダイヤ、がいます」

少し違和感を感じアリスは時計兎に尋ねる。

「普通なら女王は王の妃なんじゃ？」

「普通なら、でしょ? 「」は普通じゃないんですよ」

サラリとそう言ってのけられた。
時計兎はそれで、と話を続ける。

「「」の黄昏の国の隣国、反響の国。

私たちの国と反響の国の中にある“白雪の町”の所有権利をめぐつて

敵対し始めたのです。白雪の町は元々「」の領地なんですが
あちらの国に近いせいか、反響の國の民が多く白雪の町に移住していまして。

反響の国が権利は「」ちだ。と主張してきたんですよ。

アリス、あなたは反響の国への使者役。流石さすが、アリスと言いましょうか。

滅茶苦茶死ねこの糞野郎つていうくらいイラつくんですけど。
反響の国とのキングがあなたに惚れたそうです

「え、惚れた? ··· ··· ··· いたつ」

恵々しげに時計兎は自分の「じぶし」に力をいれる。
そしてアリスの手首を握っていた手も強く握ってしまいます。

痛さで顔を歪ませるアリスを見て

「大丈夫ですか？私はアリスの笑顔が好きですけど、アリスはどうな顔も似合いますね」

と笑ってみせた。

アリスは少し身を引きつつも話に耳を傾ける。

「ま、そこでアリスは誘拐されてしまったんです。
いえ、監禁とこうほうが正しいでしょうが。私達はどうか
悩んだんですけど」

そこ今までこうと、時計兎は胸ポケットから手紙を出した。

「これ。あなたが書いたんですよ。

今日この時間帯にここへ、反響の国から脱出して帰つてくれる。
そこで、私が迎えに来たと言つわけです。おそらくはその途中で
頭を打つか何かして記憶が無くなつたのだと思います」

アリスは手紙をまじまじと見つめる。

確かに「アリスより」と書いてある以上は時計兎のことを信じよ。

今からどうしようかと思考をめぐらせてみると突然手の甲に生暖かいものが触れた。

「…………？」何をつ……

時計兎がアリスの甲に口付けしていたのだ。

「…嬉しかったんですよ、アリス。アリスはこの手紙を他の誰にも届けていなかつた。

私だけに届けていた。それがとても嬉しかつたんです」

そう言われると、アリスも怒ることはできない。

さつきまで少し引き気味だつたが、アリスは少し信用してもいい気がした。

「時計兎…あなたのことと信頼するわ」

「ありがとうございます。安心してください。

反響の追つ手が来たとしても全て返り討ちにしますからね。皆殺し、ですよ?アリス」

前言撤回。

アリスは少し後退するよつにじりじりと後ろへ下がつたのだった。

2・アリスと時計白兎 後編（後書き）

登場人物紹介

時計白兎（20歳）

瞳・濃い青色 髪・蒼色
武器・鞭
特技・お茶を淹れること
趣味・読書
備考・獣人で兎。

黄昏の国の武官。

アリスが好きで、アリスにちよっかい出す奴はM・I・N・A・G・O・

R・O・S・H・I

チエシャ猫が大嫌い。

S。

3・卵男とチョシャー猫 前編

「卵男とチョシャー猫」

「リリがアリスの家ですよ。どうです？何か思い出しませんか？」

アリスは何か思い出すかも。という時計鬼の老えで住んでいたという家へと来た。

「いめんなさい。何も思い出せないわ」

申し訳なさそうにアリスが俯くと気にしないでください。と声がかかる。

「でも、ずいぶん綺麗なのね。私がいなくて時間たつていたんですね？」

「まあ、それは掃除してますから。・・・・ハンプティーが

最後のほうはアリスには聞き取れなかつた。

なぜなら他の事に興味を引かれ、聞いていなかつたから。

「ねえ、これ何？もしかして、私の武器・・・・？」

部屋の壁に掛けてあつた物に指をやす。

その先にあつたのはアリスがいつも愛用していたトンファードガードだつた。

「ええ。こつも使ってましたよ。反響の国には持つてこさせんで

したけど」

その中の一つのダガーを手にとると、手にしっかりと馴染む。身体 자체はこの武器のことをしつかり覚えているようだ。

「アリス、着替えてきたほうがいいですよ。

その服は反響の国のドレスみたいですし、動きやすい服に・・・」

「うん、着替えてくるわ。・・・覗かないでね」

バレてましたか。と時計鬼は笑った。

最後に釘を刺しておいて良かつたと心底アリスは思つ。パタパタと着替えのために2階へ上がつた。

「よしつと」

着替え終わり腰のベルトにトンファーとダガーを付けゐ。ちゃんとフィットしていて、水色と白のエプロンドレスにしましまのハイソックスを着た。

「うーん。ミニスカート・・・足がスースーするわ。やつぱりスパツツ履いといつかな・・・」

「アリスー下に下りてくれませんか?」

1階から時計鬼の声がした。

結局スパツツは履かずに鞄に丸めて入れておいた。

「アリス、似合つてますよ」

「あー・・ありがと」

いつの間にか時計兎のそばに青年が立っている。

その青年は、右目に傷があり片目しか開いていない。

「あれ？ その人は？」

知っている人かもしぬないのにこう言つてしまい、青年は驚いたような顔になる。

「言いませんでしたつけ？ 記憶喪失になつたと。
私も始めて見たときは全然信じられませんでした」

青年はどうやら、時計兎から事情を聞いていなかつたようでは益々片目が見開かれた。

「じゃあ、僕が誰だかわからぬ。といふことになるんだね？」

「クリとつなづくと青年はゆっくと口を開く。

「僕の名前はハンプティー・ダンプティー。

アリスは以前、僕のことをハンプティーと呼んでいたからそう呼んでほしいな。

・・この目の傷は、戦場で堀の上で待機していたときに敵にやられただんだ。

堀から落ちるし大変だったよ・・・

しみじみと語り、ハンプティーは右目の傷を指でなでた。

「記憶喪失だから一応、初対面つてことになるんだよね。変な感じだけど、よろしく」

にっこりとそう笑って手を差し出してくる。
それに応こたえて握手わんわんをした。

時計兎の黒い笑みを見てきた身としては、にっこり白い笑みを見る
と癒される。

「アリスとハンプティーは幼馴染なんですよ」

「幼馴染、・・・」

ハンプティーは赤毛の長髪で目は金色だつた。
顔も美麗で傷があるのが少し残念なくらいの。そんな人と幼馴染。
アリスは少しこうも美形に囲まれ、変な気持ちになる。

「ハンプティーも武官なので腕は立ちますよ」

「武器は槍なんだ。ちなみに時計兎は鞭むち」

組立て式だから持ち運びも便利だよ。と、ハンプティーは槍の先を見せた。

「それでは行きましょうか、二人とも」

「行くつてどこに?」

「森にだよ。

別名チエシャー猫の森にね」

チエシャー猫・・・?

それは一体なんなのだろう。

アリスがそれと関わるまではあと少しのこと。

3・卵男とチエシャー猫 前編（後書き）

登場人物紹介

ハンパーティー・ダンパーティー（19歳）

瞳：琥珀色 髪：赤色
武器：槍（組み立て式）
特技：掃除
趣味：散歩
備考：卵料理が好き。

黄昏の国の武官。

アリスの幼馴染。

右目に傷がある（反響の国の兵士にやられた）
夜になると性格が逆転する、いわゆる二重人格。
(普段は優しいが夜は荒々しくなる)

4・卵男とシェシャー猫 中編

（卵男とシェシャー猫2）

アリスは記憶を無くしたせいで地理がわからなくなつたいた。と、言つても記憶を無くす前から極度の方向音痴だったのだが。だからどうしても案内人が必要だ。

今回も前を歩いている時計兎とハンプティーについて行かなければ迷つてしまつ。

回りの森の風景に好奇がわくが大人しくついていった。

「アリス。悪いけどここに待つていてくれないかい？」

「え、ハンプティー、どうして？」

先頭の時計兎とハンプティーは歩みを止め、アリスに向き直る。ここは森の中の泉。木漏れ日が泉の水に反射してキラキラと輝いていた。

「探してくるんだよ、“アイツ”を……どこにいるか検討もつかないしね」

「それに、ここにアリスを置いて行くと、
アイツもあなたを見付けるかもしれないですから……」

ハンプティーと時計兎が目配せしながら答えた。

「（アイツって誰？まあ聞いてもわかんないか）待つなんて……」

「待つててください、ね？」

待たなきゃどうなるかわかつてますよね？
と言わんばかりのオーラを感じ取り素直に頷く。アリスからはため息が出る。

こうしてアリスは森へ置き去りにされた。

それからしばらくなつた頃。

アリスは待つのがそろそろ暇になつて、うつらうつらと眠つやうになつたいた。

「あれ？アリス？もしかしてH、帰ってきたのぉ？」

語尾にハートマークが付きそつた声がしてうつむけていた頭をあこす。

そろりと、声がした後ろを向くが誰もいない。

「アーリースー、上だよー」

そつ声がして、樹の上から1人の少年が降りてきた。
ストップと着地したその少年をまじまじと見つめる。

「わ、きれい」

少年の瞳を見て思わずアリスの口からそんな言葉がでた。

少年はオッド・アイだった。右目が燃えるような赤色に、左目が深海ののような青色。

髪は赤紫・・・いや濃いピンクとこうべきだろひ。

頭には猫の耳。お尻には猫の尻尾。どうやら時計兎と同じ獣人らしかった。

パークーを着た青年は、顔にニヤニヤとした笑みを浮かべている。

「アリスウ？」

その声でアリスはハツとした。

「あ、その凝視し過ぎで『めんなさい』。

それに、私記憶喪失で・・・悪いけどあなたのことわからないの」

ハンプティーのときを畱い、そう答える。

急に俺の事覚えてナイんだア。と青年はしゅんとなりアリスはあわてた。

「『じつめんなさい』…」

何も自分が悪いわけではないけれど謝つてしまつ。

「いいよー、気にしてないからア。

ちよーっと悲しいけどオ、反響の国のバカ王が悪いから

「パツ」と笑つて言つてみせた。

「じゃあ、初対面ではないけど自己紹介だねえ。オレはチョシャ猫。この国の武盲なんだア」

私と同じ。と駆くと

「おつかしいなアー、覚えてるの?」

「いつ問われた。」

「覚えてはないけど・・・時計鬼とかハンパーティーとかと会つてて」

ふうんとチエシャ猫は面白くなさそうに顔をふでぐされさせる。

「そりいえば、時計鬼がアリスの迎えいくんだつたー。
ちエー、せつかくオレとアリスは恋人だつたんだよ、とかウソ教
えたかったのにイ」

そのとき、心底アリスはチエシャ猫と先に出会わなくて良かつたと
思った。

記憶喪失だから、きっとチエシャ猫の言つことを信じてしまつてい
ただろう。

「まあ いつかあ。

ところで、アリスをこの森においていくつてことはあ、オレを探
してんのかなあ?」

「へ? どういうこと?」

アリスが聞くと、チエシャ猫は唇に手を当てて喋る。
いかにも得意げ、といった様子だ。

「オレ武官だけど気まぐれ、超気まぐれなのオ。でえ、住む所をこの
森内で転々と変えてんだよねー。」

それにい、オレ自分でいうのは何だけど、人に命令されるのは大嫌いなワケエ。

呼び出してもこないしい、力ずくで連れてくるしかないんだよお「

よくそんなので武官という職業が務まるな・・ヒアリスは色んな意味でチエシャ猫を感心した。

それにチエシャ猫を雇っている黄昏の国も凄いと思つ。

すると、チエシャ猫はアリスの心を見透かしたように言葉を繋いだ。

「でもねえ、オレアリスが大好きだから。アリスに命令されるのは大好きなんだあ！」

武官になるつてアリスが言つたからオレも武官になつたんだよお？ねえ、折角だからなんか命令して？ね？」

アリスは思った。

時計兎はSだけど、もしかしてチエシャ猫はMだつたりするのか？と。

抱き付いてくるチエシャ猫を見てアリスは本日2回目のため息をついた。

4・卵男とチェシャー猫 中編（後書き）

登場人物紹介

チェシャー猫（16歳）

瞳：右は青色 左は赤色 髪：赤紫色

武器：小双刀

特技：高い所に登れる

趣味：アリス（？）

備考：獣人で猫。語尾を伸ばす癖がある。

森に住む武官。

とても気まぐれで（アリスに対してだけ）M。

好きなものはアリス。

嫌いなものはそれ以外。

5・卵男とチエシャー猫 後編

（卵男とチエシャー猫3）

「でもでさー、アリス何か命令はあ？してくれないのー？」

「命令つて言われても・・・」

しばらくぐだぐだじょつかと悩むが、やがて思い付いたように手を叩いた。

「時計兔とハンプティーが探しているのはあなたなんでしょう？
だったら、時計兔とハンプティーと合流したいし、2人を探して
ほしいな」

そして、できれば連れて行くか、連れてきてほしいとも思つ。

「ムゥー・・・ほかの男のためつているのが気に入らないけども。
しようがないなあー、連れて行つてあげるよオ。ちょっとだけ、
ガマンしてねえ」

そう言うが早いがひょいとチエシャー猫はアリスを抱きかかる。
正直、恥ずかしい格好で。

（「これつてお姫様抱つー」・・・！？は、恥ずかしい）

「でもでも、どうやって見付けるの？いくらなんでもわからないで
しょ？」

アリスは恥ずかしさを紛らわすためにチエシャ猫にとにかく話し掛けた。

「オレは猫だかんねえ、耳とか鼻はいいんだよつ」

「鼻が良いのは犬なんじや・・・」

突然ひょいと チエシヤ 猫は樹の枝の上にアリスをお姫様抱っこしたまま飛び乗った。

「なつ何をして・・・!?

「じゃあ行くよ?」

「えつ行くつ？」

チヨシャ猫がやうに「コと笑い、つられて（引きつい）笑いをしてしまひ。

「Let's GO—！」

猛スピードでエシャンプーは樹の枝を飛び乗りながら駆け抜けた。

だ。
かくして
かくして

「何か妙な音がすると思いません?」

一方こちらは、チェシャ猫を探していた時計兎たちだ。

チェシャ猫と同じ獣人の時計兎はハンプティーにそう話しかけた。

「妙、といふか変、といふか・・・叫び声のようなものが聞こえる気がするのですが」

「さあ?君は耳がいいから。ハア・・・全く、チェシャ猫はどこにいるのやら・・・」

ハンプティーはと言つて相手にしなかつた。しかし段々、その音が人間の耳でも聞えるくらいに近くなつた。

「いっいいいやあああああつあ!!!!下ろしてええ!!おちつ落ちるつ!!!」

この声はまさか、と2人が思つたと同時に音源と青年が現れた。

「アリスッ?」

「チェシャ猫つ?」

上からトンつと降りてきた2人に、驚いたような呆れたような声を上げた。

「バカー!!チェシャ猫!!樹の枝の上を走るなんて!!」

「大丈夫だつてエ。アリス軽いしさア」

「 もうこいつ問題じゃないでしょ！」

そう言い争いをされて、時計兎とハンプティーは無視された。
内輪モメ。どうやら2人には気付いていないようだ。

「 もうやめよ…。今後からずっと、永久に…」

そうアリスが振り向いたときに

「 あ、時計兎、ハンプティー？」 いた、んだ…。」

アリスは恥ずかしさから顔を朱色に染める。
一方ハンプティーと時計兎はやつと気づいて貰え、安堵したかのよ
うな表情をした。

6・イカレ帽子屋と初戦闘 前編

（イカレ帽子屋と初戦闘1）

「あと1人欠けてますよね」

その時計鬼の発言にうんうん、とハンパーティーとチョーシャ猫は頷く。

「あと1人つて？」

「ああ、大抵の場合は僕とアリス、時計鬼、チョーシャ猫ともう1人のメンバーで行動していたんだよ」

アリスの問いにハンパーティーはにこりと答えた。

「どんな人なの？那人」

「ええっとねエ・・・イカレ帽子屋」

「は？」

チエシャ猫の答えにアリスはつい、素つ頓狂な声をあげる。

“イカレ”帽子屋・・・間違いなくそう言つた。

「だから、イカレ帽子屋です。

名前は帽子屋。イカレ帽子屋というのは他国での通り名なんですよ

時計鬼の説明だ。だが、なぜ“イカレ”なのだろう。

「・・・その心は？」

「イカレでるくらーに強い・・・ってことだよ。僕たち武官の中では最も強いくらいだから」

そんな人と今から会うなんて大丈夫だろうか。とアリスはすこし心配になる。

その心配事はしばらくしてから的中してしまったのだった。

不意に、前を歩いていたハンプティーの歩みが止まった。
思いもよらなかつたアリスは止まればずにハンプティーにぶつかつてしまつ。

「うー..どしたのハンプティー」

アリスはぶつかつた鼻先を押さえる。
ハンプティーは「めん、と謝つてからある方向を指差した。

「着いたよ、ここが帽子屋の家、といつか本家だ」

意外にもレンガ造りの普通の家である。
怖そうな印象だつたのでもつと雰囲氣のある洋館などをイメージしていたアリスにとつて予想外だつた。

「あの、本家つて？」

「武官は本来、城下町や城内の武官宿舎で暮らすんですよ。

けれど、それとは別に実家など離れた場所に自分の家を持つんです。それが本家です」

丁寧に時計鬼は説明してくれた。
アリスも村に自分の家を持つていて、あれが、アリスの本家ということだ。

「じゃあ・・・呼んでみようかア？おーい、帽子屋あー」

チェシャ猫がそう呼びかけるが反応ナシ。

「いないのでしょうか。珍しいですね」

「！」の辺りを探してみよう

その2人の提案にアリスは頷いた。

「でも、アリス。アリスはもううん」

「わかつてゐるわよ。！」で待つてゐる・・・でしょ？？」

よくおわかりで。と時計鬼が目を細める。

方向音痴、記憶喪失のアリスは無闇に動かない方がいいのだ。
迷われたらそれこそ迷惑になるのだから。

「でもお、俺は探さないよオ？面倒臭いしい・・・それにアリスの
傍に居たいからねエ」

チェシャ猫は欠伸をしながらそう言つと、

アリスに腕を絡めてくる。アリスはその腕を振り解いた。

「ダメ。チエシャ猫も探して、お願い」

「ハア、しょうがないなア。アリスの上目遣いには適わないしい。わかつた、探せばいいんデショ?」

頭をポリポリと搔くと、チエシャ猫は腰掛けっていた体を起き上がらせる。

「じゃあ行こうか。アリス、留守番頼むよ。帽子屋が戻ってきても待つて」

そう行って、3人は探しに行つた。

(また・・・・置いてけぼりか)

アリスはわかつてているけれど、すこし眉をよせる。

「どうした、何を怒つている」

「そりや怒るわ。私ばかりいつも置いてけぼり、よ?

記憶無かつたとしても、ちよつとは頼つてくれたつて・・・・つて誰!?」

時計兔たちとも違う、低い声。

ノリで思わず質問に答えてしまつたが、アリスは反射的に前に飛びのいた。

おそるおそる後ろを向くと、そこにはハンチング状の帽子を深く被つた青年が立つていた。

7・イカレ帽子屋と初戦闘 中編

「イカレ帽子屋と初戦闘」

「記憶がない・・・といつ」とは記憶喪失か？」

青年が腰に手をやりしきつた。

「ええ、記憶喪失よ。だからあなたのこともわからないわ」

おそらく、外見からして帽子屋だらうといつとは安易に予測できる。

「あなたが帽子屋・・・さん、よね？」

「そうだ。俺が帽子屋。・・・・アリス、少しお手合わせ願つてもいいか？記憶と供に腕も落ちたのか、見たい」

「ええつ！？ち、ちょっと待つ・・・！」

帽子屋はハンチング帽子をどこかへ投げ捨てた。

願つてもいいか？と聞いている癖に有無を言わさず、大剣で斬りつけてくる。

アリスの心配事は正に的中だ。

「待たない」

第2波。冷たく言い放たれた言葉にアリスはゾクッとしながらも大剣を紙一重でかわす。

あんな大剣、こんなダガーでは受け止められない。

それに、アリスはただでさえも女だ。無理に決まっている。

「くつ・・・！」

「かわすだけか、アリス？以前のお前ならすぐにこんな勝負片付けていたぞ」

「つるさいわね！知らないわ、そんなの」

虚勢を張るが、このままではまずい。

アリスの体力にも問題ある。何とかしなければ、とは思う。

しかし、怖い。アリスの心には恐怖しかなかった。

理由は・・・帽子屋の目は本気だったから。

手合わせ、と言つても相手は手加減するつもりなんて、毛頭無いらしい。

ビキイ。

と、アリスに突然の頭痛が襲う。

「ひんなときつに・・・！」

意識を失いそうな激痛。耐えがたい痛み。どうすることもできなかつた。

『帽子屋・・・本つ当に組み手とかでも手加減ないわね』

『やうか?』

これは以前のアリスの記憶。記憶喪失になる前の一部の記憶。頭痛とともにアリスの頭の中でその記憶は鮮やかになつていく。

『そりよ。常に戦場にいるよつて殺氣放つてのよつて云ひでしょ、普通』

『へえー・・・やうなのが。全然自覚ないが』

『あのねえ・・・ま、私はあなたの弱点知つてるし、いいわ』

『何? 何だ、教えろ』

『さあね、今度また戦つたときに教えてげる』

それは最後、帽子屋と手合させしたときの記憶だった。

(弱点。帽子屋の弱点は“アレ”だ・・・イチかバチか・・・!)

頭痛と戦いながら大剣をかわしていたアリスは、恐怖を振り払い意を決してトンファーを構えた。

7・イカレ帽子屋と初戦闘 中編（後書き）

登場人物紹介

帽子屋（20歳）

瞳・黒色　　髪・こげ茶色
武器・大剣
特技・・・ 戰闘
趣味・・・ 紅茶を飲むこと
備考・・・ 意外と手先が器用。

黄昏の国の武官。

武官の中でも1番強いが、
フェミニストのためアリスには弱い。
普段は帽子を被るが戦闘では帽子を取る。

8・イカレ帽子屋と初戦闘 後編

（イカレ帽子屋と初戦闘③）

頭痛と戦いながら大剣をかわしていたアリスは、意を決してダガーをトンファーに持ち替えた。

そして、帽子屋が大剣を振り下ろした瞬間……。
タンツとアリスはジャンプする。

タイミングを間違えたら、死ぬ。

帽子屋の大剣の上にアリスは乗った。
すぐに振り落とされそうになるが、その前にまたジャンプし帽子屋の田の前に跳ぶ。

ガツン。

とトンファーで一撃。

サツとすぐさまアリスは帽子屋から離れた。

一瞬の出来事だ。

「つー・・・キツイな。お前のトンファーは

帽子屋がトンファーで殴られた頭を摩つた。^{さす}

ハアハアとアリスは息切れする。

「フウーと呼吸を整えると帽子屋にビシッと指を差して一言。

「帽子屋。あなたの弱点はね“機敏さ”がない所、よ」

帽子屋と戦ったときに、アリスを襲つた頭痛。
そのおかげでアリスの記憶がほんの一
部だつたたけれど一瞬戻つた。
帽子屋はそれを聞いて、驚いたような顔になつたがすぐさまフツと
笑う。

「今度から改善するよ」

地面に落ちていたハンチング帽子を被りなおすと思いついたように
帽子屋が言った。

「ああアリス。お前・・・・その、スパツツ履いたほうが良い」

「え

「だからスパツツ。白のレース・・・・だらう・・・・

「は？」

アリスは何が白のレース?と聞き返そうと思ったが、すぐさま思い

当たり顔をボツと顔を赤くした。

顔から火がでる。で仕方がないだろつ。

「み、みみみ見たの?」

緊張しそすぎで舌がうまく回らない。アリスの体から嫌な汗がでた。

「・・・不名誉だな。アリスが跳んだ時に、見えた」

「「うう・・・嘘!履いとけば・・・良かつた・・・」

あのとき、スパツツを鞄に入れなければ良かつた。ちゃんと履いておけば良かつた。

すっかり後悔先に立たず、である。アリスの悲痛な叫び声が響いたのだった。

「で?また、私達がいない間に出来つてるんですか」

帽子屋の淹れた紅茶を飲んでいると、3人が戻ってきた。
正直な話、帽子屋が淹れてくれた紅茶はとても美味しい。本人曰く
銘柄にも淹れ方にもこだわつてること。
もつと飲んでいたかつたのが本音だが、仕方が無い。座つていたア
リスは腰を浮かせた。

「これじゃ、やつきのチヨシヤ猫のときと同じパターンじゃないか」

ハンプティーが溜息をつく。まるでこちらが悪いみたいだ。
大人しく待つてただけよ。と、トゲトゲしく言い返すと
そういうつもりで言つた訳じゃないとハンプティーが慌てて弁解し
た。

「ま、いいんじゃないか?ナイトメアが全員揃つたからな

ナイトメア?と聞き返すと後で教えてやる、と口を封じられる。

「帽子屋とハンプティーはまだ、まともそう・・・

アリスがボソリと呟く。少なくとも、
泣き顔を可愛いと言つたり、初(?)対面で抱き付いてきたり、
命令されるのが好きだと言つたり、樹の枝を全速力でかけぬけたり・
・・はしないだろう。

「じゃア、城に行くの? ハア、面倒くさいなあ。アリスがいるか
らいいけどオ」

そうだ。次の目的地は城。

これから始まる物語の全ての始まりとなるであろう場所だった。

おまけ1 アリスに50の質問

「おまけ・アリスに50の質問」

01 お名前をどうぞ…！
アリスよ。

02 性別は？

女。

03 誕生日！

冬生まれなの。

ちなみに私は17歳よ。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

髪は淡い金髪で、瞳の色は蒼色。

すこし髪にウェーブがかかっていて、よく美人だとは言われるわ。
母が綺麗だったらしいからね。

05 動物に例えると？

うーん・・・チエシャ猫には兔っぽいって言われたわ。

チエ「そりゃあ、意外と寂しがりやだしい、色気もあるしね！」

06 特技は？

一人暮らししていたから家事全般が得意ね。

07 ご趣味は？

お菓子作りよ。お茶会の時、よく作るの。

08 将来の夢など

特にない・・・歴史に名は残したいと思つてゐるけれど。

09 好きな言葉とかある?

「後悔先に立たず」前向きに生きていかなきや!

10 好きな動物は?

主人に忠実だし、犬が好きよ。

(時計兎とチュシャ猫の視線を感じる)

11 好きな色

純白色。

12 好きな料理

基本的にはなんでも食べれるから、特に好きなんて物はないわ。

13 好きな異性のタイプ

うーん・・・誠実な人がいいわね。

14 好きな同性のタイプ

基本的にサッパリとした性格の子とか・・・

15 座右の銘は?

そうね。

16 暇なときなにしてる?

お菓子作りか、お茶会。

17 旅行とか好き?

ううん。戦争の使者としか他国には行ったことが無いから、観光はしてみたいわ。

可も無く不可もないつてとこね。

18 癒されることって何？

自分で作つたお菓子を美味しいって言つてくれる」と！

19
一緒にいて落ち着く人はいる?

ハンプティーが落ち付くわ。

20 ぶつちやけその人は恋人です！？

まさかまさか！－“ ただの ” 幼馴染よ！ね？ハンパーティ－。

ハンニル……そだね……

みの里。

22 それを解消するために何か努力はしてる？
修行しているけど、ダメね。もつと頑張らなきゃ。

二三
セイリムの御内閣

家庭的な所とかで、私自身は自慢できることなんてないわ

人生で一番轟くかの心には何?

ハンパーティに人生で初めて作った（失敗してたみたい・・・）お

無理して食べてくれたうえに、美味しいって言つてくれた時よ。

25 人生で一番驚いたことは？

反響の国のキングに結婚してくれと言われた時・・・
ドッキリ大成功つて書かれた看板ないか探したくらいよ。

26 人生で一番楽しかったこと

武官の試験に合格したことだわ。

27 人生で一番怖かつたこと

初めての戦場。戦いの冷酷さを身に叩きこまれたもの。

28 人生で一番辛かつたこと

武官の一人が私を庇つて大怪我を負つたこと。

29 外向的？内向的？

どちらかっていうと内向的かもね。

初めて会つた人とかと打ち解けるまで時間がかかるし。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
届け出るわ。

31 ジャあ、1000万円もらいました。どう使う？
孤児院とかに寄付したり、教会とかに寄付したりね。
貧しい地方に寄付もいいわね。

32 子犬が捨てられていた！-愛らしい声で鳴いています。どう
である？
捨てて、飼主が見つかるまで世話をしてあげる。

33 突然頼みごとをされました！ あなたなりがつする？

内容を聞いてから、私にでもおひるとなうするわよ。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ…どうしていい…?

自分の非を認めて、許してくれるまで謝るわ。

35 嘘はつけるタイプ?

ええ。あんまり、つきたくないけど。

でも、使者は駆け引きが上手じゃなこと務まらないしね。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない?
いいえ、バレないと思うわ。

だけど唯一ハンパーティにはバレたりするのよねー・・・どうして?

37 何か癖ある?

自分ではあんまり自覚が無いのだけれど、髪をいじる癖があるとか。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない?

あるわ、もちろん。

39 あるつて答えたそこのあなた! じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください!!!

時計兔のセクハラ! ! !

チエシャ猫の変態! ! !

40 ……酸素マスクいる?

いるわ……ハアハア、他にも言いたいことがあるけど、もう
いい。

41 あなたにとつて一番大事なものは?
黄昏の国、ね。

この国は、私の全て・・・って言つたら大げさだけど、それくらい大切な。

42 自分といつたらコレ！ みたいなのがある？
金髪碧眼は安易かしら・・・？

43 崇拝してる人とかいる？
いない、けど、尊敬している人はいるわよ。
私に戦い方を教えてくれた、師匠ね。

44 デウショウ！ 財布を掏られた！！
落ち付いて、被害届を出すわ。

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
変人に好かれる率かしらねー・・・

46 こいつには敵わないっていう人いる？
時計兎よ。チエシャ猫とかなら言うこと聞いてくれるし・・・
時計兎はドジだしね。嫌がつても喜ばれるのよ。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
えーっと・・・思いつかないわ・・・
あーー！そうだ。私の初恋は私の師匠だったのよ。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場つてどうよ？
かなり受難ね。不幸だわ。

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言つちゃえ！
もつと私を幸せにしてよね！これ以上不幸にしないで！！

50 ここまで読んでくれた方に何か。

ここまで読んでくれてありがとう。

これからも頑張るから、応援ヨロシクね。

オリキャラに50の質問

「Water Future」<http://waterfuture.re.definition-web.com/orichara50.html>

「王都への道中と他国の呼名」

パカラツパカラツと帽子屋の家から城を指して馬を歩ませた。

「ねえ、チエシャ猫」

「ん? なあにー、アリス」

アリスは記憶喪失のせいで馬を上手く扱えないので、チエシャ猫と相乗りしていた。

「密かな疑問なんだけどね、この国つて実質強いの?
反響の国とかも強い? · · · あと王つてどんな人?」

大まかには説明されたが、細かい所までは聞かされていない。
まだ城に着くまではこのペースまでいくと2日かかるらしいので、
どうせならとアリスはチエシャ猫に聞いてみた。

「正直、この国は強いよ。反響の国も強いけどね」

詳しく聞くと、黄昏の国は“量より質”らしい。

兵隊は他国と比べて小規模らしい。だが、武官1人1人が他国と比べ強い。

しかし、それとは対照的に反響の国は“質より量”派だそうだ。
大帝国なので人数がやたらと多い。

「まあまあ、この国は結構周りの国から恐れられてるらしいよ

オ？

確かに一、『イカレ帽子屋』にイ『三月白兎』とかあ『殻のハンプティーダンプティー』、『チエシャー猫』、『黄昏の国のアリス』とか屈強武官がいるしねえ～』

これらは他国でのアリスたちの呼名だ。イカレ帽子屋は言わずともわかる。

三月白兎とは、時計兎のことなのだ。3月はウサギの発情期。その時期のウサギは気違いで、おまけに強い。なので時計兎も三月白兎と呼ばれている。

殻のハンプティーダンプティー。ハンプティーのことである。しかし、詳しく意味はわからない。ハンプティーが卵料理好きとうことが

関係しているのだろうか。・・・よくこの意味は知られていない。

アリスとチエシャ猫の呼名はまんまだ。チエシャ猫はチエシャーの猫のようだから。

アリスは良い呼名が見つからなかつたのか何なのか・・・

自分の呼名が適当すぎることに、アリスは少々不満そうにした。しかし、これらの呼名は全て・・・見下して嘲^{あざけ}つてている。“イカレ”や“3月”など呼ぶて嬉しがつたりなどするはずも無い。

「・・で?王つてどんな人なの?」

「アリスウこれ以上喋ると舌噛むよお

「うサラリと流されてしまつた。

「もう！ 答えてよね。 答えてくれないなら良い。 他の人に相乗りさせてもらつてくるわ」

「ええ……アリスひじょい。答えるからやめてH」

と、手綱を握っていたチエシャ猫の腕が、アリスの腰にがっちらりと固定されてしまう。

「ちょ、ちょっと・・！危ないからちゃんと手綱持つて！」

「アリスが言うならア」

(選択ミスだわ。何で、私とチエシャ猫が相乗りしてるので?)

心の叫びは誰とも知られること無く
空しくアリスの心中でこだました。

「王都への道中と他国の呼名」

そもそもアリスとチョシャ猫が相乗りしている理由はチョシャ猫が、『アリスと一緒にないと行かないよお?』 こう黙黙をこねたせいである。

「アリス」

と、その様子を見ていもたつてもいられなくなつた時計兎が馬を歩ませて來た。

「大丈夫ですか? "バカネ" の世話は疲れるでしょう? なんなら私と相乗りしますか?」

にっこりとドス黒い笑みを絶やさず時計兎が言つ。アリスはその笑みに恐怖を感じ逃げ腰になつてしまつ。

「大丈夫だよお? 年中発情してゐる"三月変態兎" よつはマシだからあ

しかしチョシャ猫は物怖じとせず言い返す。

そしてその瞬間、両者お互いから殺氣という殺氣が発した。

「(何ですか? チョシャ猫、この私に喧嘩でも売つてるんですか?)

「(うん。オレのケンカは少々値が張るけどねえ)」

「（いいでしょう、買つてあげますよ。ですがそれなりの覚悟はあるんでしょうね）」

アリスには2人の心の会話、つまりテレパシーが聞こえたが、こう思い込むことにする。

「（今のは幻聴よ！…そうよそう。違いないわ）」

「あのハンパーティー、帽子屋！相乗りさせてくれる？」

火花を散らす2人を放つておき、先頭にいた2人にそう呼びかけた。

「どうしてだい？ チェシャ猫は？ ケンカか・・・」

「あの2人仲悪いの？」

「仲悪いというか犬猿の仲だな。
いや、猫兎ねじとの仲というべきだな」

帽子屋が感慨深くそう言った。

くわしく聞くと、時計兎とチェシャ猫は獣人という種族同士らしい。獣人は産まれてから10歳まで完全な獣の姿をしている。

10歳から今の時計兎とチェシャ猫のような半人半獣になり、成人と認められるのだ。

かつてあの2人が10歳未満のとき、時計兎はチェシャ猫に食べられそうになつたことがあつたとか・・・
いくら時計兎とはいえ兎。兎V.S.猫では例え兎の方が年上でも猫のほうが強いだろう。

まあ、こんなことがあってそれ以来、時計兎はチェシャ猫が大っ嫌いらしい。

チェシャ猫も、10歳を過ぎてから時計兎に逆襲され大っ嫌いだと。

「（ま、しかもそこにアリスがねえ・・・）」

「（絡んでくるから余計厄介な仲になつたんだが。本人は自覚なんて全くないしな）」

そのことを知らぬは本人ばかりなりであつた。

「で、どつちか乗せて。早くしないと夕が暮れちゃうし。このまま止まつておくのも悪いから」

そうだ。先ほどから全くと言つていいいほど進んでいない。やはり、チェシャ猫にまかせるのは無理がある。人選ミス。だと帽子屋は思つた。

「ハア、じゃあ俺でいいんじやないか？」

「ダメだよ」

帽子屋はそう言つがすぐに反対の声があがる。
ハンパーティーだ。

「アリス、帽子屋は駄目だよ。“むつり”だから。僕の方がいいよ？」

結局、ハンパーティーもアリスと相乗りしたいだけだと思うが帽子屋は大人しく押し黙る。

「（俺だって、アリスと相乗りしたい。普通、当たり前だろ？）何が嬉しくて
男と相乗りしなきゃならないんだ。・・・だいたい、むりつりつてなんだこの“卵”！）」

しかし内心では思いつきつ毒づいている。

そんなこんなであまり進まないまま、一日を終えてしまつといつ事態。

次の日は死ぬ氣で馬を走らせた（馬は「臨終様」という程可哀想だが）
そのおかげで城に着いたのだった。

ねまけ2 時計白兎に50の質問

～おまけ・時計白兎に50の質問～

01 お名前をどうぞ…！

時計白兎です。時計兔と呼んでくださいね。

02 性別は？

男です。

03 誕生日！

春生まれです。

歳は20歳です。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）
瞳は青色で髪は蒼色です。

あと兎の獣人なので兎耳と尻尾がついてますよ。

05 動物に例えると…？

兎が妥当でしょう。

06 特技は？

お茶を淹れることですかね。

自分でいうのもアレですけど得意ですよ？

07 ご趣味は？

読書です。中でも神話や古文書は好きです。

08 将来の夢など
アリスの夫ですねえ。

09 好きな言葉とかある?
「因果応報」です。

10 好きな動物は?
え? 兔ですね、同じ種族なんで。
猫は大嫌いですけれど。

11 好きな色
碧色が好きです。

12 好きな料理
私は肉より野菜派です。ベジタリアンなんですよ。
どつかの猫と違つて。

13 好きな異性のタイプ
そりやもうアリスしかないでしょう。
あなたも野暮な質問をしますね。

14 好きな同性のタイプ
・・・うーん、アリスに嫌われていて
アリスに全つつく興味ない奴なら考えてあげます。

15 座右の銘は?
「蓼食う虫も好き好き」好みは人の勝手ですから。

16 暇なときなにしてる?
暇なんてあるわけないじゃないですか、何言つてるんですかあなた。

17 旅行とか好き?

嫌いです。面倒臭いです。

18 癒されることつて何?

アリスの笑顔か泣き顔を見たときですかねえ。

19 一緒にいて落ち着く人はいる?

落ち着く人・・・はいないです。

アリスは一緒にいると落ち着くと「うより激しく燃え上がりますから。

アリ「まつて、それ何が燃え上がるの?」

言つたほうがいいですか?

アリ「・・・いや、いいわ」

20 ぶっちゃけその人は恋人です!?

ノーロメント。

21 コンプレックスとかあつたりなんかしちやつたりする?
無いですよ。私にそんなものあると思つてるんですか?

22 それを解消するために何か努力はしてる?
だから無いと言つてはいるでしょ!

23 じゃあ逆に自慢できることは?
耳がいい所とかですか。

24 人生で一番嬉しかったことは何?
アリスが私だけに手紙を送つてくれたこと。

25 人生で一番驚いたことは?
アリスが監禁されたことです。
あのクソキングめ。

26 人生で一番楽しかったこと
ナイトメア全員で戦つたこと。

27 人生で一番怖かつたこと
幼いころどつかの野良猫に食べられそうになつたことですよ。
人生の汚点です!!

28 人生で一番辛かつたこと
ノーコメント。

29 外向的? 内向的?
内向的なんじやないですか。

30 道に1000万円（日本円で）が落ちてました。どう使つ?
どうもしません。素通りです。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使つ?
いりませんけどねえ、まあ、アリスにでもあげますよ。

32 子犬が捨てられていました!! 愛らしい声で鳴いています。どう
である?
無視です。犬は猫の次に嫌いですから。

33 突然頼みごとをされました! あなたならどうする?
即断ります。自分でやってください。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しあつたよー。ビリヒンヒン…?
放つておきます。

35 嘘はつけるタイプ?
もぢりん。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃつたりしない?
いいえ、バレませんよ? 墓場までバレない自信があります。

37 何か癖ある?

片眼鏡をかけなおす癖でしょうか。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない?
はい、ありますよ。

39 あるつて答えたそこのあなた! じゃあ「」の穴に向かって
思つ存分叫んでください!!!
では遠慮なく・・・

バカネゴセツヤトベタばつてくださいー!

40 : . . 酸素マスクいる?

いつません。私を舐めないほうがよろしいですよ。

41 あなたにとって一番大事なものは?
アリストのみ。

42 自分といつたらゴー! みたいなのある?
兎の耳と片眼鏡。

43 崇拝してる人とかいる?
いませんねえ。

44 デウジョー！ 財布を掏られた！！
減るものじゃないですしいですよ。
アリ「減るものでしょーー！」

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
戦略です。

46 こいつには敵わないっていう人いる？
いいえ？

47 全部答えてきたね？ ジャ あこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
そうですね。小さいころはいじめられっ子だったんですね。
いまうなのはそいつらのせいかもですね。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ？
影が最近薄いような気がするのですが・・・

49 こじわとばかりに生みの親になんでも言ひやえ!
目立たせてください。

50 ここまで読んでくれた方に何か。
ご苦労様です。

これからもアリスと私の恋の行方に向後ご期待！！！

オリキヤラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfut>

h
t
m
l
u
r
e
f
i
n
i
t
o
-
w
e
b
.
c
o
m
/
o
r
i
c
h
a
r
a
5
0
.

11 ハート女王とジャック 前編（前書き）

遅くなりましてすいません。
では新話をどうぞ。

11 ハート女王とジャック 前編

（ハート女王とジャック1）

「（）愁傷さまで・・・」

アリスと田の前にいる屍と化した馬に哀れみの田を向けた。
無理もない。城下町までぶつ 続けで走らされたのだから。
馬をこのようにした犯人たちは城へ行っている。
ここで待っているように言われ、ずうつと待っているのだ。
またまたアリスは置いてけぼりになつた。

「馬も大変よね。私も大変だけど・・・」

苦笑しながら、やんわりと馬の鬚たてがみを撫なでる。

栗毛の馬は唯一の安らぎにてうつとりと、気持ち良さそうに田を閉じ
た。

ふわっと暖かく優しい風が吹く。

その風は春独特の花の香りがする。

暖かな春の陽を感じ、次第にウトウトと眠りの渦に沈み込んでいつ
た。

この世の全ではあたしのもの。
あたしが願えば何でも手に入るの。

あたしに逆らうものは全て・・・壊しちゃえればいいんだから。

「やつぱり、城下町は華やかで良いわね」

あたしはとても名人。何たつて、黄昏の国^{トシノクニ}の頂点^{テツジン}なんだもの。有名人であるあたしはフードを被り、城下町へお忍び中。

ドンッ

「キヤッ・・・・」

「うおっ！？ わわわ、譲ちゃんすまねえな」

何この男。かつこ良くもないし、価値無しね。
そう思つてあたしはパンパンとスカートを叩く
ベチャッと音がして手に何かが付いたわ。

「やつやだー！ ケチャップー！」

男とぶつかつた時に相手が持つていた食べ物のケチャップが
スカートについていたのよ。

「うわあー・・・ 悪いなあ、本当にごめんよ」

「・・・ない」

「え？」

「許さない！――あんたなんて死刑にしてやるわ！――！」

このワンピースは、あたしが城下町へお忍びで出てもわからなによ

うにと

自分で必死に作ったものだつたのに・・・！

「はあー!?」

素つ頓狂な声を男があげる。なぜ死刑?と言つ表情だ。

「ちょっと・・・あの人“死刑”って頭おかしくない?」

「クスクス、確かにそうかも」

ざわつきと共に嘲りが聞える。ムカつくムカつくムカつくわ!!--!

ただでさえイライラしているのにね。

「何よ!今笑った奴も死刑にしてやるわよー!」

こんな高位のあたしを嘲笑するなんて、許されると思つていてるのか
しら?

残念、あの人たちの生命はもう終わり。

「あたしの名前は何だと思つ?」の国の女王ハートよ

フフンと笑みながらフードをとる。笑つてた人達の顔が一気に真つ
青。

クス、面白いわ、最高よ。

「は、ハート女王を・・・ま・・・うつ わああああ!俺、本当に殺さ
れちまう!!--」

あたしに逆らつた奴らは全員打ち首にしてやつたわ。

キングクラスのスペード兄様や、エースクラスのダイヤや、ジャッククラスのクローバーに「やめろ」と言われるけれど気はない。

何でかつて、黄昏の国は王より女王の方が権力が強いから。王は他国との交渉のための御飾り。女王は自國では何でもし放題なんだから……！

「いやああーハート女王様許してくださいーーー！」

笑つた奴らもそいつ言つて懇願してくる。

「さよなら、今の家に家族や友人たちに別れを言つたほうがいいわよ？」

そうよ、そう。この世の全てはあたしのもの。人の生命でさえもね。

「ま、待つて！」

そこに静止の声がかかる。

「殺すなんてやりすぎよー相手も謝つたじゃない！」

ああ、こんなあたしでも一番大つ嫌いな最悪女。
名前はアリス。初恋だつたハンプティーの恋心を奪つた
口づるさい凡人武官。

監禁されてたくせにどうしてまたここへ戻ってきたのよ？

11 ハート女王とジャック 前編（後書き）

登場人物紹介

ハート（16歳）

瞳：紫色 髪：金色

武器：ハート型宝石の付いたステッキ

特技：・メイク

趣味：・宝石集め。ードレス集め

備考：・左頬にハートマーク（紅色）がある。

黄昏の国クイーンクラスの女王

王であるスペードとは兄妹。
自分本位で我慢。

露出的なドレスを好み、美少女。

「ハート女王とジャック」

眠りから覚めると、何だか騒がしかった。

近づいてみると女の子と男性が言い争いをしている。

ただ、単純にやりすぎだと思った。だから静止の声をかけた。高々、服にケチャップを付けた程度で打ち首死刑だなんて。

これは、一体どうなっている・・・の？

チョシャ猫たちから聞いた王というのは優しい人だと。でも、その王の妹の女王はどうなっているの？

その場では多くの疑問が混ざり合っていた。

アリスは王の妹であるハートが、王とは性格が真逆だから驚いている。

ハートは軟禁されていなくなり、清々したと思っていた大嫌いなアリスがここに戻ってきたから驚いている。

それは周囲の人々も同じこと。

反響の国の王に見初められ、この国から消えた我が国の女性武官アリスがどうしてここにいる？

そもそも、ハートが「ここに居ることすら異質だ」。

まるで時間が止まつたようだつた。

同じ金髪でも、淡い色のアリスと濃い色のハートでは見る人に違う印象を与える。

空のような蒼の瞳と、アザミのような紫の瞳はお互い見詰め合つたまま動かない。

また、人々もその場から動こうとはしなかつたし、動く術も無かつた。

しばらくして

「取り込み中の所すまぬが」

と、どこからか男の声がする。

人々の間を慣れた動作でかいぐぐり、見詰め合う二人に近づいてきた人物。

「クローバー」

ハートがその男に向かつてそう言つた。

アリスは記憶の糸を辿り、この国で王の近衛ジャッククラスを務める青年だと思いつつ、城に住むハートにとつてとても良く見知った人物である。

アリスも記憶をなくす前はとても良く見知った人物であった。

「ハートを連れて来る様に頼まれたのでな、迎えにきた。

城には“悪夢のお茶会”のアリス以外は揃つてゐる

「ナイトメア・・・が揃つてゐるの?」

ナイトメアティーバーティー
悪夢のお茶会。

アリス、時計兎、ハンパーティー、チエシャ猫、帽子屋の5人の武官のことまとめで言う呼び名だ。

ナイトメア
悪夢由来はこの5人と戦うと、必ず数日間悪夢にうなされる。という説やこの5人が揃うと、辺り一面が悪夢のような地獄絵図となるという説。

ティーバーティー
お茶会の意味は、この5人はそれが敵地であつても・・・いや、敵地であるからこそお茶会という名の会議を開く。当初は普通の作戦会議だったのだが、何時の間にか気持ちを落ち付かせるという名目でお茶を飲むようになった。それを見た敵兵がつけた・・・と一般的にはいわれている。

以上の理由から何時からかこの5人を総合し、ナイトメアティーバーティー
“悪夢のお茶会” 略してナイトメアと呼ぶようになつたとアリスは帽子屋から聞いた。

「クローバー、どういうこと? アリスはなんでここに! ?」

「うむ、落ち付け。アリスは反響の国から逃げてきたのだがその際記憶喪失になつたらしい。我々のことも誰だかわからないとのこと」

簡潔にそう告げた。

ハートは「記憶喪失・・・! ?」と絶句している。

「あ、あの」

「アリス、某は城の使いであるから安心しても良い。
他の4人からも頼まれていてる」

クローバーの新緑の束ねた髪が風でなびく。

本当にクローバー色の綺麗な色の髪をしていた。

「いや、違うの。あの死刑って言われた人は見逃してあげれない？」

自分が口出しえることでは無いかもしない。

けれど、人として言わなければならぬと心の底から思つた。
だからクローバーに頼んだだけであつて、ハートが嫌いなわけでも、
あの男性が好きなわけでもない。
ただ、ハートは人として間違つている。

ヘリオドール石のような黄緑色の何の感情も
無いように見据えた目は

「承知」

少し笑つたように優しくアリスを見た。

12 ハート女王とジャック 後編（後書き）

登場人物紹介

クローバー（18歳）

瞳：黄緑色 髪：新緑色

武器：刀

特技：暗記

趣味：刀の手入れ

備考：右頬にクローバーマーク（濃緑色）がある。

黄昏の国の王の近衛ジャッククラス

和風を好み、古い喋り方をする。
見習い武官時代にアリスと同期。
アリスに淡い恋心をいただいている。
出身は東の島国「誇称の国」

～黄昏の王とホース～

「わ～！アリス、無事で良かったあ」

城に着いたら真っ先にチエシャ猫に抱きつかれたアリスの図である。

「チエシャ猫つ離して・・・首が・・・しまつてゐる」

ワザとではないのだろうが羽交い絞めにされ、アリスは苦しそうに喘いだ。息ができない。

「ハートが城にいないことに気付いてえ、ハートはアリスが嫌いだからアもしかしたら街で会つてるかもってねエ。
苛められてたらどうしようかと思つたよオ」

全くの聞く耳持たずだ。

さらに強く抱かれてアリスは間違なく死ぬと悟つた。

ゴツン！！

突如良い音がする。

おそるおそるアリスが目を開けると、時計兔がその辺にあつた花瓶で思いつきりチエシャ猫を叩いていた。

「いつたいなア。三月変態兎何するの？男の嫉妬は見苦しいよオ
？？」

チエシャ猫は打たれた後頭部を擦りながら文句を垂らす。

だが時計兎は花瓶を元あつた場所に戻すと、見下すように立つ。

「フン。アリスが死に掛けましたけれど? 気を使えない男って嫌われるんですよね」

ああ言えれば、いつ言ひ。

「アリスとオレのラブシーンを邪魔するなんてネエ。

気を使えないのはそっちじゃない? 空氣読めないバカウサギ」

「ア・レ・の・ど・こ・が! ! ラブシーン何ですか? ?

馬鹿な私には理解できません。ね? 阿呆猫」

どこまでも低次元に落ちていく、不毛なやりとりだ。
子供染みていて大人気ない口論に一同は呆れる。

「まあまあ2人とも、その辺にしておいて。王が、スペードが呼んでいるよ」

ハンプティーディーが割つて入りそう伝えた。

仕方が無いので猫兎は一時休戦する。

会見の間に行くべくアリスたちはゆっくりと歩った。

「あー、アリス。言つておくが王だからといって敬語は使わなくていいぞ」

帽子屋は、緊張した面持ちのアリスにそう言つ。

誰がどう見ても、アリスの顔は引きつっている。

「や、そうなの？」

謙譲語や尊敬語を使わなくても良いなんて。
王である人物に多少失礼ではないか。

「うん、アリスは何時も通りにしておけばいいんだよお」

チエシャ猫は呑気に笑うが、アリスにはそれができなかつた。

「アリス、良く反響の国から戻ってきたね」

会見の場につくと相手の第一声はこれだつた。

恐らく、真中の王冠を被り玉座に座つている人物が王のスペード。
その右に座つているのがアリスと先ほど会つた女王のハート。
左右に立つているのは、ジャックのクローバーと
エースのダイヤであることは予想がつく。

王はハートと同じような金髪に紅い瞳。狂眼と呼ばれる赤系統の瞳
だが
どこか優しげな印象をもたせた。

（本当に兄妹なの？あの2人・・・）

右に立つてゐるダイヤは陽だまりのよつた橙の髪と
トペーズみたいな黄色の目。しかし、左目に眼帯がしてある。

ハンパーティーよりに片田に怪我でもしているのか。などと
考えていると

「アリス」

急に話しかけられビクッと一瞬震える。

「はイツ」

「「・・・・・」」

別のことを考えていたのでつい変に声が裏返る。
じーっと視線を感じ、アリスは恥ずかしさから顔を赤くしていく。

突如スピードがクスッと笑つた。

13・黄昏の王とエース 前編（後書き）

登場人物紹介

スペード（19歳）

瞳：紅色　髪：金色
武器：無いらしい
特技・・・話術
趣味・・・勉学
備考・・・左頬にスペードマーク（青色）がある。

黄昏の国の王。

ハートの兄にあたる人物。
交渉が上手く策士。

19歳に見えないくらい大人びている。
アリスに対して特別な感情を持っているようだが・・・

「黄昏のHとHース」

「アリスは本当に変わっていないね。
記憶喪失になつたといつのは本当?。」

そつたずねるスピードニアリスは「クリとつなぎいた。

「そり・・・でもよかつた。例え記憶を失つたとしても
傷一つなく帰つてきてくれたのだから」

笑つて言うスピードのお陰でその場に和やかな空気が流れた。
しかし、隣の女王によつてそれは壊される。

「良くなんかないわよ、兄様! 都合よく記憶なくして
どうせあんたがあたしにしたことも覚えてないんでしょーーー。」

ビシッとハートに指を指され、アリスは困惑する。あまりの剣幕に
たじろいでしまう。

「ハート、やめや。失礼やで」

すると右に立つていたダイヤがかばつように助け舟をだしてくれた。
スピードもそれに便乗する。

「やめないか、ハート。『あれ』は仕方のない」とじゃないか

「う、うぬやこー。どうせ兄様にあたしの気持ちなんて・・・！」

「判る訳ないし、判つてほしくない……！」

ハートは場から逃げるよつに立ち去つた。

「あ、の。“あれ”つて……？」

アリス一人がついていけず、頭の上にはさぞかしクエスチョンマークがついていることだろう。

「……この話を聞いても、自分のせいだとか思わないでくれるかい？」

はい。とアリスが返事をすると、スペードはゆっくりと語りだした。

「ハートは、本来ならば反響の国の王の下へ嫁ぐ予定だった。
しかし王様は君を好きになってしまつてね。

向こうが婚約破棄をしたんだ。ハートは嫁ぐ準備もしていたから
原因……ともいえる君を恨んだといふことだ……」

サカウフミ

という言葉がアリスの頭の中を駆け巡つたが、すぐに頭を振る。
ハートも哀れだ。政略結婚だとしてもそれは恨まれても仕方がない。

「アリス……どうかハートを見捨てないでほしい

「大丈夫です」

微笑んで言つと、スペードも微笑み返した。

「じゃあ話も終わったことだし、改めて自己紹介といこが。
俺はエースクラスをしとるダイヤルーねん」

ダイヤは人の良さをうな笑みをみせる。
陽のように明るく笑うダイヤは眩しくみえた。

スペードもダイヤの後に言葉を紡いだ。

「僕はスペード。この黄昏の国の王。

聞いてると思うけれど、ハートは女王で、僕の妹なんだ」

スペードは一歳のころ、王と女王であった父と母を「へじた」と、いうのもなんと他国で暗殺されたらしい。
まだ少年ともいえるスペードを王として、少女といえるハートを女王として

黄昏の国の激動期が始まったのだ。

王の仕事は、他国との交渉や自国の大富文富の整理。
女王の仕事は、国王代理や自國の治安を守ること。

幼き頃から神童として知られていたスペードは王らしく
歳を重ねるたびに威厳を持ち、話術に優れた。

それに比べ、甘やかされて育ったハートは

女王が本来するはずの治安を守る所か搔き回してしまっている。

黄昏の国は王と女王が協力し合って、初めて国として起動する。
だが、ハートは王に負担を掛けさせむばかりなのだ。

次に左にいるクローバーが口を開いた。

「先ほど、城下町で会つたが、ジャックのクローバーだ。
アリスとは見習い武官時代の同期であつたのだが」

一瞬、黄緑の瞳が悲しそうに揺らめく。

だが、アリスはそれに気付いてはいなかつた。

「ナイトメア、行き成りで悪いのだけれど、話したいことがある。
ここでは侍女たちに聞かれ兼ねない。国家機密にしたいから会議
室へ来てほしい」

こうして、アリスは重苦しい雰囲気からは解放された。

14・黄昏の王とエース 後編（後書き）

登場人物紹介

ダイヤ（19歳）

瞳：赤みがかかった黄色

髪：橙色

武器：体術

特技：勉学

趣味：体を動かすこと。

備考：左頬にダイヤマーク（オレンジ）がある。

黄昏の国の王の補佐。^{エースクラス}

おちゃらけているように見えるが実は真面目。

飄々としていてつかみ所のない性格。

武官ぽい文官で文武ともに秀でている。

喋り方が訛つっていて、銅の一族の跡継ぎ（予定）

銅の一族・黄昏の国の有力で昔からある一族。
あかがね

一応親王家ではあるが、今の王を認めていない。

外交には干渉せず、厳しい一族である。

（銅の一族は喋り方が、ダイヤのように関西弁訛り）

（宣戦布告と会議1）

「え、私もなの？」

ここは会議室前。

どうしてか記憶喪失のアリスまで連れて来られた。

「ああ、ナイトメアはいつも最前線で戦つてきたからな」

帽子屋の答えにアリスは首をかしげる。

「アリスもナイトメアの一人だからね」

「それに、アリスに関わることだらうな」

ハンプティーと帽子屋がちゃんと言い直してくれた。
コンコンッと時計兎は会議室の扉にノックする。

「入りますよ」

カチャリと音をたてて扉が開く。

続いて皆も中へ入つていいくので、アリスも大人しくついていった。

「まあ、先ほどと面子は変わらないけれど・・・
邪魔が入らず話しができるね」

スピードがこいつとそう言つ。まさにその通りだ。

会議室には、スペード、クローバー、ダイヤとナイトメア・・・ハートを抜かしたメンバーがそろっていた。

「じゃ、座つて」

「こづ促され、アリスは一つの椅子に腰掛けた。

「では、今回の議題はズバリ反響の国との関係についてだ」

「アリスが逃げたのでな、王はカンカンに怒っているかもしけん」

「相手の出方にもよりますね」

「いや・・・でも・・・・」

アリスは会話に入れない。

しかし、自分が逃げてきたせいで大変なことになつてこじつことわかる。

それは、次のダイヤの言葉で決定的になつた。

「そりやうなあ、反響サンのほうは宣戦布告してきただ」

宣戦布告・・・それは戦争を始めるといつも図の狼煙。

「いめんなさい」

消え入るよつな声でアリスは謝る。

所詮、謝るしかできない。逃げずに結婚したほうがよかつたのではないか。そんな疑問が頭の中をよぎる。

「や、別に謝つてほしいわけでもないし、謝らんでもいいんやで?
アリスちゃんが可愛すぎて気に入られただけなんやし」

ダイヤがせうつフォローしてくれる。

「やうですょ、魅力的のは良い」とですから

「やうやう

と、次々に続けて周りがフォローしてくれた。

「それに、元々反響の国とは白雪の町の権利争いで
戦争するかもしぬなかつたのだから」

そろそろとうつ伏せていた顔を上げると、
スピードの穂やかに微笑む顔が田口ひづる。

しかし、すぐに王らしい威厳のある面立ちへと変わった。

「そこ」でナイトメア。君等に国境に行つてきてほしい。
もうすでに武官を送り込んであるから、その補助だと想つねどさ。
・・・アリスはどうするか

スピードは田で字を追いかけながらパラパラと資料を捲る。

やけに静かな会議室に紙の擦れる音だけが聞こえた。

（宣戦布告と会議2）

「記憶を無くしているから、連れて行かぬ方が良いのではないか？」

アリスを危険に晒すよりはマシだ。

男性陣はそう思つたが、一人異議を唱える者がいる。

「待て、俺はここに来る前アリスと戦つたが実力は落ちていない。連れていっても問題無いだろ？ それに・・・記憶が戻るキーワードになるかもしれないしな」

そう言われ、皆も納得した。

「だがつ 危険だ！！！」

珍しいことにスペードが声を荒げる。

それに周囲も驚いたような表情になる。

スペード自身もこんなに大きな声をだして驚いていた。

「大丈夫だよお、スペード。もし危険でも、オレがいるし！」

二匹とチヨシャ猫が笑い、アリスに抱きつこうとする。

「“オレ”じゃなくて“オレ達”でしょう、バカネコ」

が、時計兎によつて阻まれた。

「スペード、心配しなくてよいよ。ね、帽子屋」

「ああ、アリスは俺等が守る」

そつとハンプティーがアリスの頭に手をのせた。
優しい手つきで撫でられる。

(なんか、懐かしい)

こんな状況、前にもあつた気がする。
何だか懐かしい匂いがした。

「で、アリスちゃんはどうすんの? 行く? 行かへん?」

ダイヤの間にアリスは

「行く!」

と即答で答えた。

「決まり、だな」

帽子屋がフツと口の端を上にあげた。

「ザ・ン・ネ・ンでしたね。スペード

時計兎の意味有り氣な言葉にそれぞれ、

「ん、どうしたの？ 皆……」

チエシャ猫はお腹を抱えて笑い、時計兎も小さく笑い、ハンパーティーも笑いを堪えながら、『まかすように紅茶を口に持つていき、

帽子屋は手で口元を覆い、顔を逸らして笑いを堪えているようで、ダイヤも吹き出し、クローバーは哀れみの目をスペードに向けていた。

スペードに至っては眉を寄せ、あからさまに不機嫌そうだ。体から負のオーラが出ている始末。

（でも、怒つても綺麗な顔だなあ）

と、見とれてしまう。

こんな時でもそんなことを思うアリスは自分自身に呆れた。

「……全く、王である僕を笑うなんてね。他国では絶つつ対無いよ。

アリスとクローバー以外は今月給料ナシ」

ズバッと一刀両断でこのようなことを言つ。

その瞬間、ダイヤとチエシャ猫がピシリと固まつた。ハンパーティーたちは予想していたのか然程騒いでいない。

「なつんねんそれ！ アリスちゃんはしゃーないとしてもなんでクローバーは罰受けてへんのや！」

「クローバーは“貴様等”と違つて僕を笑わなかつたからね。

何か文句でも?」

にひいりと笑つてはいるが、内容は全くの悪魔ぶりだ。

ダイヤが職権乱用やー！といまだ酔いでいる。

「せんと、じゃあ今日は解散といいつか」

また明日に」と、告げてからスペースは会議室を出た。
しかし、出る前、一いつそりアリスに耳打ちした。

「話したいことがあるんだ。後で中庭に居てくれないかい?」

アリスは返事をする代わりにスピードを見つめる。

スピードはフツと笑むと、今度こそ出て行つた。

話したいことって何だろう?とアリスが考えを巡らせていると
会議室一杯に帽子屋が淹れた紅茶の甘い香りが広がった。

17・誰そ彼れ時と王の顔

「誰そ彼れ時と王の顔」

黄昏時 誰そ彼れ。

誰が誰かと見分けのつかないほどの黄金色の時。

この国の黄昏時は、何よりも美しい。

「お待たせ、アリス」

王冠を被つていないせいもあるだろうが、初めアリスはスペードが
来たとき

一体誰なのかわからなかつた。

「アリス？」

その声でやつと誰だか認識する。

「あ、何でもないです・・・そんなに待つてませんから」

ぶんぶんと手を横に振るアリスに、スペードはいつものような
微笑を浮かべる。

アリスの座っているベンチに腰掛けて
スペードはアリスを真っ直ぐ見つめると話し始めた。

「アリス・・・君は本当に記憶が無いんだね？」

確かめるよつたなスピードの問いに肯定すると、
スピードは顎を右手で押さえた。

「アリスからして、どうこう感じだい？」

「え？」

主語のない問い合わせに、アリスは首を傾げる。

「…僕らだよ。以前のアリスとナイトメアやダイヤやクローバーは
とても仲が良かつた。でも、もうそれも憶えていないのだろう?
僕はね、人と仲良くなるには、相手のことを良く知らないと駄目
だと思う。

でも、今のアリスはその段階を吹っ飛ばした状態で友人になれと言
っているようなもの。アリスはそれをどう思う?」

探るような目でアリスを見る。

「あ…」

先程のような優しき瞳ではない。

紅蓮の炎が宿っているかのような紅の目。

穏やかな瞳が“狂眼”に変わった瞬間だった。

「わ、私…」

アリスはぎゅっと目を瞑る。

手もきつく握り締めて、拳をつくる。

「た、しかし…時計兎もチョシャ猫も変態だし、

皆変わつてヒトクセあるナビ・・・・

ヒトクセどろかフタクセ、ミックセもあるだろ。ひだり。
クセとこづ言葉では締めくくれないほどの個性の濃さだ。

「でもー。」

と、アリスは強く言い放つた。

「悪い人たちでは無いことは、判る。だから大丈夫だとも思う。

私は彼らを、そしてあなたを信じるわー！」

アリスは敬語すら忘れ、真剣な眼差しでスペードを見つめた。
スペードはとこうと、『狂眼』をフッと緩め、いつもの優しい瞳に戻る。

「その言葉、僕も信じるよ。アリス」

そこには王がいた。

國の頂点に立ち、時には國の命や、民の生命さえも扱うことができる存在。

両親を亡くし、16とくじて王座についた青年、スペード。

臣下を信じ、自分も臣下に信じられる。

そんな青年の王の顔がここにはあった。

「所でアリス、敬語取れたね」

御免なさいとアリスが謝つてもスペードは顔を横へ振り、
この方が嬉しいとスペードは笑う。

アリスは夕陽よりも顔を朱に染め上げる。

(そんなことをサラッと・・・天然のタラシね・・・)

ふと、アリスは心に蟠りを覚える。
わだかま

考えるうちにそれが何なのか気付いた。

「あの、スペード。お願いがあるの」

言つてみてと促され、アリスは口を開いた。

「ええ。・・・スペードは、私を前のアリスや今のアリスと言つけれど、

私はどんなことがあっても“アリス”であることは変わらないわ。
・・・・今も、記憶を失う前も“アリス”よ」

そう例え、アリスの外見が変わったとしても、アリスはアリスだ。アリスは自分が“アリス”であることには、どんと誇りを持っている。

「・・・そうだね」

スペードは少々驚いたような表情を見せたが、すぐに表情を戻すと
こう言つた。

「アリスは、アリスだ」

～漆黒の夜空と夜のヒートー

それからしばらく和やかな会話をした。星が空に昇るまでずっと。

「スピード、こんな遅くまで話につき合わせて」「みんなで」

「ううん、気にしないでほしい。僕も中々楽しかったから」

それじゃ、とアリスが案内された部屋に戻り、突然手首を掴まれた。

「わっ！……びっ……くりした。びっただの？」

「え……あっ」「めん」

どうやら無意識の内にした行為だったらしく、本人も意外そうな顔している。

慌ててパシとスピードは手首を離した。

「あの……どうして会議中に皆が僕を笑ったかわかるかい？」

「全然判らない……けれど」

アリスには見当もつかない。

「やつ……止め……めん」

不審に思いながらもアリスはその場を離れた。

スピードはアリスが完全に去ったのを確認し、空を仰ぎ見る。

「・・・アリスを、前線に行かせたくなかったのは心配だったからだよ」

その後、ギュッと瞼を瞑つて吐き出すように咳く。

「あと、ナイトメアと他の男共と一緒に居させなくなかった・・・僕も、かなり心が狭いものだ・・・」

その咳きはアリスには届かず、漆黒の夜空へと吸い込まれていった。

一方、部屋に戻ったアリスは夕食を摂るため武官用食堂へと向かっていた。

はずなのだが。

「ま、迷つた！――」

先ほどから同じような所を行つたり来たりしている。運が良いのか悪いのか、人一人とも出会わない。

「だいたいね、ここ広すぎるのよ。

一体どこに行けばいいのぉー？」

記憶喪失＆方向音痴。迷つて当たり前である。どうしようも無くなつたと彷徨つていたら、

「あーーーー、ハンパーティ―の部屋じゃない」

天の助けとばかりに「ハンパーティ―」と書かれたプレートを掛けた部屋を見つけた。

ハンパーティ―が居れば案内して貰えると思い、部屋をノックするしかし、返事は返つてこない。

(いないのかな)

もう一度部屋をノックする。それでも返事は無いので仕方なく（また迷うハメになるのだが）ハンパーティ―の部屋から離れようとした。

ガシャーン！

「・・・・!?

突如、ハンパーティ―の部屋から何かが割れる音。

「ハンパーティ―！? いるの? どうしたの?」

いてもたつてもいられず、返事を聽く前に部屋に転がり込んだ。中は薄暗く、正直不気味だ。

足を進めていくと、ベッド近くでガラスのコップが割れて机から床に落ちているのを目視した。

液体が床に染みてることから水でも飲んでいたのだつと当たりをつける。

名を呼ぶが返事は無い。

「やつ・・・！？」

不意に肩を掴まれる。そのまま押されアリスはベッドに倒れた。
押し倒されているのか、誰かが上にいる。

「ハ、ハンパーティー・・・？」

段々と闇に目が慣れていく。

赤い髪が見え、そのすぐ後、闇の中で光る黄の瞳と視線がぶつかり合つ。

間違いない、それはハンパーティーだった。

「な、なに・・・？」

この組み敷がれる体制はまずい。

いくらアリスでもこれは羞恥に耐えられない。

「ハツ・・・まさか夜に、男の部屋に来て、何も無いと思ったわけ
じゃねえよな？アリス」

喋り口調が違う。

ほくそ笑むようにアリスを押し倒している人物。
顔はハンパーティード。でも、違う。

このヒトは、誰？

19・漆黒の夜空と夜のヒート 後編

～漆黒の夜空と夜のヒート～

ハンパーティーとそつくりな外見をした男は、指先でアリスの首筋をなぞる。

ビクリとアリスはその動きに反応してしまった。

「こり・・や・・・・…」

じたばたと抵抗するアリスを男は押さえつける。
これが女と男の力の差だ。

アリスは身体でひしひしとそれを実感し、少し悲しくなった。

「そつちが勝手に部屋に入ってきただろ。

何があつても文句は言えねえと思うがなあ？」

男は器用にもアリスの服のボタンを片手ではずす。
本気の本気で貞操がまざい。

アリスがそう思つた瞬間、なぜか男がアリスから離れてくれた。
と、同時にハンパーティーの部屋の扉が吹っ飛ばされて、
(誰が弁償するのだらうか) 部屋の中に転がつた。

「な、何つ？」

状況判断をする前に部屋に1つの影が入つてくる。
横目で男を見ると戦闘開始とでも言つかのように槍を構えていた。

闇の中からしなやかな鞭がアリスにのびる。

そのまま鞭は腰に巻きつき、ぐいと引っ張られるのをアリスは感じた。

「無事ですかアリス！？犯されたりしてませんよねーー？？」

「お、犯され・・・そんなのされては無いけど・・・」

「ならいいですけど・・・アリスボタンなおして下さー。正直日に毒です」

「あーーー、じめん。ほ、本當にこれ以外何もされてないからね」

その人物は時計兎だつた。

鞭は時計兎の武器。攻撃する他に、

カウボーイの如く物を取り寄せられるとは。使い勝手の良い武器だ。

守るように時計兎はアリスを抱きしめる。

そして男を強く睨みつけた。

「乱暴だな、時計兎？後でドアを直しておこしてくれよ」

「ええ、後で良ければいつでも直してあげますよ。

それより、アリスで遊ぶことは絶対に許さないといつ忠告、前にもしましたよね？“ダンプティイー”

ダンプティイー？

それは、それは一体。

「どうこいつにとなの・・・？」

時計兎は今、確かに、この男をダンプティーと呼んだ。

ここは“ハンプティー”の部屋であつたはずだ。

つまりは、双子なのか？けれど、ハンプティーは以前自分のことを“ハンプティー・ダンプティー”と名乗つた。これはどうじうことなのか。

「ああ、記憶無くしたんだつけ。お前」

ダンプティーの端麗な顔が近くにある。
いつの間に、こんなにアリスの近くまで来たのだろう。

手を伸ばせば届きそうなほど、ダンプティーは近づいていた。

「アリスに触れぬいで下さい」

ダンプティーとアリスの間に庇つよつて時計兎が立ちはだかる。

「残念」

ダンプティーは少しも残念がつてない顔でこいつ言つと、アリスから離れた。

アリスは身震いした。

時計兎とダンプティーの殺氣にも似たような気が肌を通して伝わつてくるのだ。

「・・・っねえ、時計兎。この人、ハンプティーと同じ外見をしてるけど

ハンプティーじゃ無いわよね？何なの？」

アリスは場に立ち込める黒雲を振り払おうと躍起になる。

アリスの発言に対し、時計兎はかぶりを振る。
どうやら、話を逸らすのには成功したようだ。

「教えてやるよ、アリス。ハンプティー・ダンプティーってのは姓
と名じやない。」

ま、簡単に言えばハンプティーは一重人格なんだよ。
昼の理性がハンプティー。夜の本能がこの俺ダンプティー。
あまりにも性格が違すぎる、二重人格つつうより
1つの体を2人の人間が共有してるみたいな感覚だな」

ハンプティーは幼い頃から自分の感情を内に隠す子だった。
親の言い成り。嫌なことも嫌と言えず、期待に応えるために
自由でさえ奪われた。まるで操り人形のように。

しかし、ある時、遂に我慢していた感情が爆発した。
翌日には元通りいい子ちゃんのハンプティーに戻ったが、
夜になれば化けの皮が剥がれたかの様にダンプティーという人格が
できた。

ハンプティーはダンプティーであつた頃の記憶が何一つ無い。
例え、自分には夜になれば暴走する人格があると認知していても、
だ。

殻・・・にこやかで心優しい自制心のかたまり。それが「殻のハン
プティー」

内・・・ハンプティーの裏側の感情を持つ本能のかたまり。それが
「内のダンプティー」

「アリスはさ、こんな男と付き合つていけるか？」

「どういう意味ですか」

アリスの代わりに時計鬼が問う。

「ほんとこころの性格が変わる奴に、記憶を無くした

“今のアリス”は仲良くできるかつて聞いてんの

グラリとアリスの心は揺らいだ。

アリスはアリス。そう先程スペードにも言つたはずだ。
だけど・・・昔と今が違うのも、また事実。

決心したはずなのにまた心が揺らめく。なんて、脆いのだろう。

「アリスは、ハンパーティーはまともだと思つてたかもしだれねえけど、
実質名前はイカれてるがイカレ帽子屋が一番まともだぜ。
こいつも、ハンパーティー・ダンパーティーも狂つてやがる」

「狂つてない！！！」

弾かれるように、アリスは言い返した。

小さくダンパーティーと時計鬼が目を見開くのが見える。

「狂つてなんかないわ！ハンパーティーダンパーティーっていう人物は
ちょっと変人かもしれないけれど良いヒトよ！私はそう思う！」

少し、驚いた。

ハンパーティーとダンパーティーをアリスは今、同じ人間と見なした。
他の人間は個々と見るのに、だ。二重人格なのも全てひっくるめて
ハンパーティー・ダンパーティーという1人の人間と見てている。
やはり、以前と何一つアリスは変わらない。

記憶を無くしたのも、少し痴呆があるのだと思えば良い（アリスに

（ついついは良くない）

「まあ、アレだ。ちょっと変人つーのは余計」

ダンプリティーは苦笑する。

「じゃあ、これからどんなことがあったとしても、見捨てるなよ？
ハンプリティー・ダンプリティーを」

挑発するような口調。

アリスも便乗し

「望むところよ」

そつ言い放った。

（時計兎君の嘆き）

皆さんこんにちは。これは私、時計兎の嘆きを語る場所です。

涼村 数少ない時計兎ファンにささげます！

今回の話・・・ダンプティー本当に邪魔ですよね。
結局私が助けに行つた意味ないのではorz

涼村 まあまあ、時計兎が助けに行かなかつたら、

アリス完璧に処女喪失してたし。

え！？ そうだつたんですか。意外です。

涼村 そうなんです。アリス生まれてこの方

男性と付き合つたこと無いから。初恋程度ならあるけどね。

モテるのに勿体無い。でもその方が有難いです。

涼村 ジャあ嘆き（というより対談？）は終了！

メニ時計兎君から一言ようおね。

よろおねつて・・・いつの時代ですか、本当に。
じゃあ僕は「もしかしたらまた続くかも」です。

涼村 全然メれてないじゃん・・・

ぐだぐだなまま終了。

20 初出兵とアリスの溜息

～初出兵とアリスの溜息～

色々なことがあった。

ハートとの出会い。スペースードとの会話。ハンパーティの秘密。

「んうー」

氣だるさを感じ、朝なのだらうが起きずアリスはベッドで目を瞑^{つむ}る。

(ずっといのまま眠つていた)

しかし一度目を覚まし、意識が覚醒仕切つている状態で、一度寝はできなかつた。
仕方なく重い瞼^{まぶた}を開ける。

「ひいっー。」

アリスは女性らしさの欠片も無い悲鳴を短く上げた。

「チエ・・シャ猫」

チエシャ猫が同じベッドに入り、くうくうひとぞ気持ちが良むやうな寝息をたてていた。顔はとても幸せそうだ。
本当に、いつの間に入ってきたのだろう。

アリスは息を吸い込み、チエシャ猫の名前を呼びかけた。
しかし、全く持つて起きないので体を激しく揺さぶる。
すると、当事者は大きく伸びをして起き上がる。

「ううん・・・ひむたいなア。・・・あー、アリス。おはよう」

「ええ、おはよう。・・・・・じやつなーーーなななんつで!
入ってきて・・・!い、何時の間にっ!!」

慌てるアリスを尻目に、チエシャ猫はニヤリと笑んだ。

「ええっと、アリスを起こしに来たんだけど
オレも眠くなっちゃってH」

アリスは呆れて物も言えない。

「アリスの香りだア」と喜ぶチエシャ猫に対し、アリスは頭を抱えたくなつた。

偶然と言いたいが、絶対故意でチエシャ猫はベッドに入ってきたに
違いない。

アリスは本日、何度も吐いたかわからない溜息を吐き出した。

あれから数日。

今日が反響の国との戦争の始まり。

そしてアリスたちナイトメアの出兵日だ。

いつもお気に入りの服に着替えたアリスは、城門へと急ぐ。

そこにはもうナイトメアは集まつていて（チエシャ猫とアリスは除

く）

馬に乗れないアリスのために馬車があった。

馬車にスッと乗り込むと、アリスはゆっくりと深呼吸する。

「緊張する、わね」

「アリス、リラックスしろ。今日まで俺と修行したから殺されることは無いはずだ」

「戦場では絶対僕たちと離れないよつこね、アリス？」

そうだ。アリスも何もしなかつた訳ではない。
帽子屋と手合させたし、ハンプティーと何度も作戦確認したのだ。
だから、確信は無いが大丈夫だろう。

未だ、ドッヂッと激しく飛び跳ねる心臓を落ち着ける。
胸に触れ、押さえ込むように。

「じゃあ行きますよ？」

馬の手綱を持つ時計鬼に肯定の返事を返すとゆっくりと動き出す。
段々と早くなり、城が離れていく。

今、馬車と共に運命は動き出した。
戦場へと向かって。

21・戦場光景と錫杖の音

「戦場光景と錫杖の音」

ギンギンッと刃がぶつかり合いつ音^ねがし、幾重もの矢が飛び交う。

上空から見れば、此処戦場は反響の国の方が優勢に見えるのだ。だが、実は黄昏の国^{たそが}が小規模ながら圧制している。

「つ・・・・！」

眼を逸らし、震えるアリスの肩を帽子屋が抱く。

「田を逸らすな、アリス。いくら見たく無いようなものだとしても、目に焼き付ける。これが、戦場だ」

アリスは戦争といつものを甘く見すぎた。

国のために戦う？そんな志^じには無意味だ。
生きるか死ぬか、生と死をかけた性質^{たち}の悪い遊戯^{ゲーム}。

切れば血が出る　　当たり前。
死ねば動かない　　当たり前。
当たり前のことはずなのに、戦場では当たり前であつてほしくない。

死にたくなければ、勝て。

これが戦場であり、アリスの生きていた場所なのだ。

「紅茶、飲むかい？」

アリスを気遣つての言葉だらう。しかし、ここでは少しでも何かを口にすれば吐いてしまっては堪らない。

「アリス・・・」

「へ、いき。行きましょ？味方の武官はナイトメアを待ってるわ」

倒れそうなのを堪え、ゆっくりと踏みしめる。

「アリスウ、オレはアリスから離れないよお？」

いつもは即断つているはずのチヒシャ猫の言葉が、今では何だか温かい。

「うん。ありがとね」

人を殺めたくないという切実な願いから、トンファーを構える。アリスはまだ自主的に戦うなんて出来やしない。

襲われたら、正当防衛として身を守る。皆の傍にいて、戦いを見守るだけだ。

それでも、記憶を取り戻すキーワードになるかも知れない。

その様子を遠くから見つめる人物がいた。

「ふむ。これはまた・・・思わぬ獲物が引っ掛けたものだな。
しかし、好戦的でない所を見ると・・・記憶喪失という噂は
真であられたのか」

一風僧侶のようないでたちをした男はフウッと息を吐いた。

「・・・“式”で敵を翻弄せよとの命であつたが、已むを得ぬな」

スッと右手を上げる。

それを合図に、後ろに控えていた者達が男の前に跪く。

「兎手たち、捕まえに行くぞ。『黄昏の国のアリス』を」

その言葉で、兎手たちは四方八方へ散らばった。
男は錫杖をシャンと鳴らすと、兎手の後を追う。

「あれほど・・・戻つて来られるなと告げたのだがな、アリス嬢」

シャンシャンと二つ音が、静かに響き渡った。

どんどん人が倒れしていく。

時計兔の鞭、ハンプティーの槍、
チエシャ猫の（どこから補充しているのやら）大量なナイフ、帽子
屋の大剣・・・。

血飛沫があがる。アリスは思わず顔を顰めた。

「・・・これが」

死ぬ、といふことなのだ。

「へへへーーもう駄目駄目ーー戦場に行くつて言つたのは私なんだか
らー

いい加減慣れなきや」

人の死に慣れることは恐ろしい。が、せめて血には慣れた方がいい
だろう。

アリスは血を見ただけで青くなる。

ハアとアリスはまたもや溜息を吐く。
が、その時　。

「あう・・・！」

アリスは体に急に異常を感じた。
何かに圧迫されるかのような感覚。

目の前に、一枚フィルターがなされているかのようで、
耳も壁を通じて聞いているかのような感覚。

この身体は自分の物の筈なのに、自分の身体のようではない感覚。

「う・・・あ・・・・・？」

何故だ。何故何故何故。
身体が勝手に動くのか。

足がどこかに行こうとしている。駄目駄目駄目だ。

ナイトメアから、皆から離れては危険なのに。
足が、言つことをきかない。

「ダメ」

何とか動く足を押しとどめようとする。
しかし、圧迫感が強くなり、アリスは意識を手放した。
ドサリと地に崩れ落ちる。

「　「　「　アリス！　？」　」　」

皆の声が重なりあつ。

以外にもアリスは直ぐにムクリと起き上がつた。
しかし、安心したのもつかの間・・・

「大丈夫か！？」

帽子屋が兵士の攻撃を受け流しながら訊く。
けれど、アリスは何一つ言葉を発しないまま、フワッヒビニカヘ行
こうとする。

「チニシヤ猫！？」

「わかつてゐよおー」

チニシヤ猫はアリスを追う。

どうして、アリスは急にこんな行動を起こしたのか。
それはだれにもわからない。

22・アリスの罪と天の罰（少々の流血表現あり）（前書き）

ほんのちょっとぴりですが、流血表現があります。
苦手な方はお避けください m(— —) m

22・アリスの罪と天の罰（少々の流血表現あり）

～アリスの罪と天の罰～

来い。私の元へ。

アリスの頭に声が響く。これは誰だ？

「こちらに歩め。わあ、早く。

頭が割れそうに痛い。一体、何だというのか。

「アリス！」

大きな声で名を呼ばれ、朦朧としていた意識が覚醒した。
先程アリスを襲っていた圧迫感は今ではすっかり無くなっている。

「え・・・あ？ チュシャ猫？」

「もー、チュシャ猫？ じゃないよオ。どうしたのぉ？」

アリスは言葉に詰まる。

どうした、と言われても答えようがない。

「何でもないならしいけど、心配だったんだア」

チュシャ猫は困り果てたアリスを見て、深く追求しようとはしない。
そこが少し有難くて嬉しかった。

「うん、じめん。所で、ここは？」

「どうやらここは森の中。

田が当たらないせいで何とも言えない不気味さを放っている。

「あア。アリスを追つてたらねえ、アリスがここで立ち止まつたから。

戦場からはそこまで離れてないよお？」

戻ろうか、と言われアリスもそれに従つた。

だがしかし、チェシャ猫がアリスの手をとつた瞬間・・・

「うあつ！」

チェシャ猫に電撃のようなものがはしり、そのまま痺れ倒れた。

「なつ・・！ チェシャ猫！ 大丈夫？ どうしたの？」

軽く揺するが起きる様子は無い。

それもそのはずだ。電撃のせいで体中が麻痺しているのだから。

突如、刃が空を切る音が聞こえた。

ガキインツ！ ！ ！

「くつ！」

アリスがトンファーで何とか刃を受け止める。
が、思つた以上にその攻撃は重く、片手で受け止めたせいか腕が小さく痺れた。

「へえ、さすがだな。『黄昏の国のアリス』さんよお」

「どこからか下婢げひた笑い声が聞こえる。
一人ではなく、複数の。」

「悪いが、あんたを反響の国に連れさせてもらひや」

一瞬にして、囮された。

ざつと人数は10人弱。しかも中々の手練だ。

「行くぜ」

舐めきつているのか、聞こえよがしにそうリーダー格の男が言つ。
それを合図に、兇手たちが四方八方から襲いくる。
トンファーを構えなおし、何とか攻撃から身を守る。
甲高い金属同士がこすれあう音。
見事な攻防戦だ。

「ん・・くつ！！」

敵の剣にトンファーが弾かれる。
そして後方へ飛んでしまった。

「おいつ捕らえろ！」

兇手が一気に間合いを詰めてきた。
チエシャ猫は眠つたままで、起きる気配はない。

頼れるのは、自分のみ。

「チツ！まだ武器を持つてやがる。気をつけろ！
四肢が無事なら多少傷つけても構わねえ！」

チヤツと腰にぶら下げるダガーを手で握り締める。できる限りなら、使いたくなかった武器だ。

ざあつと脳裏に何かが横切る。

甦っていく昔の映像

敵か 今しるにすのなし敵か阿修羅のことくアリスに向かふ
その思い出と、今の兎手が見事なまでに被る。

怖い、とアリスは直感的に感じた。

目の前にいる兜手は剣をアリスにむけて振り下ろす。アリスは何かを考えるより前にダガーで剣を弾いていた。その隙に、相手の首を搔つ切つた。

「ひつ」

一瞬の出来事。

相手の頭が右へころりと落ちて、首から勢い良く溢れる血がアリスの全身にかかる。

ナイトメアティーパーティー
悪夢のお茶会と知づけられた理由。

う。まことに、この二ヶ月間の、この地獄絶叫が、

それは迷信や、噂などではない**真実**。ほんとう

真つ赤な、真つ赤な真つ赤な血に濡れたユメ。
それが、悪夢。ナイトメア

『レジストラム』

前後両方から剣を振り切られる。

しかし、アリスはすぐに右に飛び、その2人の首を切る。首を切れば勝つ。いつも簡単に。

(これが、私なのね)

多くの人の命を救い、多くの人の命を奪つた。

これが、『黄昏の国のアリス』なのだ。

・・・アリスは全身で息をする。

その場にはアリスと倒れているチエシャ猫以外に誰もいない。

つまりは、そのか細い手で皆殺しにしてしまったのだ。

記憶を無くす前のアリスがしてきたこと。

けれど、こんなことしたく無い。戦上での記憶なんて甦つてほしく無かった。

どうせならば、もっと楽しい記憶が欲しい。そう考えるのは贅沢か?

不意に、ポツポツと空から零したたが滴る。

しだいに絶え間なく雨が降り始めた。

まるで、天罰のようだとアリスは自嘲する。

この、返り血を流してくれないだろうか。

この身にこびり付いた人の血を。

人を殺した罪を洗い流してくれないだろうか?

そんなアリスを責めるかのように、雨は鋭く降り続けた。

おまけ3 ハンパーティー（ダンパーティー） 150の質問

～おまけ・ハンパーティー（ダンパーティー） 150の質問～

01 お名前をどうぞ…！

ハンパーティーだよ。
(ダンパーティーだ)

02 性別は？
男。

03 誕生日！

僕らの世界には誕生日という概念が無いんだ。
(モーグー)ことだ。一応生まれではあるけど

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）
目の色は黒味のある黄色で赤毛だよ。

(んで、右目には傷跡があるぞ)

05 動物に例えると？

うーん・・・どうだろう。ダンパーティー、どう思う？

(ああ？お前は結構腹黒な感じだしイタチじゃねえ？俺は…。
じゃあダンパーティーは狐だ。イタチと狐で化け勝負、ってね。

06 特技は？

掃除かな。アリスの家の掃除してたくらいだしね。
(ハンパーティーと俺は同体だから、好きじゃねえけど

俺も掃除が得意なんだよなあ)

07 ご趣味は？

散歩かな。早朝と日暮れの散歩は綺麗なんだよ。

（へえ。俺は女を口説くこと。アリス以外の女には良い顔してんだぜ？）

僕の体でそんなことしないでほしいな・・・

08 将来の夢など

今もう夢は叶ってるからね。武官になることっていつ夢が。（夢か・・・ハンパーティーと別な体にして欲しいってこと。夢つていうより願望）

09 好きな言葉とかある？

「努力すれば報いられる」かな？「求める者は『えられる』とか類だね。

（ふうん。俺は「酒地肉林」？）

・・・もつとましな答え、無かつたのかい？

10 好きな動物は？

以前は猫が好きだったんだけど、チエシャ猫を見てたらねえ・・・（そりやもう犬だろ。生意気な犬ほど調教のしがいがある）ダンパーティー、一応健全な小説なんだからやめてあげてくれる？

11 好きな色

緑色かな。目に優しいし。

（赤。炎の色だし赤が好きだ）

12 好きな料理

そりや卵料理かな。中でも料理人の腕の良さのわかるシンプルな卵焼きとかね！

(へえ庶民的。俺も卵料理は好きだがやっぱ肉だろ)

13 好きな異性のタイプ

えつ・・好きな異性があ。母性の強い人が好きだね。
(周りくどい言い方せずにアリスが好きだって言えばどうだ?
俺は勝気か、強気な女が大好物だ)

14 好きな同性のタイプ

そうだねー、ムードーメーカーな人とか好感もてるなあ。
(俺、あんまそういうの考えたことねえな)

15 座右の銘は?

好きな言葉と同じかな。努力あるのみだね。
(「鳴かぬなら殺してしまえ不如帰ほどときすか?」)
何だいソレ。

(あの縁(クローバー)の故郷誇称の国の偉人の言葉だと)

16 暇なときなにしてる?

掃除かな。汚いところとか見ると掃除したくなる。

(俺はメイドとか口説いたり、酒場行ったり、賭け札したり)

17 旅行とか好き?

好きだよ。世界の絶景とか見て回りたいな。
(はあマジで?めんどくせー)

18 癒されことつて何?

・好きな人が笑顔でいてくれる時とかね。
(癒しとかないな)

19 一緒にいて落ち着く人はいる?

・・・アリス。

(あいつは無駄にパワフルでうがうが。じつはソワソワをやられる)

20 ぶつちやけその人は恋人です！？

まだ違うよ。

(オイ待て“まだ”ってなんだ。いずれモノにするつもりかお前)

21 コンプレックスとかあつたりなんかしちゃつたりする？
やつぱり一重人格な所。

(俺はお前のつけてくれやがった傷跡だ。せっかく女を落としやすい
綺麗な顔してたつていうのによ)

22 それを解消するために何か努力はしてる？

無理じゃないかな。解消できるようなものでは無いよ。
(傷跡消せつてか・・・無理な話だ)

23 じゃあ逆に自慢できることは？

うーん・・・髪質が良いつてところ。

(ああ、アリスに褒められてたな。自分よりサラサラしてるので)

24 人生で一番嬉しかったことは何？

二重人格だとわかつても、アリスが傍にいてくれたことだよ。

(昔のことか。「一生離れたりしないから」ってアリスは言つてた
けど

今から思つと結構ハズいこと言つてんなー。逆プロポーズじゃね
？)

25 人生で一番驚いたことは？

兵士に奇襲かけられて堀から落ちたことだね。

(特に無し。あえて言つならアリスが記憶喪失になったことか)

26 人生で一番楽しかったこと

アリスと朝焼け時の散歩をしたこと。すごく楽しかったよ。

(女と寝る心地よさを覚えたことだ。つて、言わない方がいいか?)
当たり前。健全な話だって言つてるじゃないか、ダンプティー···。

27 人生で一番怖かつたこと

母親が狂つたとき。あれは怖いとかそういうものじゃないくらい。
(ああ、丁度俺という人格が出始めた頃か。あれは狂氣の沙汰だつたな)

28 人生で一番辛かつたこと

親に勉強と武術を無理に叩き込まれたとき。頼れる人がいなくて辛かつた。

(特にねえな)

29 外向的? 内向的?

微妙だね···

(お前は初対面の奴には警戒解いたりしねえから内向的じゃないか?
俺は男を除く女には外向的だがな)

30 道に1000万(日本円で)が落ちてました。どうします?

とりあえず届出を出すね。落とした人が可哀想だ。

(バーカ!この真面目!—普通は遊女屋に行つてハーレムだろ!)

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う?

国に寄付。貢献するよ。僕が金を持っていても仕方ないし。
(本当に真面目ちやんだなお前は)

32 子犬が捨てられていた！－愛らしげ声で鳴いています。ビ�
てる？

拾つてあげたいけど無理だね。拾つてくれそうな人を探してあげる
しか・・・

（無視だ無視。自立して野生的に生きのびる）

33 突然頼みごとをされました！ あなたなりびつする？
できる範囲ならちゃんとするよ。

（等価交換ギブアンドテイク。報酬を貰わないとしない）

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよー。ビ�しよう！？
自分に非があれば謝るけど、無い場合は謝らない。
(「いつ見えてお前って結構頑固だな・・・）

35 嘘はつけるタイプ？

つけるよ。できる限りつきたくないけれどね。
(嘘はつけないが猫は被れる)

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
そうでもないけど、アリスにはバレるよ。どうしてだろう？
(このバカツフル！お前ら本当は恋人同士じゃねえのか？)

おまけ1の同じ質問（36番田）を見ればどういう意味かわか
ります。

37 何か癖ある？

手で傷跡に触れる癖ならあるよ。
(やたらと髪が気になつて触つてしまつんだよな。切るか結ぶかし
よめざへ・・・)

38 誰かに何か言いたいことたまつてない？

あるよ。

(無い)

39 あるつて答えたそこあなた！ ジャあいの穴に向かって
思つ存分叫んでください……！
じゃあおもむろに・・・

帽子屋は実はむつりだよ……アリス気をつけて……！
(そつうのか。まあがつりタイプじゃ無さそうだしな)

40 ……酸素マスクいる？

酸素マスクじやなくつて水が欲しいな。
(喉からからつてか)

41 あなたにとつて一番大事なものは？

もう一人の自分であるダンプティー。

(悪いんだが俺別に男に興味はないから)

誰も別にダンプティーに対して恋愛感情抱いてるなんていつてない
から。

42 自分といつたらコレ！ みたいなのある？

右田の傷と赤毛かな。

(あと二重人格)

43 崇拝してる人とかいる？

尊敬はあるけど、崇拝はいなかな。

(俺は尊敬している奴自体いねえ)

44 どひじょひー 財布を掏られた……！

あらり。

(余裕だな。まあ掏つた奴は間も無くハートに処刑されると思つぜ

(?)

- 45 コレだけは誰にも負けないものってある?
槍をつかつた戦闘。
(女を口説き落とす業^{わざ})

- 46 こいつには敵わないっていう人いる?
アリスには弱いね、僕は。
(弱いつていうか甘いじゃね? ちなみに俺は時計^わ兎は苦手。執念深いし)

- 47 全部答えてきたね? ジャ あこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします! !
- 特に秘密なんてない。あ! でもこの傷ができた当初、アリスが「ハンプティーダンプティーが壇から落ちた」とかいう縁起でもない歌歌つてたよ。
- (あいつの親歌手だつたから歌詞除けば歌は上手かつたな)

- 48 ぶつちやけ作品内での自分の立場つてどうよ?
影が薄くなったり濃くなったり・・・
やつぱり優しいお兄さんキャラは目立たないのかな。
(かもな。でも最近は帽子屋が一番影薄いと思つ)

- 49 こじぞとばかりに生みの親になんでも言ひぢやえ!
僕とアリスの幼い頃の馴れ初め話か何か書いてくれると嬉しいな。つていうか書いてね?
(おい、お前一瞬だけ黒いオーラがでてたぞ)

- 50 こじまで読んでくれた方に何か。
お疲れさま。読んでくれてありがとう。

(ここまで読む何て相当暇人だろ)

ダンプティー失礼だよ、素直になれば？こう見えてダンプティーは結構ツンデレなんだ。見捨てないであげてね。

オリキヤラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfut ure.finito-web.com/orichara50.html>

23・雨の音声と僧侶の表情

「雨の音声ノイズと僧侶の表情かお」

バシャツ。

雨と血で濡れた地面を、誰かが踏む音が聞こえた。
段々とその足音がアリスへ近づく。

それと、同時にシャンシャンという鈴のよくな鉄同士が軽くぶつか
るような

場に不釣合いな澄んだ音も聞こえる。

不意に足音と澄んだ音が止まった。

項垂れているアリスでさえもその人物が近くまで来たことを悟る。

「ふう・・・兎手達もあまり強くなかつたものだ。
ま、足止め程度にはなつたやもしらんな」

低い男の声。それはアリスの知っている誰の声でもない。
アリスは閉じていた目をゆっくりと開いた。

そこに居たのはクローバーと同じ、誇称の國の服を纏つた男だ。
髪はスキンヘッドに剃られている。恐らく僧侶と呼ばれる者だらう。
クローバーから借りた“誇称国書記”という本に
「邪な心を髪と共に落とす」と記してあつた気がする。

“人を殺した”という闇に支配された脳内でぼんやりと客観的に
アリスはそのようなことを考えていた。

「久しいな、アリス嬢」

久しい。といつゝとは、かつてアリスは「」の男と会ったことがあるのだろうか。

そんなアリスの様子を察したように男は口を開く。

「ああ、そういうえば記憶が無いのであられたか」

僧侶の持つ金色の錫状が、男が動くたびシャンと音をたてた。

「・・・だ・・・れ・・・・?」

途切れ途切れに虚ろな瞳でアリスは男に訊く。

「・・・反響の国の王の補佐。ビショップ、だ」

つまり、ダイヤと同じ立場ということだ。

クローバーのような反響の国の王の近衛のナイト。

女王の近衛のルーク。

そして一般兵をまとめて兵士^{ボーン}。

ビショップはスッヒアリスの髪に手を伸ばす。

血髪とも言えるアリスの金髪は、血で赤く紅く染め上げられていた。

「哀れなものよ」

触れるか触れないかの寸前の所でビショップは手を引っ込む。

ザアアアア

と静かに音をたてる雨の音^{ノイズ}。

未だ冷たく突き放すように雨は降り続けている。

ビショップも濡れることを構わず、唯アリスの頬に擦り付いた返り血を拭うように触る。

まるで纖細なガラスの玩具を扱うように。

敵とは思えぬほど優しく残酷に、親指で血を拭つてやる。

「アリス嬢……」

アリスに目線を合わせるためにしゃがんでいたが、ビショップは立ち上がる。

ドスッと音をたて、錫状をぬかるんだ地面に突き刺す。そして、自身の両手を合掌するように合わせると祈るようにブツブツと何かを唱え始めた。

なぜか急な眠気がアリスを襲う。

「つ・・・眠・・い・・」

起きようと必死にアリスは瞼を開ける。が、しかし段々と重くなる瞼には逆らえない。

そのまま床に突っ伏した。

最後にアリスが視たモノは、どんな感情を宿しているのかわからない複雑な表情をしたビショップの顔だった。

24・式術と反響の国の高位

「式術と反響の国の高位」
つかさくへいじ

（つ・・・いくら待つても、チェシャ猫とアリスが帰つてこない）

帽子屋は不審に思つ。

戦闘で手が離せなかつたとはいえ、早まつた事をしたものだと。

雨の中を2人を捜していると見つかった。

だが、そこにはアリスの姿は無く、チェシャ猫が倒れているだけ。周囲は血の海、という言葉が似合つてゐる悲惨な状態だつた。

敵の切り傷からして、アリスのダガーで斬られたものだと予測できる。

おまけにアリスのダガーとトンファーは血まみれになつて落ちていた。

『アリスは一体どこへ行つた?』

俺はアリスも心配だつたが、チェシャ猫の容態も気になり、一度城へ帰る事にした。

しかし、それにしてもどうりで可笑しいと思ったのだ。

争つていた兵士達が、指揮をとつていたナイトが

「見つかつた」と言えば、あっさりと引き下がつた。

あの時は何という意味かさっぱり解せなかつたが、今じゃハッキリとわかる。

反響の国へ連れ去られたか。

最悪だ。

自分に対する自己嫌悪で胸が一杯になる。心の中は苛立ちや焦燥感で覆い尽くされている。

ほほ、八つ当たり氣味に壁を強く叩く。いてもたつてもいられない。チョシャ猫が起きるまで待つなど無理だ。

どうして他の奴等はあそこまで落ち付いていられるのだ。普段は一番冷静にいるはずの自分が、一人の女の所為でここまで乱れるなんてな。自分ですら子供臭いと思つ。

そもそもアリスを戦場に連れていいつと言つたのは俺だ。スペードに任せればよかつた。

“守る”と言つたのに守れていないじゃないか。

・・・本当に俺は最低だ。

不意に医療室の扉が開く。

「あ、帽子屋さん。チエシャ猫さんが意識を取り戻しました。ナイトメアさん達や、ダイヤさん、クローバーさん、国王陛下を連れてきていただきますか?」

医者がおずおずと言つ。

迷う暇無く、俺は直ぐに唇を呼びに行つた。

・・・すっかり口は落ちてゐる。

通り雨はもう止んでいて、雲も無い。
月の光が医療室を明るく照らしていた。

「それで、チエシャ猫。一体何があつたんです？」

丁重だが、どこか荒々しく時計鬼が問い合わせた。

「わからない」

と、チエシャ猫は、普段からは予想がつかない口調で言葉を紡ぐ。

「アリスを追いかけていたんだ。それでアリスと一緒に皆のところへ帰ろうとしたら・・・オレの身体に電気のようなものがはしった。気がついたら、意識を失つてたのか、ここに目が覚めた」

「敵の姿は見たん？」

ダイヤの質問に、チエシャ猫は小さく頭を振る。

「魔法だとしても、詠唱も聞いてねえのか

ダンプレイヤーに対し、ゆっくりと頷く。

「じゃあ、おかしいな。魔法は相手の近くで詠唱しなければ距離的に届かないはずだ」

帽子屋も言つが、チエシャ猫の表情は曇つたままだ。
一同、考え込む。

「・・・また、か・・・・・・・・」

クローバーが突然、しぼりだすような声で呟いた。

目を見開き、思いつめたような表情を見せる。

「ス、スペード。断定は……できぬ、が……その方法がわかつた。

おそらく・・アリスを浚つた本人も」

一気に視線がクローバーに集まる。

クローバーは伏目がちに口を開く。

「チエシャ猫を倒した方法は“式術”と呼ばれるものだらう……」

式術?と問い合わせるとクローバーは「ああ」と頷く。

「通称は式・・・唯の魔法では詠唱が聞えぬほど離れれば、
呪いまじなをとなえても遠すぎて標的に当たらぬ。

しかしながら、式はいくら離れても・・・例え千里離れたとして
も、当たる」

そうして、式術の説明が続いた。

式は紙に呪字といつ特別な文字を書く。そして、術主が呪いを唱えると

書かれた呪字がそれに反応し、発動する。といつものだ。
術主の力が強ければ強いほど、発動距離も長く延びる。

「アリスが戦闘中にふらつとどこかへ行つたといつのも

“傀儡”の式が発動しておつたのだろうな。

チエシャ猫にはしつた電撃とやらも“麻痺”の式が発動したのだ

と・・・

ならば、アリスがあんな行動をし、チエシャ猫が倒れたのも肯ける。いつ発動するのか、その呪字が書かれた紙がどこにあるのかがわからないのであれば避けようもない。

「でも、式術なんて聞いたことも無いですね。
反響の国で独自に発展した術とかですか？」

「それにしたって、どうしてクローバーは式といふものについて詳しく述べているんだい？」

時計兎とスピードに訊ねられ、クローバーはそつと視線をそらすし、窓を開けた。

雨上がりの爽やかな空気が医療室に入り込む。
夜空には、月と満天の星が輝いていた。

「式は反響の国では無く、“誇称の国”で発展した術・・・
アリスを浚つた犯人は、反響の国在住で、式が得意で、誇称の國
出身の者。

該当者は・・・彼奴ひやつしかおらぬ」

反響の国の高位。

国皇であるキング。皇女であるクイーン。
兵士指揮官兼ボーン、キングの近衛であるナイト。

門番であり、皇女の近衛であるルーク。

そして、クローバーと同じ様な誇称の国特有の着物を纏つた王の補佐ビショップ。

「ビショップ……？」

そいつが恐らく、アリスを浚つた。

～反響の国の中と専属メイド～

アリスは微睡まじねみの中にいた。

「（ベッドの匂いも、感覚も違つ・・・？）ん・・・

浅い眠りの中でやう思つ。

アリスが今まで寝ていたベッドは、とてもフカフカで包み込まれるかのようだつた。

けれど・・このベッドは、フカフカだが沈み込んでいくよつた感覚。一度沈めばもう、2度と戻つてこれないようで・・・。

そこでパチッとアリスの目が覚める。

「う・・・ううううう・」

最近、こんなことが多い氣がする。いつの間にか知らない土地にいることが。

ベッドの周りをレースのカーテンが囲つていて、いわゆるお姫様ベッドといつやつだ。部屋は正直、とても豪華絢爛。

「と、こつよつこの格好は一体・・・

アリスは白いワンピースのような

ネグリジエのような着を身に纏つていた。

「アリスさま」

不意に声をかけられて驚く。

アリスが振り向くとそこには一人のメイドがいた。

髪を後ろで一つに束ねていて、金髪碧眼。

外見から判断するに、アリスより少し幼く16歳程度だろう。

「えっと……？」

「あ、リデルと申します。リデルはとても心配しました。
アリスさまが一生起きないかと思いました」

心底心配そうにアリスを見つめるリデルといつ少女は
一体何者なのだろう。そんなことを考えているアリスを尻目に、
リデルはてきぱきと説明し始めた。

「リデルはアリスさま専属のメイドです。御用がありましたらすぐこ
お呼び出しあさいます。これからよろしくお願ひいたします」

ペコッと一礼され、つられてアリスもお辞儀し返した。
思わず「いらっしゃですか」と聞くのを忘れたまま。

「アリスさまは汚れていましたのでお風呂に入れさせてもうござい
た。

下着と服はこちりで用意したものです。

ここはアリスさま専用のお部屋になりますわ」

すっかり、なぜ専用のメイドや専用の部屋が用意されているのか

「私の着ていた服はどこへ？」

「洗わせていただきました。・・・ですが」

そう悲しそうにリデルは目を伏せる。
長い睫毛まつげで頬に影ができていた。

「どうしても血が落ちなくて」

ドクン。

と、アリスの心臓が跳ねる。

全身の血が逆流していくかのようである。

血・・・血・・・・兎手たちの返り血。

アリスは人を殺したのだ。

その手で、相手の首を刎ねた。

武官として当たり前の行為かもしない。

しかし「アリスが武官だから」「これは戦争だから」
そんな理由で人の命の重さが軽くなるわけではない。
戦争では虫けらのように人は簡単に死ぬ。本当に、あっさりと。
首と心臓を狙えば即死だ。

「アリスさま? どうかいたしましたか」

蒼白になっていたためか、リデルから心配そうな声があがる。
アリスは引きつりながらも無理に笑顔をつくった。

「」

突如、ノックの音が辺りへ響く。

「入つて良いだらうか？」

アリスはリデルの顔と扉を交互に見、どうぞと返事をした。
低い男の声だった。

「では失礼」

ギイィイと音をたてて、開いたドアの先には予想通り男の姿だ。

「うひ 皇帝陛下……よ、良きいらしあいました」

リデルがふかぶかと頭を下げた。

（皇帝陛下つて！ キングさんのこと…？ といつゝとは…）

目の前にいる男が、アリスに求婚した“あの”反響の国の王なのだ。

「リデル、下がつていってくれ」

リデルははい。と返事をすると部屋から出ていった。
妙な空気が広がる。

「アリス」

今まで聞いた事の無い声で名を呼ばれ、アリスはすこしどもろとする。

キングはアリスに向き直ると視線を合わせた。

「・・・記憶喪失になつたと聞いた。それは真実なのか?」

キングは物静かにただ、それだけを聞いた。
アリスは困惑しつつも肯定する。

「そりゃ、か。もう俺のことも忘れているのだろう?

「はい・・・あ!でも誰だかは知つてますよ。キングさん、ですよ
ね?」

刹那、キングは驚きに駆られたかのような表情かおをしたが
すぐに真剣な顔をし、アリスを見つめる。

「なら話しば早いな。アリス、单刀直入に言つ。

結婚しよう」

そのとき、アリスは頭の中が真っ白になるかのような錯覚を覚えた。

25・反響の国の王と専属メイド（後書き）

登場人物紹介

キング（21歳）

瞳：碧色 髪：銀色

武器：全身（つまり魔法）

特技：・・・賭け事

趣味：・・・読書

備考：・・・結婚したい男NO.1の座に輝く。

反響の国の皇帝。

姉が一人おり、両親は故人。スペードと環境は似ている。

昔は今と違い冷血で非道、敗者切り捨てな性格だった。

21歳にして“反響の国最上治の皇帝”と呼ばれる。

アリスが大切でそれ以外の女は眼中外。

～女王の決意と王の決断～

ビショップ、いや反響の国にアリスを攫われて少し経つた頃。スペードはただ一人、書斎に籠つていた。

ダイヤとクローバーは今はいない。

クローバーは書斎外で、スペードを守つている。

ダイヤは宣戦されたため、文官として世話をしなく働いているからだ。

スペードは夕闇に包まれた部屋のなかで、田の前のコップを手に取つた。

中の水を飲み干すと、何か決めたように立ち上がる。

そうしてスペードは自身のマントを脱ぎ、胸元で隠されるように

なつて ^{チエーン}いる鎖を外す。

鎖には金色の鍵がかけられていた。

金の鍵で机のある小ぶりだが宝石で彩られた宝箱を開けると、中からスペードの瞳の色と同じ、紅い宝石で飾られた指輪を取り出す。

「“彼”を呼ばなければ、いけない……な

ポツリと呟くと、その指輪は華奢な指にはめた。
と、その時

「兄さまっ！戦争ついでにこいつと一緒に…全く訳がわからない…」

派手な音をたててハートが入ってきた。

すると、ハートはスペードの中指にはまつて、他の指輪を見て瞠目する。

「それ…その指輪…もしかして、“彼”を呼ぶの？」

「ああ…」

そう短くスペードが肯定の返事をすると、ますますハートはまくし立てた。

「やめてよー！兄さま。たかたが一武官のために王家直属の「仕方ないじゃないか！」

普段穏やかな兄のその声に驚き、ハートは押し黙る。

スペードはシャツとカーテンを開け、窓から外を眺めた。

「仕方ないじゃないか…好きになってしまったものは、変えられないんだ…」

「つーべつして！？べつしてみんなアリスアリスって！

初めて好きになった人…！ハンパーティーだって田線の先にはいつもアリス！

なんでみんな…べつじてなの…？」

目に涙をため、それでも泣かまいとハートはこらえていた。

愛されたい。

人がそう思うのは当たり前だ。それが好きな人からなら尚更。事実、スペードがそう思つてゐるようだ。

今にも泣き出しそうなハートの頭をそつと撫で、スペードはゆっくりと口を開いた。

「ね、ハート。ハートは小さい頃から父上と母上の愛情を受けて育つてきただろう？・・・でも、アリスはそれらの愛情を受けなかつた。

いや、受けれなかつたんだよ」

「・・・、どういふこと？」

その言葉に、静かにスペードは過去を語り始めた。アリスの幼いころの話を。

「あれは、僕も小さい時だつたからハッキリとは覚えてないけれどね・・・」

・・・アリスの母は白薔薇の国1の歌姫と謳われた美女、ロリーナ。アリスの父は紅薔薇の国1の軍神と呼ばれた男、イーディス。白薔薇の国と紅薔薇の国は敵国同士だつた。

それでも2人は結ばれた。国なんて関係無い、と。

しかし、2人とも自國から「反逆者」「非国民」と非難され、迫害され、亡国した。追つ手に追われながらも、そこでもうすでにアリスという子を宿していた夫婦は、黄昏の国へ逃げてきた。

黄昏の国は他国人や多種族で成り立つ国である。

誇称の国出身のクローバーや、獣人の時計兎やチエシャ猫がいい例だ。

そして黄昏の国へ来て、スペードとハートの父、前代国王に謁見した。

夫妻は自分の子をこの国へ滞在させてくれと頼んだ。

前代国王は「子だけでなく君らもいるといい」と言つたけれど、追つ手が来て、子はおろか、この国にまで迷惑がかかるといつて2人の愛おしい子、アリスの平穏を祈り泣く泣く思いで国を出て行つた。

「ハートだつて知つてゐるはずだ・・・

頭を優しく撫でてくれる父上の大きな手や、僕らを抱きしめてくれる母上の暖かな腕」

ハートはなぜか泣きそうな顔をしてスペードを見た。スペードは氣付かないフリをして言葉を繋げる。

「でも、アリスはそれを・・・親の愛情を知らずに生きてきた。僕はね、一度だけアリスからこんな話を聞いた」

『親なんてものは知らなかつたし、必要もないわ。

だつて・・・今までずっと無かつたし』えられなかつた存在だから・・・

だけど、村でハンプティーや他の子たちが親と一緒に手をつけないで歩いているのを見るのがなぜかつらかった。目を剥らして、見ないようにしてたの。

心の中ではやっぱり寂しかつたり羨ましかつたりしたんだなあつ

て実感したわ。

・・・・だから私“親”になるわ。皆を隔てなく抱擁できる親み
たいな存在に。

私みたいな孤児の子に愛情を与えられるような人間になりたいの

そう言ってアリスは笑った。

だからアリスはいつでも笑って、いつでも人に愛される。
あの温かい心に触れるたび、いつしか自分も温かくなれる。

「アリスは父のように皆を守りたいからと言つて武官になった。
それに元々軍神イーディスの娘だつたから素質もあつたしね。
だから“母”のように優しく、“父”のように強く……」

そこまで言つて不意にスペードは言葉を切つた。

目を伏せて、まるでアリスという存在をかみ締めるかのよう

27・女王の決意と王の決断 中編

「女王の決意と王の決断」

「……アリスは鏡だ」

そう言ってスペードは手を伏せた。

「理想の母親像と父親像を映すだけ。鏡の裏側はとても脆い。アリスも、そうだ。ハートよりも脆いかもしねない」

アリスは、人の死に直面すると、「落ち込んで前には進めないわ」と言う。

けれど誰も居ないところでは涙していた。泣いて泣いて泣いた。戦場でも同じように。無力な自分を嘆いて、深い悲しみに覆われている。

「まさか……アリスに限つてそんなこと」

「あるよ」

ハートの声が震えている。

今まで堪えていたはずの涙がポロポロとこぼれ落ちた。

「『』め……なさい……アリス」

その時、生まれて初めてハートは“他人のため”に泣いた。

「僕は、そんなアリスを好きになつた。

ただ、強くて優しいだけのアリスだったら、僕がアリスを好きになる可能性は無いよ・・・守りたいと思つた愛護心が何時の間にか

愛情に変わつていたんだ」

ゴシゴシとハートは赤くなつた目を擦る。

それを見て、スペードは決心したようにハートに向き直つた。今ハートにならこの国を任せられる。そう判断して。

「ハート、君にも王家に伝わる宝を託すよ。

僕が反響の国へ行つてゐる間、王の代理をするために」

ハートがこくりとうなずく。

それを目で確認すると、スペードは棚の奥から大きめの宝箱をだした。

「母上から、いつも肌身離さず持つ様にと言われた鍵を持つてるだろ?」

出してくれ

ハートはスペードと同じように鎖で繋がれた鍵を取り出した。チエーンスペードとは対照的に銀色の鍵をスペードに手渡す。ガチャリ、と重々しい音がして宝箱が開いた。

「これ・・・は・・・?」

中には、様々な宝石で装飾された棒の上に、真紅でハートの形をした宝石がついたステッキが入つていた。

「王代理を勤める女性だけが持つことを許される杖。これがいれば、王代理、すなわち他国との交渉や自國の武官文官の整理をする権利を持てる。ハートに託すよ、これを」

重みのあるステッキを持つ。

ハートはそのステッキを持った時点で、仮でも王だ。

「でも、やっぱり平氣かい？」

その問いにハートはフフンと不敵に笑む。

「あたしをだれだと思つてゐるの？」

ハートはこいつみえて頭が良い。
ダイヤに匹敵するほど。

「脳ある鷹は爪を隠す」というが、正にハートのためにあるような言葉だ。

「そうかい・・・じゃあ、頼むよ

スピードはスッと指輪に触れ、窓近くに移動する。窓を開け、身を乗り出す。

金色の髪が、闇夜のせいだらうか、黒く見える。

「あ、兄さま。アリストー言伝言お願い」

ハートは深く息を吸い込み、年相応の笑顔で言つ。

「帰ってきたら、一緒にお茶しない? って伝えて!」

その言葉を耳にしたスペードは、口の端を僅かに吊り上げて窓から飛び降りた。

27・女王の決意と王の決断 中編（後書き）

今更な気もしますが、ビショップの紹介です。
(ただ単に忘れていただけでしょうか。時計鬼)

登場人物紹介

ビショップ（20歳）

瞳：黒色　　髪：ハゲだが黒色
武器：錫杖＆式術
特技・・・観察すること
趣味・・・植物を育てること
備考・・・髪型が髪型なのでわかりづらいが
　　実は誰よりも男前。

反響の国の王の補佐（ダイヤと同じ）
クローバーとは何か因縁がある。
純和風な人物で、法衣をきている。
広い視野で周りを見渡せる知識人。

～女王の決意と王の決断～

城の最上階から飛び降りたが、スペードが死ぬことは無いだりつとハートは思う。

(・・・“彼”も付いているしね)

と、その時突然「入るで！」という声がしたかと思えば、ダイヤとクローバーが室内に入ってきた。

「スペードーナイトメアを反響の国に・・・・ってあれ？」

今日一日駆けずり回っていたダイヤは肩を上下させている。息を落ち着かせてから問う。「スペードはなぜ？」や？

ハートはといふと窓に手をかけボソリと小声へ言つた。

「アリスを救出に行つたわ」

その言葉を聞いた瞬間、ダイヤは皿を剥いた。

「どうにいようとせねん！ハート……」

ハートの肩をつかみ強く揺さぶる。

その激しさに、ハートは氣絶しちとなつた。

「ダイヤ、少し落ち着け」

クローバーが咎めると、ダイヤはパツとハートを離す。ダイヤの瞳には焦り、ともしうべき感情が宿っていた。そんなダイヤをクローバーは横目で見やり

「で、どうしたことだと？」

と、物静かに訊く。

ハートはクラクラするのか暫く黙つていたが、やがて口を開いた。

「兄さまはアリスが好き。ソレは知つていてるでしょ？」

・・・だから例え地位を捨ててもアリスを助けに言つたのよ

流石にこれにはクローバーも驚きを隠せない。
だがすぐに氣を引き締め、キッと前を見据えた。

「・・・勝手なことをしてくれたもんやな、スペード。
地位を捨ててでも・・・? ふざけとるん?」

「そうだな。王なんて地位を、スペードがやらねば誰がやるといふのだ?

甘えたこと、言つものだな。今の王とやらは

2人の声には怒りに似た何かが籠つていた。

そうだ、2人は怒つ^{いが}っているのだ。

王位を捨てても・・・なんて馬鹿げたことをいうスペードに対しても

「ま、今文句言つても仕方あらへんし、説教は後回しや。

クローバー、ナイトメアに伝えるで

自分達もナイトメアに同行するということを。

隠されたその言葉をクローバーは正確に読み取ると、作業に戻るため走つて部屋を出よつとした。

「待つて」

しかし、そのハートの声に2人は足を止める。ハートは静かだがよく通る声で言つた。

「兄さまが・・・反響の国へ行つて良かつたわね。これであなた達がアリスを助けられるから」

「・・・どういう、意味だ?」

「兄さまは知つてゐるわ。クローバーとダイヤはアリスが心配で仕方無いつてことを。

でもあなた達は王の近衛と補佐。王の傍を離れるわけにはいかない。

だから、兄さまが反響の国へ行つたことにより、あなた達も反響の国へ行ける。

- ・・・兄さまを捜すついでにアリスも捜せる。まあ、アリスを捜すついでに

兄さまを捜す、かもしれないけどね

「あんた、ほんまにハートなん?」

いつもとは違う様子のハートに思わずダイヤは呟いた。

ハートは笑いながら

「脳ある鷹は爪を隠すつてのはあたしのためにあるよつな言葉なの
！」

と言い放つた。

やはり、ハートはハートだった、とも2人は思う。

「もうね、あたしは爪をかくしたりしない！第一、宝の持ち腐れだ
しね！」

・・兄さまは死んでも、王位を捨ててもアリスを守ると決断した
の。

だから私も決意した。本氣で黄昏の国と女王として働くことを

王は危険を冒しても反響の国へ行くと決断した。

例えそれが、多くの人物に迷惑と心配をさせても。

女王は今にじに、黄昏の国のために“女王”になると決意した。
女王のよつに気高く、それじや母のよつになると。

ハートはぐつと胸の前で握りこぶしをつくつて、祈るように瞼を開
じた。

～Hの記憶と好きな理由～
わけ

アリスはただ焦っていた。
いきなり結婚しようなどと言われれば誰だってそうなるだろう。
しかも「して下さい」ではなく「しよう」だ。

「アリス」

と名を呼ばれ、考へにふけっていたアリスは、油をさしていない
玩具のようにギギギと振り返った。

「で、披露宴はいつがいい？」

急に話が飛躍していくことに苦笑しつつ同時に焦る。

「ちよ、ちよっと待つてくださいー。」

「敬語はこらない、どうせ夫婦になる身だ」

れりに話が跳んでいく。キング、恐るべし。

「そうじゃなくて・・・急に結婚なんて！
私の意志はどうなつているの？」

そんなアリスを他所に、キングはクスリと笑う。

「ふむ。意思というが、俺とアリスはすでに婚姻済みだぞ」

「え”？」

思わず間抜けな声をあげるアリス。

それに比べてキングは真剣な顔でアリスを見つめる。

「覚えていないだろ”が本当だ。

アリスに俺が求婚したとき、アリスはそれに応じた

「お、応・・・じた・・・？」

ドクン、と心臓がはねる。

何かが、何かがおかしくないか

？

「ああ、条件つきだつたがな。しかし、そうでもしなければ
アリスが応じない」とくらくなつかっていた

少し自嘲気味にキングは言つ。

確かに条件付だつたのだ。

それは、黄昏の国と同盟を結び今後一切争いをしないことと、
白雪の町を諦めること。

アリスが応じぬ場合、本氣で黄昏の国を攻めるし、白雪の町も賣つ。

こうキングは言つた。齧しと言つていいくほどの口元。

所詮、國を動かす王であつても人間だ。
キングも、そしてスペードも。

アリスが欲しいから、アリスを手に入れたいから、
アリスに自分の傍で笑つっていてほしいから、

王らしくない行動を起こす。

それは、唯ただアリスが為に・・・

◦

～王の記憶と好きな理由～
わけ

国を何より思うアリスは迷い、そして頷いた。
キングの妻になると。

キングはアリスの心を利用した。
例えそれが利己的^{むけ}だとしても、アリスは了承した。
それは一番楽な道への逃げなのに。

「まあ、どうしてか君はしばらく行方不明になつた……
それがアリスが黄昏の国へ戻る十日前のことだ」

おかしい。
どういふことなのだ。

アリスは結婚に応じた。だが、何故か国から逃げた。
黄昏の国を想う、アリスにしては不思議な行動。

そして、反響の国から黄昏の国へ行くのは約一日半。
残った八日間何をしていた？

おまけに、反響の国の民が国からアリスらしき人物を見たのは、
アリスが行方不明になつてから八日後だ。

一体これはどういうことなのだろう。
どこかで、矛盾が発生している。

キングもアリスも考え込むように目を伏せる。
しかしこいつやって考え込んでも、わかるのは記憶を無くす前のアリス、
否、^{いな}“アリスの以前の記憶”のみだ。

アリスはやがて深く息をつくと、話を逸らす。

「あの、キングはどうして私を好きに……？」

それは少しばかり興味のある話だった。
だからついでに、と聞いてみた。

キングは顔をあげ、アリスを正面から見る。
「ふつ」と微笑し、アリスの隣に腰掛けた。

アリスが座っているベッドが一人分の体重を受け、小さくギシと鳴る。

「これは、以前もアリスに話したことのある話だ……」

そう切り出し、ゆっくりとアリスに語り始めた。

アリスと出会う以前のキングは冷血で、^{マジオネック}操り人形のようだった。
今のように感情豊かではない。淡々として役者のように理想の王を演じるだけの。

ある時、国土拡大のために田をつけた、白雪の町。
できる限り、穏やかに済まそうと思っていたが、そうはいかない。

当たり前だが、黄昏の国は使者を送りつけ抗議した。

直接話すため、謁見の場に引き出された使者。

誰もがその人物に目を奪われた。

金色のやわらかな髪に、空のよひに碧く青く蒼い吸い込まれそうな瞳。

使者は女だった。てっきり男だと思っていた周囲が驚きに駆られるのが手にとるなりにわかる。

女は慣れたよひに息をつくと、跪き、一呼吸した。

「初めまして。黄昏の国の使者、

アリス＝“リテル”です」

30・Hの記憶と好きな理由 中編（後書き）

ついに三十話突破しました！！

記念にまた番外編でも書こうと思っています！！

それでは

The thanks that are great to
reading people!

（読んでくれる皆様に多大な感謝を！）

～王の記憶と好きな理由～

一同はやうにやわめく。

この少女をすきたばかりであるつ人物が、あのナイトメアの一昧である

“黄昏の国のアリス”である、とは。

「それ程、珍しいでしょつか。女の武官……いえ、いちらの国では兵士といいましたね」

丁寧の裏に、ビヒが棘々（ビザビザ）したのある口調で、アリスは喋つた。

挑発にも似た発言に、内心キングは嘲笑するとすぐこにアリスに向き直る。

「じろじろ見て失礼した。何せ、使者で女性とは初めてだったのでね」

仕事用の笑顔を振りまくと、その場にいた貴族の娘や侍女が顔を赤らめる。

ああ、なんて女は単純な生き物なのだろう。

キングの胸に寂れた風が吹き込む。

アリスはキングの笑みにも動じず、ぐっと顔を上げた。

「では、アリス＝リデル。黄昏の国言い分を」

「ならば、遠慮なくいたします。まず始めに、白雪の町を諦めていただきたい。

無駄な争いは避けたいのです」

「だから、諦めると? そちらが譲れば話は済むだろ?」

キングのその言葉に、予想していたかのよつにアリスは口を開いた。
「お忘れですか皇帝陛下。今の國土は遙か昔の世界大戦、その結果
分けられた物。

もうこれ以上國土でとやかく言ひのせどつかと思われます」

・・・討論がしばらく続くが、どちらも譲る気が見えない。
時間だけが刻々と過ぎていき、本日は一旦止めることにになった。

「わかりあえず、残念です。また明日、良い返事を期待しますね」

そう言つてアリスは踵を返す。
が、なんとなく、ほんの気紛れで、キングはアリスを呼び止めていた。

「・・・何かおありでしょうか?」

訣然としない様子でアリスは返事をする。
キングはといふと内心冷や汗をかいた。
なぜ、こんな取るに足らない女に声をかけてしまったのだろうか、
と。

「・・・アリス=リテル。何故武官とやらになつた?
女の身であるのに」

何故かこんなことを聞く自分がいて、キングは変な気分になつた。
どうして、身分が下の者に私情を聞いているのか。
それはキングにもわからない。

「何故・・・？愚問ですね、皇帝陛下。

私は別に何も血が、戦が好きだから武官になつた訳ではありません
ん。

むしろ戦事たたかひは嫌いです。けれど、愛しい人々が国にいます。
その人達を守るため、戦を無くすため・・・矛盾しておりますが、
戦うことを選びました」

田を、キングの田をしつかりと見て、彼女は言つた。
王、ではなくキングを見て。

「そして今まさに戦争が始まるとしています。

皇帝陛下、貴方は間違つてこます。國の王トツノウは國の声、つまり民を
中心に考えるべきです。止められる、しなくてもいい筈の戦争を・
・

物を破壊するだけの戦争を、貴方は今、自主的に起じやうとして
いるではないですか！」

キングは、今でもその時のこと昨日のことのよつて出せる。
キリッとした表情かお。凜とした聲音。きつぱりとした口調。

そして何より、“キング”を見るその瞳。

この女は今まで自分が出会つてきた女とは違つ。

今までこんな女に会つたことは無い。

侍女も貴族の娘も、自分の姉も、誰とも違う。

確かにこのアリスという存在は、容姿が美しかったし教養も素晴らしい。しかつた。

けれど、そんな物、アリスの心と比べれば・・・意味が無い。霞むべきものとなつていた。

大勢の前で討論をすると、貴族の横槍が入るので非常に煩わしい。アリスの申請もあつたので、一人で会議することになった。そんなとき、アリスが不意に言つた。

「あなたは操マリオネットり人形のようですね」

アリスは既にわかっていた。

キングを演じていることも全て。操り人形であることも、全て。

「たまには、心から笑つたらどうです？」

そう言つてアリスは微か、ほんの微かだが微笑んだ。初めて、自分に見せた笑顔。正直キングはアリスの笑顔は見たことがある。

城内の侍女や侍従と話しているとき、笑つていた。

だが、それとは違う。

“自分”に向けられた笑顔なのだ。

どうしてか、胸の奥を締め付けられるような感覚が、キングを襲つ。

初めての、感情だ。

手に入れたいと、初めて思った。誰にも渡したくないと、初めて思つた。

ああ、どうして。

こんなにも、この女性に惹かれるのか。

思わずスッと自然にアリスを抱きしめていた。
最初はアリスも驚いていたようだが、やがてぎこちなく腕を動かし、
頭を優しく撫でてくれる。なぜだらつ、

不快には、感じなかつた。

「ど、まあこのような経緯だな。

我が国は自由恋愛主義国だから、身分が違つても誰も反対しない」

語られた過去に、自分も随分大胆なことをしたのだとアリスは思う。
運がわるければ首を刎ねられていたかもしれない、というのに。

キング
この人は本気で自分を好きなのだ。と、感じると急に
恥ずかしさを覚え、思わず目をそらした。

そんなアリスを見て、キングは心から微笑つた。
アリスが自分に言った「心から笑う」ということ。
今では不自然無く笑えるようになった。それもすべてアリスのおか
げ。

時は、穏やかに流れていった。

扉の前、その話を聞く一つの影があるとも知らずに。

小話1 梅雨と恵みの雨

- 帽子屋的見聞録 -

黄昏の国、はとても過りやすい国だ。
地理的に四季とこゝものがある、とこゝのも理由の一つだらう。
夏には夏の良さがあるし、冬には冬の良さがある。
だからこそ、黄昏の国は住んでいて飽きない国だ。
しかし、梅雨期は勘弁してほしいものである。

俺、帽子屋はそんなことを思いながらため息を吐いた。
ところの、俺は何時ものじとく仕事しようとした城に行つた。
だが、その帰り急に雨が降ってきて、今も雨宿り中だ。
(俺は城内ではなく城下町の宿舎で生活している)

そういえば、昨日から梅雨入りしたとか云われていた気がする。
雨は豊かな森を育む恵みの雨だ。それをわかってはいる。

でも、嫌なものは誰だって嫌だ。

ジメジメするし、カビには生えるし、洗濯物は乾かないし。

・・・宿舎暮らしをしていくせいか、物凄く主婦臭くなっているな、

俺。

そんなことを思いつつ壁にもたれた。

雨宿りといつもののは、とてもなく暇でとてもなく憂鬱だ。
この分だと雨は止みそうにない。
しかたなく濡れて帰るしか・・・

「あら、帽子屋？」

そんな憂鬱な気分も吹っ飛ぶくらいの女の声がした。
顔を見なくても声でわかる。その人物は

「アリス・・・」

自分の想い人、だった。

でも何故アリスが此処にいる?
どうして傘をさして俺の前にいるのだろう。
確かアリスの宿舎は時計鬼たちと同じ城内だったはず。
なぜ城下の細道の、今では使われていない小屋（俺は雨宿りのため
にいる）の前にいるのか。

買い物でもしていたのか？にしてはこんな細道通る訳も無い。
それにアリスは傘以外は何も持っていない、手ブラだ。

「なんでこんなところにいるの？」

アリスの方から俺に尋ねて来た。
相手にしてもきっと俺と同じことを思っていたんだろうと推測できる。

「雨宿り。宿舎に帰るのとしたら降ってきた」

体を壊したくないしな、と付け加えるとアリスも確かに、と笑う。
質問に答えたのだから今度はこちから質問だ。

「アリス、何故？」

「んー、散歩」

「散歩……？」

唚然とした。よりによつてひじてこんな雨の日。晴れた日の方がよっぽど良いと思つ。

「うん。……私、雨の日好きだから」

「は、好き？ 雨の日が？ 僕はジメジメして好きじゃないが」

湿気を含んだ服の裾を摘みそつ言つと、何が面白いのかアリスは笑んだ。

「私もね、前までそう思つてたけど。雨は雨なりに良い所があるわ。晴れの日なんか、太陽の下にトンファー置いてたら火傷しそうに熱くなつてたし」

懐かしむようにそうアリスは話しかけてくる。

確かに夏場は武器が熱を吸収してものすごく暑くなつていた。
俺の大剣も例外ではない。

「雨はマイナス面の方が強いかもしないけど、植物、花、農民には物凄くありがたい恵みの雨なのよ。私個人の意見だと猫は雨が苦手だから、

雨が降るとチエシャ猫も大人しくなるしね。ありがたいわ。
帽子屋はそういう風に思つたことない？」

俺は少しだけ考えてから「いや、無い」と返事した。

するとアリスは少しだけ残念そうな顔をしてから

「これからあるといいわね」と呟く。何で残念がるのか分からぬ。自分の好きな物を、他人にも好きになつてもらいたいという心理だらうか。

悪いがその心理は当てはまらない。何よりこれ以上アリス好きな奴が増えてたまるか。

「で、帽子屋これからどうするの？」

「どうするつたって……何時上がるか分からぬ雨が止むのを待つか、濡れて帰るかのどけじかないだろ？」「

「じゃあ、傘、入る？宿舎まで」

俺は思わずアリスの顔をまじまじと見た。

まさか、そんなことを言われるとは。普段ならそんなことをしてみよづ。

間違いなく殺られる（主に時計鬼）睨まれる（主にチエシャ猫）するがるような田で見られる（主にハンプティー、スペード etc）ことが安易にわかる。

・・・・・そう言えばそんなことをポツリとハートに洩らしたところ

“イカレ”帽子屋じやなくて、“ヘタレ”帽子屋ねと呆られた。

このチャンスを逃せば、一度といふなこととは無いと思つ。だつたら、逃さないまでだ。

「頼んでいいか？」

「了解。じゃ、入つて」

アリスの隣で相合傘。またか嫌いな梅雨で
こんな幸運なことが起こりうるなんて、思ってもいなかつた。
今日は何て恵みの雨なのだろう。

「あ、そりが

「なに?..どうしたの? 帰子風」

「いや、雨の日も悪くないって今思えただけだ」

「へえ、何があつたかわからぬいけど・・・よかつたわね」

本当に、良かった(;)の際アリスの鈍さには突っ込まないことにじ
めづ(ひづ)

びづめづ、雨の日も好きになれそりが

小話1 梅雨と恵みの函（後書き）

30周年記念に書いた

「帽子屋的見聞録 - 梅雨と恵みの函」です。
いかがでしたでしょうか？

「イカレ帽子屋」「ヘタレ帽子屋」のネタは
絶対しようと思いました。これは実話なので（笑）

では、これからも「黄面の国」のアリス」を
よろしくお願いいたします。

おまけ4 チョシャ猫に50の質問

～おまけ・チョシャ猫に50の質問～

01 お名前をどうぞ…！

チョシャ猫だよ。

02 性別は？

って表明するほうが正しいかな。

03 誕生日！

遅生まれでねえ。

歳は16ー。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

右目が赤で左目が青。で、髪は赤紫、濃いピンクだねえ。
あとお猫の獣人だから、猫耳と尻尾がついてるよ。もちろん髪
と同じね。

05 動物に例えると？

気まぐれだし、猫かなア。

06 特技は？

高いところに登るーと。得意だよ。

07 ご趣味は？

ええー、そんなこと聞くの？

・・・アリスかなあ。アリス「の何か」を聞くことは野暮だからね

え？

08 将来の夢など

アリスの婿さん～。アリスがダメつていうならペットでもこ ciòよお。

09 好きな言葉とかある？

「悠々自適」だねえ。まさにオレのためにあるよつた言葉だねえ。

10 好きな動物は？

いないよお。同種の猫もあんまりかわいいとアリスがとられちゃうからア・・・

兎は大嫌い。

11 好きな色

オレンジ色～。陽だまりの色だもんねえ。

12 好きな料理

オレは魚とか肉が好きだなあ。

どこかの兎と違つてエ。

13 好きな異性のタイプ

アリスト（即答）

14 好きな同性のタイプ

面倒見の良さそつなあ、帽子屋みたいな感じい。

15 座右の銘は？

えへへえ～「天真爛漫」だよお。

無邪気な子供のままでいよづと思つてえ。

16 暇なときなにしてる？
アリスの傍で、じろじろしてて、日向ぼっこしてて……

17 旅行とか好き？

アリスとなら天国でも地獄でも。

18 癒されることって何？

アリスの笑顔だよ。本当に好き好き大好きなんだ。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

アリスだけえ。

20 ぶっちゃけその人は恋人ですか！？

ん~・まあ。いつでもオレは準備できてるのに。イ。照れ屋なんだからさあ。

21 コンプレックスとかつたりなんかしちゃつたりする？
んう、水が苦手なこと。

22 それを解消するために何か努力はしてる？
こればかりは、猫の遺伝子だからねえ。

23 じゃあ逆に自慢できることは何？
高い場所は得意だよ。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

アリスと出会えたことと、
アリスが（オレがまだ成人してなくてえ完璧猫のとき）ギュッとしてくれたこと。

25 人生で一番驚いたことは?
アリスの記憶が無かつたことだねえ。

26 人生で一番楽しかったこと
アリスと黄昏の國のお祭りに行つたことだよお。

27 人生で一番怖かつたこと
これだけはアリス関連じゃないけど、
時計兎に小さい頃の復讐されたときかなあ。口に出すのも恐ろしい
・・・

28 人生で一番辛かつたこと
アリスと喧嘩（というよりアリスに一方的に嫌われた）こと・・・
仲直りできたときはあ、泣く位良かつたよオ。

29 外向的？内向的？
どつかでもないかも。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
興味ない。

31 ジゃあ、1000万円もらいました。どう使つ？
アリスにあげる、興味ないからあ。

32 子犬が捨てられていた！-愛らしい声で鳴いています。どつ
てる？
うーん、美味しそうなら食べるウ。
・・・冗談だよお？騙されたー？

33 突然頼みごとをされました！ あなたなりやつする？

『氣まぐれだから、氣が向いたらこよな。』

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃつたよー。どうして? アリスさえいれば友達はいるないよ。

35 嘘はつけるタイプ?
うん。

36 もしかしてその嘘はつこにもすぐバレちゃつたりしない?
どうだろお。微妙だねえ。

37 何か癖ある?
爪を研いだりする」とか? わかんないやア。

38 誰かに何か言いたい」とたまつてない?
うん。

39 あるつて答えたそこのあなた! じゃあこの穴に向かって
思つ存分叫んでください!!!
アリスうー、オレもう食え死にするよお!
アリスに食えちゃうよおー!

40 ……酸素マスクいる?
いらないねえ。

41 あなたにとつて一番大事なものは?
アリス! (即答)

42 自分といったらコレ! みたいなのある?
気まぐれ猫。

43 崇拝してる人とかいる? いないよ。崇拝も尊敬もないよ。

44 どうしよう! 財布を掏られた!!

財布は持たない派。

45 コレだけは誰にも負けないものってある? ネズミ捕りの才能でね。

46 こいつには敵わないつていう人いる? アリスだけ。

47 全部答えてきたね? ジャあこのノリで普段なら言えないう秘密トークをお願いします!! ううーん・・・無いナア。

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ? なんだろねえ? Mキャラなはずだけどその設定が生かしきれてない気がするよ。

49 こじわじばかりに生みの親になんでも言ひちゃえ!

48でも言つたけど、Mな設定はどうなるの?

それによ、この前の小話なんで帽子屋なお? オレも小話書いてよ!

50 ここまで読んでくれた方に何かお疲れさま。

これからも黄雀の国アリスをよろしくね。

オリキヤラに50の質問

「Water Future」
urn:finito-web.
com/oricharterfut.
50.

32・反響の国の女皇と近衛（注意一）（前書き）

一部話の都合上、近親相姦的な表現が含まれます。

例：弟に対して恋愛感情を持つようなもの。

（そこまで過激じゃないですが）

苦手な方はお戻りください。

読んでやるといつ獣者の方のみどうぞ。

32・反響の国の女皇と近衛（注意！）

「反響の国の女皇と近衛」

「くそつ！あの女……」

忌々し氣にその女は壁を叩いた。

その女の後ろには、鎧に身を包んだ者が静かに立っている。

「何故、戻ってきた……！」

暗いその部屋に、鎧を着た者が灯をともす。

ボウ。という音とともに女の顔も、鎧を着た者の姿も明らかになつた。

女は美しい黒髪を巻き毛にし、真紅のドレスを着ていた。
見るからに派手派手しいドレスなのに、女と違和感なく
むしろ美しいと感じさせてしまうのは、その女の美貌故だろう。

「クイーン様。どうか落ち着いてください」

クイーン、と鎧を着た者　女皇の近衛であるルーカ　は女にそう呼びかけた。

クイーンとはキングの姉。つまり反響の国の女皇。
狂眼と呼ばれる赤い瞳を爛々と光らせ、

「これが落ち着いていられるものか！」

と吐き捨てた。

「アリス＝リデル！あの女・・・よくもキングに…！」

女だてらに兵士として活躍し、女皇の近衛に選ばれたルークは悲しげに目を伏せた。

クイーンは狂っている。

それは、ビショップとナイト、ルークしか知らないこと。いや、もしかするとキングも気付いているかもしれない。ただ、気付かないフリをしているだけで。

クイーンは、実弟おじいちゃんであるキングを愛している。本物の姉弟であるにも関わらず、だ。

血の濃さを保つため、従兄弟いとこなど血の繋がった者同士結婚するのは王族では良くあること。だが・・・姉弟はまずない。いくら王族といえどもそれはない。

誰よりも知的で、誰よりも強く、誰よりも美しかった皇帝キング。姉はその者を愛した。たとえ近親相姦であるうとも。血の禁忌けひときであるうとも。

女皇は、狂愛といえる狂った愛情を実弟に向けたのだ。けれど、長年の間、女皇は誰にもそれを悟らせなかつた。いくら弟が自分にたいして、本当に欲しかつた“恋愛心”を向けてくれず、姉弟愛といつものしか向けてくれなかつたとしても。女皇はそれでも構わなかつた。

「クイーン様。まだ“リデル”が在る以上、“アリス＝リデル”という者は
“存在しません”。あの者はアリス＝リデルでなく“アリス”です」

「ふふ・・そうだったな」

一つの町が、一つの使者が、クイーンの奥底に潜む狂愛を引きずりだしてしまった。

白雪の町のことと交渉することになり、そしてアリスといふ名の使者が送られた。

そうしてキングはアリスに惚れてしまった。

キングは愛した。アリスのことを。

あんなにクイーンが心で欲していた恋愛心を、アリスは数日の間で手に入れた。

それは、クイーンを狂わすのには充分だった。

「まあいい。また私の呪^{じゆ}で消せばいいだけのこと

クイーンは前から黒魔術という禁呪に魅入られていた。

危険すぎるその魔術は、狂眼の目を持った者だけに使える。狂眼でない者が使えば、使用者も相手もどちらも死ぬからだ。長年、勉学していたその魔術をクイーンはアリス＝リデルに向かつて使用した。

流石に殺せば厄介なることになる。だから殺さずに、

「記憶を、ですか？」

アリスの記憶を奪つた。

そしてその際偽装工作もした。

ビショップの式術「傀儡」を使わせ、アリスに黄昏の国あてに手紙を書かせたのだ。

そうすれば、黄昏の国は「アリスは結婚は嫌で、反響の国に監禁されたが、

逃げてきた。しかし途中で事故で記憶を失つた」と思わせられる。誰もがその術中にはまつた。

「そ、う。・・・だが、リデルの存在は予想外だつたがな・・・ルーク、命令と作戦を今から言つ

クイーンは赤い口紅で彩られた口元をくつと歪ませる。

「アリスを、捕らえる」

その一言は、何よりも狂った言葉で。

それを分かつていながら、ルークは静々と自身の蒼い髪を揺らし、頭を垂れた。

32・反響の国の女皇と近衛（注意！）（後書き）

登場人物紹介

クイーン（24歳）

瞳：赤色　髪：黒色
武器：杖（黒魔術）
特技・・・魔法
趣味・・・読書（歴史書や魔術書）
備考・・・スピードと同じ狂眼の持ち主。

反響の国の女皇。

キングの姉。キングを心から愛している。

普通の魔法より強力な黒魔術に魅入られている。
目標を達成するには手段は厭わない人。

美にも魔術にも教養にも一切の妥協をゆるさない。

～自己犠牲と女皇の罪～

キングから、昔の話を聞かされたのはつい数日前のこと。アリスはどうしても迷った……が、国のために、そして既に婚約済みということから考へ、結婚を承諾した。

それがわざと、一番良いのよ。

アリスは王妃となる。黄昏の國も安寧。良いこと尽くしではないか。

悲しいかな、自己犠牲といつものは。

キングによると早い方が良いといつので、今日、形だけだが結婚式が執り行われることになった。そのせいか、城は朝から賑わっていた。

流石は、血虫恋愛主義國と云々べきか。アリスが王妃になるといふことは

何も反対意見は無かつた。といつのも、黄昏の國の住民だから人質にも使える、利用価値があると判断されたのだろう。それでも、すんなりと事が進むので良かった。

「（黄昏の國にも手紙を出しておいたし、大丈夫よね）」

そんなことを脳内で考へてみると、

「アリス様、とっても美しいですよ。リデルはとても嬉しいです」

そうリデルが心から嬉しそうに、目を細めて笑つた。

リデルはとても良い娘だ。

黄昏の国へ来て、独りだと思っていたアリスの傍にいつもいてくれた。

心の支え、とも言える程にまで。

白いドレープのついたドレスを着、様々な装飾品をつけ、リデルの手によってメイクアップしていく。

アリスは自分の変わりように苦笑しつつ、鏡を見た。マイクは女の武装といわれるのも解る気がする。

「ありがとう、リデル」

リデルはアリスの言葉に「いえ」と微笑むと、パタンと部屋の外へ出て行く。

先程までは、リテルのみでなく数十名のメイドがいたのだが、アリスの希望で全員戻（らせ）たのだ。

卷之三

首を傾げ、アリスがドアを開けると、ノックした本人が姿を現し、
言つた。

「こんにちは。アリス様。この国の女皇の近衛、ルークです」

そこには二つの鎧を今日はしておらず、シンプルなドレスに身を包んだ

ルークが立っていた。ルークはアリスに頭を下げる。

「……あの、ルークさん？」

「アリス様、失礼かと存じますが……」

「いやあの、ルークさん？・・・顔、上げてもらえんか？」

私もただの武官ですし。今回のは玉の輿つてやつですし……」

アリスがおずおずと言つと、ルークは頭を上げた（それでも敬語は抜けないが）

「我が主、クイーン女皇陛下にお会いしてもらえないでしょうか？」

「（クイーン女皇陛下って、キングの姉の方だっけ・・・？）
一度も顔見せしていない私の方が失礼ですから、行きます」

では来て下さい、とルークの後をアリスは大人しく着いて行く。
これが、女皇の罷とも知らぬまま。

33・血口犠牲と女皇の罠（後編）

登場人物紹介

ルーク（18歳）

瞳・黒色 髪・蒼色
武器：剣
特技：剣術
趣味：絵を描くこと
備考：実はナイトと恋人同士。

反響の国の女皇の近衛。

女だてらに剣を振るい、女皇の近衛へと登りつめた。クイーンのことをもつとも尊敬し、心配している。

故に女皇の命令には逆らわない。

おしゃれには興味があるが、今は戦いへおしゃれである。

（第三者と狂う歯車）

ルークに言われて、ついてきた先は女皇の部屋だった。

「やはり王妃で、自身の義妹君になられますから。

一度は一人きりで話がしたかったのでしょうか？」

ルークはそう一言残し、アリスを部屋の中へと促す。
おずおずと扉を開け、中に入る。すると・・・

「お入り、アリス」

むせるような薔薇の香り。そして、そこに座っていたのは女皇。
同じ女王でもハートとは違う雰囲気をまとわせていた。

「少し、話してみたいの。良いわよね？」

「あ、はい」

にこりと笑んだクイーンに、アリスはどうか安心感に似たものを覚えて、
またアリスも笑み返した。

『スペード』

馬車の中、真っ暗闇で黄昏の王の名を呼ぶ声があった。

王　　スペードは閉じていた目を徐々にあける。

声の主は確認できない。それもそうだ。姿形などその者には無いからだ。

「何だい？」

『本当にこれでいいと思つてゐるのか？お前は王なのだぞ。

一人の私情で、国を戦争に巻き込んだ。一人の人間だけのために國が犠牲にならうとしている』

その者の言葉はぐつとスペードの胸に突き刺さつた。
けれど、もう引けないのだ。

『アリス・・・あの女があの皇帝と結婚すれば、全て丸く収まるだ
らう。

國も守れて、おれおれ妃にもなれる』

「つ・・・」

確かにそうかもしねない。アリスは“それ”を望んでいるかもしねないのだ。

アリスを救う・・・この言葉は一見、アリスのための事に思える。
しかし、結局は周囲の者の私情でできた言葉に過ぎない。
全て、利己的な、考え。

「・・・ア、アリスは王妃になりたくないはずだよ」

それは“王”としてアリスを覗いていたから言える一言。

アリスが王妃になりたいというのなら、自分を覗てもいいはずだ。
が、アリスはスペードを見ていたけれどスペードを見てはいない。

スペードを王として思つてゐるけれど、想つてはいなかつた。

「アリスがなりたいのは、皆を守れる武官だ」

『だから、アリスは違ひつと?』

ウン、とスペードは頷くと、その者は「人間はわからん」と溜息を吐いた。

第三者から見て、本当に^{スペード}いつは馬鹿だと思つ。

好きなら好きと言えば良いのに。好かれていないなら、好きにさせれば良いのに。

何故、そんな単純なことができないのか。

つぐづぐ思つが、人間とは不思議なイキモノだ。

「それにね。僕は・・・たつた一人でも、犠牲が無いと築けない国なんかいらないんだ」

スペードのその顔は合間見える王の、王としての表情だ。
誰かを犠牲にしないとできない国は平和ではないと。

そうスペードははつきつ言つた。まるで、スペードの父、先代の王のよつと。

『フ・・・そつか。まあ、俺はあまりあの女が好きでない。
言つておぐが、助けるのはお前の命だからだぞ』

「ははは。変わらないね、そんなところ。

・・・・それでも良いから、力を貸してくれよ? ジョーカー」

姿は見えないが、その時、ジョーカーと呼ばれた者が笑つているの

をスピードは感じ取つた。

34・第三者と狂つ歎車（後書き）

登場人物紹介

ナイト（20歳）

瞳じがね：黃金色
髪：翡翠色

武器：剣

特技：剣術はもちろん体術など

趣味：体力作り

備考：ルークとは幼馴染でもある。

反響の国の皇帝の近衛。

剣さばきは帽子屋なみ。そうとう強い。

皇帝に忠実を誓つており、結構フラフラしている
ビショップとは良い喧嘩友達。

ねねけ5 帽子屋さんの質問

「おまけ・帽子屋に50の質問」

01 お名前をどうぞ…。

帽子屋。

02 性別は?
正真正銘の男だ。

03 誕生日!

冬生まれ。20歳だが。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

ハンチング帽子を被つていて、目は黒色で髪はレーズ茶色。
金髪蒼目アリスや赤髪黄目ハンパーティーやその他モロモロの中
では地味な方だな。

05 動物に例えると?

?・?・何だらう。アリス、何だと思つ?

アリ「えーと・・群れの統一性あるし、強いし狼かしい」

06 特技は?

戦うことだけだろ。

07 ご趣味は?

紅茶を飲むことだな。

08 将来の夢など

夢、か。幸せに生きいたら良いな。

09 好きな言葉とかある?

有無相生。その意味は、有と無は、有があつてこそ無があり、無があつてこそ有があるという相対的な関係で存在すること。また、この世のものはすべて相対的な関係にあること。といふものだ。

10 好きな動物は?

犬が好きだ。忠犬は良いと思うぞ。

11 好きな色

空の色、つまり蒼色が好きだな。澄んだ色だから。

12 好きな料理

紅茶に合ひつ・・・クッキー。（クッキーも料理の一つだろ？）

13 好きな異性のタイプ

凛としている女が好みだ。

14 好きな同性のタイプ

そうだな・・・クローバーのような責任感の強い奴は友人になりたいと思うが。

15 座右の銘は?

「おじれる者は久しからず」クローバーの故郷の言葉だな。

16 暇なときなにしてる?

掃除や料理作り、食材の買い込みに行っている（だから主婦臭いと言われるのか？）

17 旅行とか好き？
多文化には触れてみたい。

18 癒されることって何？
お気に入りの紅茶を飲んだとき。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？
空気を読むダイヤだ。うるさいときはうるさいが、物静かなときは物静かだしな。

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？
そんな訳ないだろう！ただの友人だ！！

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？
(外見的にも) 地味な所か？

22 それを解消するために何か努力はしてる？
だからといって、チエシャ猫やハンプティーミたいになりたくもない。

俺は俺でいい。

23 じゃあ逆に自慢できることは？
強い所と家庭的？な所か。

24 人生で一番嬉しかったことは何？
ゴールデン・ティップスという超高級紅茶を飲んだときだ。

それは年の初めに摘まれた、まだ葉が開いていない芯芽（枝の先端

部の葉のつぼみ)

部分のことを見せて貰った。表面には細かい小さなうぶ毛があり、加工後にも

この状態を残しているものを「ティップ」とい、その中でも発酵課程で発生した

紅茶液に染まって金色に見えるものを「ゴールデンティップ」と呼んでいて（ウンチクが続くので省略）

25 人生で一番驚いたことは？

そうだな。やはりスピードと初めて会った時。若くて驚いた。

26 人生で一番楽しかったこと

スピードの城のパーティーに行つたときか。

スピードが仕入れた美味な紅茶が一杯あつて心が躍ったな。

27 人生で一番怖かったこと

父親と手合させしたことか。本気でかかってくるから思わず退きそうになつた。

28 人生で一番辛かつたこと

両親や妹が他国の兵士によつて殺されたとき。どうしていいかわからなくて放心状態だ。

思えばアリスがいたから何とかなつたんだよな。

29 外向的？内向的？

外向的か？

30 道に1000万（日本円で）が落ちました。どうします？
どうすると言われても・・・無視。

31 ジャあ、1000万円もうこました。どう使つ?
国に寄付。

32 子犬が捨てられていた……泣き声で鳴いています。どう
でる?
捨つて育ててやるさ。

33 突然頼みごとをされました! あなたなりどうする?
引き受けます。自分に出来る範囲なり。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよーどうしよう!?
相手が折れるのを待つ。自分が悪いなら、頭を冷やしてから謝る。

35 嘘はつけるタイプ?
どうだか。つけないかもな。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない?
解る奴には解るだろう。

37 何か癖ある?

帽子を被り直すこと。適度に被り直さないと夏場は蒸れて、時期ハ
ゲる・・・

38 誰かに何か言いたいことたまつてない?
無いな。

39 あるつて答えたそこのあなた! ジャあ!この穴に向かって
思つ存分叫んでください!!--!
言いたいことは愚痴るタイプだからあまり叫ぶもんじゃない。

40 ……酸素マスクいる?
いらん。

41 あなたにとって一番大事なものは?
己の志だ。

42 自分といつたらコレ! みたいなある?
帽子。実は帽子は紅茶同様、家に結構コレクションしてある。

43 崇拝してる人とかいる?

父親だ。俺の父は黄昏の国の武官として働いていたんだ。

44 どうしよう! 財布を掏られた!!

迷惑をかけるわけにはいかないから自分でなんとかする。

45 コレだけは誰にも負けないものってある?
うぬぼれは自分の身を滅ぼす。だからあまり自分でそういうことは思っていない。

46 こいつには敵わないとていう人いる?
今は亡き父だ。

47 全部答えてきたね?じゃあこのノリで普段なら言えない「よう
な秘密トークをお願いします!!!」

秘密つてものじやないが俺は紅茶と帽子が好きで、ウンチクを語ら
せたら止まらない。

例えば、世界三大銘茶は「ダージリン」、「ウヴァ」、「キーマン」
という紅茶。

伝統的な紅茶の入れ方を「ゴールデンルール」とい、それには5
つの基本原則がある。

1・良質の茶葉を使うこと。

2・茶葉を入れる前に必ず温めておく。

3・茶葉の量は正確に。

4・汲みたて、沸かしたての沸騰したお湯を使へ。

5・しつかり蒸らす。

他にも、紅茶の原料茶葉の売りさばきのために、定期的に開かれる公開せり市「ティー・オークション」というものが（以後省略）。

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ？

主婦？

49 ジジちゃんとばかりに生みの親になんでも言ひやえ!
うーん・・・まあ、頑張れ。

50 ジジまで読んでくれた方に何か。
ここまで読むなんてそりとう頑張ったな。
純粋に、ありがと。

オリキャラに50の質問

「Water Future」<http://waterfut ure.finito-web.com/orichara50.html>

（茨の牢獄と断罪の場）

狂つてゐる。

心の底からアリスはそう感じていた。

寒さをこらえるようにうずくまりながら。

「ドレス……汚れちゃう……・・・・・ キングがせっかく用意してくれたのに」

ここ、アリスが今いる場所は『茨の牢獄』と呼ばれる城の地下にある牢屋だ。

普通、罪人は城から少し離れたところにある『断罪の塔』へと連れて行かれる。

この茨の牢獄は昔使われていた・・・つまり、今は使われていない断罪の場。

茨の牢獄の存在は、王族と上層部にしか知られていない。そこに、アリスはいる。

身を少し動かすだけで、ジャラと鎖が音をたてた。アリスの手には鎖、足には足枷あしがせがはめられている。

いま、アリスをこうさせたのは他の誰でもない、クイーンだ。

あの時、クイーンと対談した時、アリスはクイーンの狂氣を身を持つて知つた。
アリス自分に対する憎悪も、結婚者キングに対する愛情も、全て。

『お前さえいなければ・・・お前さえ・・・アリスさえ・・・・・・』

クイーンの声が心の中でこだまする。
アリスを心から憎んでいる、あの言葉。

「私つて・・・男運も女運も無いのねー・・・」

思わず乾いた笑いを漏らした。

変人には好かれ、女の子からは嫌われる。

「どうして、なの・・・私は、普通にしてるだけなのに」

アリスの言葉はひんやりとしたレンガの壁に吸い込まれた。

アリスにとつての「普通」が変なのだろうか。
女の子の友達が欲しいとアリスは望むだけだ。
しかし、それも叶わない。母譲りの美貌を持つ、から。
女性はひがむ。仕方の無いこと。それは良くわかっている。わかつてはいるのだが・・・

これから先、女の友達ができるのなら、アリスは自分自身の顔を傷つける覚悟だつてある。

全て全て不毛なのだ。男達はアリスが好き。でもアリスは恋愛よりも友情を求めている。
けれど、その“友達”になれる女の子達はアリスを嫌う。

「ハア・・・」

じんわりと涙がにじむ。アリスはそれをこぼれさせないよつて上を向いた。

きつときつと、一度涙を流したら、泣くのを止められなくなる。

泣きたい。けれど、泣こうとしない。泣いてはならない。アリスは、武官なのだ。自分から、武官になつたのだ。完璧な母と父であるには、涙を見せてはいけないのだと。どうしても、必死に足搔いても、^{あらが}抗えないこと。自分が決めたことだから。アリスは自ら、女で生きることを止め、戦場で生きることを決めた。

唐突に、シャランという音がアリスの耳に入った。どこかで聞いたことのある、音。段々とその音は近付いてきた。

「やはり、此処にいられたか」

「……」

その人物は、錫状からシャンシャンと音をたて、アリスを鉄格子ごしに見た。

35・茨の牢獄と断罪の場 前編（後書き）

今回は短めでしたが、後編は長くなると思います。

さて、アリスの元に来た人物とは誰でしょう？
錫状といえば・・・あの人しかいませんよね？

（茨の牢獄と断罪の場）

「あなたは・・・・確かにビショップ・・・・？」

「ああ。王の補佐、ビショップで合ひてゐる」

ビショップはアリスに附けられた鎖と足枷を見て、痛々しそうな表情をした。

何も自分がされている訳でもないといつた。
やがてビショップはその場にしゃがみこみ、アリスと目線を合わせる。

「アリス嬢。此處から逃げ出したいと思われるか？」

「えつ？」

アリスは自分の耳を疑つた。

反響の国側、つまりクイーン側の人間なのに、何故アリスにこんなことを訊くのか、と。

「で、どうなのだ？」

「それは・・・・逃げたい・・・・けれど」

不審に思いつつも答えると、ビショップは「そうであるくな」とだけ呟き、
自身の懐を弄つた。
（まるく）

「あの、何を？」

「心配はせずとも良い。拙僧は今はアリス嬢の味方、と言つた所であるからな」

ビショップは何を企んでいるのだ？

今「は」味方どころか胡散臭さがある。

「わづやの言葉……今は？」となの？

「拙僧は本来、反響の國の補佐官。しかしながらクイーンのやり方に賛同しかねる」

その返答に、アリスは心がぞわついでいくのが良く判つた。
苛立ちともこえる感情が心を巢食つ。キッと鉄格子ごくびショップを睨む。

心が苛つぐ。自分がこんな田にあつていては反響の國のせいだ。

「だったら……だつたらひつして私をこの國に連れてきたのよ！……」

八つ当たりといふとは分かる。けれど口が止まらない。言葉が止まらない。

アリスの目の前の世界が滲む。涙がまた溢れてきたのだ。
ボタリ、と涙の雫がアリスのドレスに落ちた。

「じつひ・・・よお・・・」

堰^{せき}を切つたかのように涙が止まらない。

やつぱり、一度泣いてしまうと涙腺が緩み続けるものだ。

アリスは幼馴染ハンドペイにも誰にも見せたことのない涙を、敵国のビショップに見せた。

ビショップはとこつと何も言わずじいとアリスを見る。だがやがて、鉄格子の隙間から手を伸ばし、アリスの頭を撫でた。アリスはビクリと一瞬体を震わせ、顔をビショップに向ける。

「……拙僧、は」

ボソリと囁くように小さな声で、ビショップは言葉を続けた。

「拙僧は王の補佐だ。連れてきて欲しい、そう申したのはキングだけれど此処にアリス嬢を閉じ込めたのはクイーン。だからこそ今は、アリス嬢を救う」

確かに「王」の補佐のビショップは、「女皇」の命令を聞く義務はない。

だからこそ、アリスを助けようとしている。

ビショップの撫てる手は、とても温かく、優しかった。

余計に涙が止まらなくなる。

「今くらいしか泣くときが無かるづ?故に、泣きたいだけ泣くが良い。拙僧は何も言ひはしない。」

泣き止んだら、もうアリス嬢は『黄昏の国のアリス』に成つているのであらうしな」

アリスはただ、泣き続けた。涙を止める術なんて、もう分からなかつた。

ようやくアリスは泣き止んだ。

どのくらい泣き続けたのだろう。目も腫れているかも知れない。

そうアリスが考えていると、ガチャリがして牢が開いた。

ビショップが懐にしのばせていた牢の鍵で開いたのだ。

「アリス嬢。動かないで呪れ願う」

ビショップに言われた通り大人しくしていると、今度は一枚の紙を取り出した。

その紙にはすでに何か文字が書かれている。しかし達筆で何と書かれているのか

よく分からぬ。これが式の発動に不可欠な式紙しきがみだということは言うまでもない。

アリスが不思議に思つていると、ビショップはその呪字が書かれた式紙の一枚をアリスの手の鎖に、もう一枚はアリスの足枷の所に置く。

「オン バザラ アラタンノウ オン タラク ソワカ。
彼の者に放恣ほうしを与えるよ」

そう唱えると、式紙、否、紙に書かれた呪字が反応するかのように光を放つ。

そして、

パキン

と音を立て、鎖と足枷に亀裂が入り、割れた。

「嘘・・・」

アリスは信じられないと言つたのよつて、足を見、手首を見る。鎖と足枷が、自身の手足から外れた。拘束していたあの忌まわしき玩具が。

一方、ビショップは鎖で赤くなつたアリスの手をとり、また、別の紙を取り出し呪いを唱えた。

「オン ロロロロ センダリ マトウギ ソワカ。
この者に安らぎを」

先ほどとは違い、まるで虫のよつた、淡く優しげな光に包まれる。刹那、アリスの手足の赤みは引いていた。未だ、アリスは手足を凝視していたが、やがて顔を上げ、

「ありがとう」

と微笑んだ。

ビショップやたらと出張つてますね。

ちなみに今回の式術の呪いは、

真言（マントラ）とよばれる言葉をお借りしました。

真言とは

密教で、仏・菩薩などの真実の言葉、また、その働きを表す秘密の言葉をいう。

〔Yahoo! 辞書参考〕

「オン バザラ アラタンノウ オン タラク ソワカ」は虚空藏菩薩といつ空を管理する菩薩の真言です。

この真言を毎日100万回、100日間唱え続けければ飛躍的に記憶力が増大するとされます。

「オン ロロロロ センダリ マトウギ ソワカ」は薬師如来といつその名の通り

医薬を司る仏で、医王といつ別名もあり、衆生の病氣を治し、安樂を与える仏の真言です。

興味のある方はまた調べてみてください。

アリストいう洋風な話にこんな渋い宗教知識、失礼しました。

37・赤い夢と止まりぬ歯車

「赤い夢と止まりぬ歯車」

「アリス嬢……ドレスは田立つ上に動きにくかるつ。他の服に着替えた方が良い」

確かにドレスはかさばるので動きづらい。

動きやすく、その格好で歩いていても不審がられない服、メイド服を着ることにした。

「着られたか？」

「ええ、まあ」

侍女の服に着替え、ビショップに着ていく。するとその途中、

「ビショップ待て。どこへ行くつもりだ？」

と、声をかけられた。ビショップは軽く舌打ちしてその人物に向き直る。

「ナイトか……何処へ行こうとも勝手であるひつへ」

ナイトは訝しげにビショップを見て、メイドに扮したアリスを見た。アリスは一瞬ひやつとしたが、田には縁のカラーコンタクトをしているし、髪は一つにおだんじにまとめている。簡単なメイクだって施してい

る。

我ながら上手く化けたとアリスは思つたほどだ。きつとばれてはない。

「その娘は？」

ナイトはビショップに對してこつ聞いた。

その娘・・・つまりメイド姿のアリスのことを見つけていたのだ。

「メイドであるが」

「それくらい見りや分かる。そりじゃなくて、そのメイドはお前の専属メイドなのか？」

「如何にも。今自室の戻るので付いて来て貰つてはいるだけだ」

「へえ」とナイトは好奇の目でアリスを見る。その視線は先ほどと違い、疑うようなものの類ではなくただ単にメイドに対する純粹な好奇心だった。やがてアリスから視線を外し

「しかし自室には戻れないぞ、ビショップ。キングから呼び出しだ」

いつまた。刹那、ビショップの眉がピクリと動く。ビショップは息をはきつつアリスを見る。

結局アリスはビショップの自室に、ビショップはキングの部屋に行くことになってしまった。

別行動は遠慮したかったが致し方ない。ビショップが戻つてくるまでアリスは部屋で待機状態だ。

一方ビショップは「どうとキングの部屋前にいた。ノックをして中に入る。

すると・・・

「ビショップ。良くなれてくれたな」

キングは、キングが好んで着る狩時の服を纏っていた。
細やかな刺繡がされたこの服は動きやすく、加えて威厳ある皇族らしさを漂わせている。

「キング、呼び出した理由とは一体・・・?」

ビショップは何故、キングが今日狩をする訳でも無いのにその服を着ているのか疑問に思いつつも本題を尋ねた。
キングは窓の外を見ながら、ビショップ、ナイト、そしてルークに言う。

「大切なものを取り戻すには、大切なものの大切なモノを壊さなければならぬいか」

言つ、というより独り言のように呟かれた言葉。

キングは何を思って、何を想い、こうひとりごちたのか。言わずとも分かる。

アリスだ。

アリスが前のように忽然と姿を消したとき、キングは何もしなかつた。

何もしようとはせず、ただ自室に籠つて死人のように、眠つた。

それも1日だけであったが、その日を誰とも合わせようとはしなくなっていた。

「もう、奴等は来る。姉上も、動く。三人とも、覚悟しておいた方がいい」

ビショップは王の補佐。キングの言つてることもいつもなら誰よりも理解するが、この時ばかりはキングが何を言いたいか明瞭に分かりはしなかった。ただ、自分の姉クイーンのしていることを知っているかも知れないという香りを匂わせただけ。

キング、ヒビショップは呼びかけようとした、が、次の瞬間。

ドゴォンと低い地響きがした。

ルークもナイトもビショップも驚きに駆られ、地響きの原因を探そうと窓の外を見た。

だが答えを見つけ出すより先にキングは口を開く。

「悪夢のお茶会、か。・・・赤く濡れたコメを見るのは誰だらつな」

そうしてキングの目線を辿ると、いるはずのないナイトメア、クローバー、ダイヤが庭に立っていた。

兵士に囲まれている。それはキングが動かす兵士でなく、クイーンの兵士だった。

歯車が、止まらないことを知らないように、より強く速く加速しだした。

ねね子6 ハート女王に50の質問

「おまけ・ハート女王に50の質問」

01 お名前をどうぞ…！
ハートって書いつぱすよ。

02 性別は？
もちろん女しかないじゃない？

03 誕生日！
あつい夏に生まれたの。歳は16歳よ。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）
そうね、左頬に紅色のハートマークの刺青がしてあって、美少女だ
つて自信を持つて言えるわ。

05 動物に例えると？

愛らしいハムスターよ！ねえアリス、そうでしょ？
アリ「そうね。小さいところとか合つてるかも」

06 特技は？

マイクとか、あと刺繡！服を作ったりするの上手いわよ。

07 ご趣味は？

宝石、アクセサリー、ドレスを集めることね。

08 将来の夢など

ハンパーティー・・とけけけ結婚することよ……言わせないでよね！

09 好きな言葉とかある？
んー、才色兼備ね。

10 好きな動物は？
ハムスターよ！ねずみは大嫌いだけど。

11 好きな色

ピンク。だつて女の子っぽいでしょ。

12 好きな料理

庶民臭いって思うかも知れないけど、ロコモコよ。
ロコモコっていうのは白い飯の上にハンバーグと玉焼きを乗せて、
グレイビーソースっていう
ソースをかけたものよ。美味しいわ。あたしが進めるんだもの、食
べて見なさい！損は無いから。

13 好きな異性のタイプ

優しい人。二重人格でも、ハンパーティーが・・・その、す、好きだ
わ。

14 好きな同性のタイプ

大人っぽい包容力のある年上の女性ね。我慢言つても許してくれそ
うな人。

15 座右の銘は？

「能ある鷹は爪を隠す」あたしにピッタリな言葉よ！

16 眠なときなにしてる？

刺繡？メイク？小さなファッショントリートを開いたり？

17 旅行とか好き？

好き！大好きだわ！

18 癒されることって何？

ハンパーティーが笑ってくれたとき・・・本人に言っちゃ駄目よ！

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

ここはハンパーティーって答えたいけど、やっぱり兄様かなあ。

20 ぶつちやけその人は恋人です！？

ううん。兄妹よ。・・・失敗したわ、さっきの答えハンパーティー
つて答えとけば良かつた。

21 コンプレックスとかあつたりなんかしちゃつたりする？
胸がないとこ・・・16歳といえども色気がほしい・・・

22 それを解消するために何か努力はしてる？

なるべく露出的な服を着てるけど効果はないみたいねー・・・

23 ジャあ逆に自慢できることは？
美少女！アリスとは違ったタイプの美人よ、あたしは。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

ハンパーティーに頭を撫でてもらったことかな。すげくドキドキした
わ。

25 人生で一番驚いたことは？

ハンパーティーがダンパーティーっていう人格もあるってことよ。

26 人生で一番楽しかったこと
メイクする」との楽しさを知った瞬間ね。あれはあたしの人生を変えたもの。

27 人生で一番怖かつたこと
父様や母様が死んじゃつたこと。怖くて、怖くてたまらなかつたわ。
だつて兄様まで死んじゃうのかつて思ったもん。

28 人生で一番辛かつたこと
アリスに婚約者をとられたこと。つて言つても今考えてみると、あ
たしハンプティーが
好きだから逆に感謝してるのよね。

29 外向的？内向的？
外向的！

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
お金なんて有り余つてるわ、いらない。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
いらない。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
である？
兄様に頼んでみるわね。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
女王に頼みごとなんて良い身分じゃない。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよー。ビンゴ！？
場合にもよるけど、基本的には相手が悪いわー。

35 嘘はつけるタイプ?
ついたことないからわかんない。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない?
うーん、ついたことないからって言つてるでしょう？

37 何か癖ある?
髪を払うとこうかしらね。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない?
あるわ。

39 あるつて答えたそこのあなた！ じゃあここの大穴に向かって
思う存分叫んでください！！！
言える訳ないじゃない！ ハンブティーに聞かれてたりどつするの
よ！

40 ……酸素マスクいる?
いらないわ。

41 あなたにとつて一番大事なものは?
あたしの母様から受け継いだハートのステッキね。

42 自分といったらコレ！ みたいのある?
ハートマーク？

43 崇拝してる人とかいる?

いないけれど、あえていつなら母様。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！

財布は持たない主義なのよ。

45 コレだけは誰にも負けないものつてある？

刺繡の腕。アリスにも負けないわ。今も丁度ドレス製作中の。誰のドレスかは秘密よ？あたしのじゃないけど、楽しみにして！

46 こいつには敵わないと云う人いる？

ハンプティーとダンプティーね。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えない「どうな秘密トークをお願いします！」

う、そうね。実は結構経験者ぶつてるけれど・・・恋に関してはウブなのよ・・・！

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場つてどうよ？

我儘嫌味な女王って感じ・・・もう一でもこれからはその立場は変わるわよ？

49 こじわじばかりに生みの親になんでも言ひちゃえ！

ハンプティーとあたしどうなるの？あたしとハンプティーの馴れ初めでも書いてよ。

50 ここまで読んでくれた方に何か。

『苦労様ー。これからも黄昏の国のアリス（特にあたし）の応援よろしくね！

Water Future] <http://waterfut ure.futurenow.orgchara50.html>

38・隠れた力と悪夢の原因

（隠れた力と悪夢の原因）

彼らは**おんびん**に穩便に物事を済ませようと思っていた。だから城の外壁の所で待ち、城に入る許可がおりるのを待っていたのだが・・・何を血迷つたか、城の兵士たちがナイトメアたちを襲つた。

焦点のあつていない瞳。誰かに、操られている。そう直感した。無駄な争いを避けるため、逃げようとはするが、町に逃げては町の民に被害が及ぶ。

「ちつ！仕方ない、城内へ逃げるぞ！」

城の中ならば皇帝であるキングたちが兵士を止めてくれるだらう。自分の兵士をキングが操るはずは無いからだ。

「でも帽子屋！城の門は開いてないよ！」

ハンプティーが槍で兵士の攻撃を受け止めながら訴える。確かに門は開いていない。ならば・・・強行突破しかない。

帽子屋は大剣、時計兎は鞭、ハンプティーは槍、チエシャ猫はナイフ、クローバーは刀。

・・・この頑丈そうな外壁を壊すことができるのは・・・

「俺しかあらへんやろ」

ダイヤはガントレットで覆われた手で握りこぶしをつくり、力一杯に外壁を殴った。

一瞬の出来事。ピシイッと音をたて、外壁にヒビが入る。思つた以上に壁が崩れ、地響きをおこした。

「ダイヤ・・・お主・・・」

「・・・やりすぎだねエ」

「ですね・・・」

普段は仲の悪いチエシャ猫と時計鬼さえも同意するほどの呆れ。ダイヤはといふと何か憑き物でも落ちたかのような良い笑顔でナイトメアとクローバーに振り返る。

「いやあ、勘弁。溜まつとつたもん。まあこの壁は事が終わつたら黄昏の国費で直せばいいやろ」

ひゅつと振り下ろされた兵士の剣を、ダイヤは軽く避け、崩れた外壁の瓦礫がれきの山に上つた。

帽子屋たちもダイヤに続いて城の敷地内に入る。スペードとアリスを見つけ出すために。

アリスは困惑していた。

突然の地響きと部屋の外から聞こえる怒号。どうしたら良いのかすらも分からぬ。

「アリス嬢！」

突如、ビショップが派手な音をたてて部屋に入ってきた。

アリスは天の助けとばかりにビショップを見るが、ビショップはアリスの手首を掴んで走った。

「え、ちょっと・・・ビショップ、どうしたの？何があったの？」

驚きながらビショップに問い合わせる。ビショップは未だ走りつつもアリスの問いに答えた。

「少し厄介なことになつたのでな。黄昏の国の数人の武官がこの城に来たのだが・・・
クイーンがその者たちを追い返そうとしておられる。この騒ぎに便乗し、アリス嬢を逃がす」

アリスは目を見開いた。黄昏の国から、武官が来たなどと、予想もしていなかつた。

第一、わざわざビショップに逃がしてもうつ必要だつて無くなる。

「それなら、私がその人たちと合流した方が良いんじゃ・・・」

「馬鹿を言ひなさるな。こんな騒ぎを起こした者をキングが逃がすわけ無かるうが。

アリス嬢を連れているならば尚更な。それに・・・」

不意にビショップは言葉を途切れさせた。

握っていたアリスの手を放して。それだけでアリスは悟つた。

その者たちと合流してしまうとより明瞭にビショップが手引きしているとバレやすくなる。

前を歩くビショップの背せ、エリが苦しそうな、悲しそうな、虚無感が漂っていた。

38・隠れた力と悪夢の原因（後書き）

ガントレットとは手甲てうじやのことです。手甲とは手の甲や手首などを覆い、保護するためのものです。さすがに素手で壁を殴つては痛い（どころじやない）のでガントレットをつけさせてみました。

39・武士の白刃と僧侶の錫杖 前編

「武士の白刃と僧侶の錫杖」

「ビショップ「アリス嬢!!」

突然にビショップが振り向いたので、アリスは驚く。ビショップはアリスを引き寄せ、それから伏せた。

アリスも強制的につられて伏せる。状況判断ができるていないアリスの目の端に映つた物は、

白刃しりやくとヘリオドール石せきのような黄緑色の目、若葉を思わせる新緑色の髪。

「やれやれ、手荒い挨拶であるな」

ビショップはゆっくりと立ち上がり、伏せた弾みで廊下へと投げ出された錫杖を拾つた。

相手方は真っ直ぐにビショップを見つめている。

「久方ひさかたぶりとうべきか、ビショップ」

アリスも立ち上ると、その男 クローバーを見る。

クローバーもアリスに視線をめぐらせ、アリスと目が合つ。

だが、アリスは思った。おそらく、クローバーは自分がアリスだと

は気付いていない。

何故なら、メイドに変装しているのだ。気付いたら、相当な洞察力だろう。

「今、貴様そここの侍女をアリス嬢と呼んだらう。といふことはその

者はアリスか

「・・・わうよ」

アリスがそう頷くと、クローバーも納得したような表情を見せた。

「どうりで、雰囲気が似ていて……その格好も似合っている

「口説くのはその辺にしてもおうか。何の用だ？ クローバー」

ビショップが腕組みしながらクローバーに言葉を投げかける。
クローバーは「なつ・・・」と声をだし、うつすらと赤みを帯びた
顔でビショップを睨む。

「くつ口説いてなど！ 貴様じやあるまいし、この禿げ偽僧・・・！」

「禿げではない、坊主だ！ 僧侶は皆禿げているものだ。そんなこと
も知らぬとは」

「貴様は僧侶でなく偽僧だう一人の姉上に手をだしておいて良くな
その様なことが言えたものだな！」

「これだから姉好きは・・・未だ姉離れできておりぬのか？ 悲しい
ことよ」

「な「あーーもう一言い争いは良いから、話進めるわよ…」

このまま延々と続きそうで、どこまでも幼稚な言い争いになつてい
く口論にアリスは終止符をつつ。

クローバーもビショップもお互に昔からの知り合いなので、話し

ているとどうやら素に戻るようだ。

2人は自分たちの言い争いを恥じたのか、一度静かに深呼吸した。そして心を落ち着かせたらしいクローバーはやがて口を開く。

「鬼に角も、アリスが無事で何よりだ」

「アリス嬢を守ったのは拙僧であるのだがな」

ビショップとクローバーは顔を見合わせてから、アリスを見た。

「アリス、ここから去れ」

「そういうことだな。下に降り、庭から外へ出ると良い。

他のメイドや執事たちも避難しているものがいるから怪しまれることは無かる」

2人の顔つきが違つていて、アリスは気付く。先程のような表情でなく、戦う時の真剣な顔つき。

アリスは少しだけ戸惑いながらじり・・・とゆっくり後退あとずさる。

ビショップは左手に握っていた錫杖を一音鳴らした。

今まで聞いたことのあるような静かで澄んだ音じゃなく、力強く大きな音。

空気が、震えた。

ビリビリとアリスの肌にわずかな振動が伝わる。

クローバーは窓から差し込む光が反射した白刃はくじんを構え、

ビショップは光を受けた金に輝く錫杖を左手に純白の式紙を右手に構えた。

「アリス、行かれよ」

アリスは駆け出す。だが途中、そつと後ろを振り返った。
戦が、始まる。

「武士の白刃と僧侶の錫杖」

その空間には、音が無かった。

人の声や騒がしい足音はするはずだ。しかし騒がしいはずなのに、そこだけは音が無い。

「静かだな・・・」

クローバーは呟いた。自身の声しかない、その場所で。

「当たり前、と言つたところか。しゃおんけつかい遮音結界の式をさせてもらつた。お前は騒がしいのは嫌いであろう?心遣い、感謝してほしいものだ」

そう言つたビショップに対し、クローバーはフツと笑つた。そして次の瞬間、白刃が光る。その切つ先はビショップへ。だが・・・

「甘い」

ビショップの錫状によつて、受け止められていた。否、受け止めるというより受け流す。

クローバーが打ち込めば打ち込むだけ、ビショップによつて受け流され、衝撃が和らげられる。

「黒羽」
くろはね

懐かしい名で呼ばれ、クローバーは顔をしかめた。

「何だ・・・毘沙門」

クローバーは毘沙門と呼ぶのをためらつよう之間を空ける。

その名はクローバーとビショップの本名だ。誇称の国に2人がいたときの、本名。

クローバーは黒羽。ビショップは毘沙門。クローバーとビショップとは、海を渡り、他国に来たときについた字。

「腕を上げたようではあるが、まだ発展途上・・・覚えているか？
誇称の国にいたとき、お前は一度だって拙僧には勝てなかつた」

それがどうした、と言わんばかりにクローバーは打ち込む速さを変える。
もつともつと速く、一縷の隙も無くす。

「ほう」と、ビショップは感嘆し、クローバーが有利になつたと思われた、が。

「ぐつ・・・・・」

ビショップは容赦無く、クローバーの腹に錫状を叩き込む。クローバーは刀だけは決して手放さず、壁に叩きつけられた。

「確かに凄い。しかしながら、お前は拙僧に勝てん」

「な、んだと？」

クローバーは腹を押さえ、苦しそうに呟きながら立ち上がった。ビショップは見下すかの如く、言い放つ。

「黒羽、師匠が言つていたであろう。お前は剛。拙僧は柔。これが何を意味するか、分からぬか？」

「…………」

クローバーは何も言わない。無表情に、口を開こうとはしない。

「剛は柔より劣つてゐると。例えば、岩と粘土。
高き場所から岩を落とせば、岩は砕け散る。対照に粘土は落としても砕けることは決して無い」

淡々とそつと告げる。クローバーが勝つことは無いと思われた。しかし、やがてクローバーは口元に笑みを浮かべる。

「何を笑つておられる?」

「そんなもの、決まつてゐる。確かに柔は剛に対して負けることは無からう。

「だがな、粘土では相手に傷をつけることは不可だ。柔は、剛に勝つことはできぬ」

口角をあげて、クローバーはビショップを見る。

毘沙門は腕組みをして、黒羽を見返した。

40・武士の白刃と僧侶の錫杖 後編（後書き）

今回見事にアリス登場してませんね。“ごめんなさい。ちなみについに40話突破しました！－早いものです。また機会があれば小話書かせていただきます。

「メイドの口調とアリスの確答」

逃げながら、アリスは考えていた。

本当に、それでいいの？

自分だけ、自分1人だけが逃げていいのか。

何故ならこの騒ぎを起こす原因になつたのは自分。なのに、当事者が逃げるだなんて卑怯だ。

それに今アリスが逃げたとしてもまたキングは同じ事をするかもれない。

そうなつたら同じことの繰り返し。終わり無きループ。まるでメビウスの輪みたいだ。

アリスは考えをまとめると、足を止めた。そして逆方向へ走り出す。逃げさせてくれたビショップとクローバーには悪いけれど、ここでの決着をつけておかないといけない。

反響の国も、黄昏の国も、そして自分たちも。

とりあえず、アリスは自分専用の部屋と言っていた場所に行くことにした。

何ができるかなんて分からない。部屋に行つて、何をするかも分からぬ。

ただ、最初この国に来たとき初めて居た場所が、また何かの始まりである気がしてならなかつたのだ。

人々の流れに逆らい、走る。しかしその途中。

「アリス！！」

誰かにそう呼び止められた。そろりとアリスは声の方へ振り返る。するとそこにいたのはメイドのリデルだった。リデルはつかつかと歩みより、アリスに詰め寄る。

「アリス！何してるの！？早く避難しないと！」

「え、あの、え？リ、リデル・・・その・・・敬語はどうしたの？」

アリスは何よりリデルの喋り方に驚いていた。前までならきっと『アリスさま！何しているのですか！？早く避難してください！』と言つただろうのに。なぜ、今は違うのか。

「そんなことはどうでもいいわ。あれはいわゆる猫かぶり状態なだけ。それで？何故避難しないの？」

「何故つて・・・」

アリスは静かに目を瞑^{むす}る。
何故残りたいのか。改めて他人からぶつけられた疑問^{ひと}。

助けられてからほんの一ヶ月しか時は経っていない。しかし、色々なことがあった。
そんな中で何度も迷い、何度もどしどしつかずに思つた。けれど、もう。

「もづ、迷いは無いわ

すっと目を開き、リデルの瞳をしっかりと見つめる。
真剣に、意思のある目で。アリスの心には、もう露^{モヤ}は無かつた。
澄んだ、強い意志のある、瞳。

「全て、私が起こしたことよ。決着を着けるべきだから、私は、逃げるわけにはいかないわ」

それを聞くと、リデルは優しげに微笑んだ。

(あれ?)

アリスは首を傾げる。リデルの微笑した顔が、誰かに似ていた。リデルの顔、ではなく、どこかで見たことのある表情。

「そう言ってくれて良かったわ。アリス、着いてきて。アリスの部屋へ行きましょう。

私、あなたに言わないといけないことがあるの。誰にも聞かれたくないし」

アリスは先ほどのリデルの顔に疑問を覚えつつも大人しくリデルについて行つた。

「あの、どうして敬語止めたの?」

何となくアリスは聞いてみた。するとリデルは「あー・・・」と言葉を紡ぐ。

「切羽詰つた状態だつたから。本当は最後まであの喋り方を貫こうと思つたのだけれど・・・」

「最後・・・？最後って、何？」

アリスは少し、不安に駆られた。
リデルの言った最後。それは何を意味する?
この騒ぎが終わる時がくるまで、といつ意味だらうか。
リデルはといふと否定するかのように頭を振る。

「何でもないわ。それより、ほらはや・・・・!？」

不意に、リデルは言葉を途切れさせた。
アリスは頭にクエスチョンマークを浮かべるが、すぐにその理由が
分かつた。
殺氣。それも禍禍まがまがしいほどの。

「避けて!!」

アリスは直感的に、そう叫んでいた。

4.1 メイドの口調とマリスの確答（後書き）

どうでもいいですが、最近は修正週間です。

最初のこの話が物凄く見るも恥ずかしいほど
の書き方で、おまけに誤字脱字、余計な空白などが
多いにありましたので修正しています。

話 자체は変わっていないので安心してください。

ちなみにキャラクター（一部除く）の年齢も少し上がりました。
あとがき登場人物紹介に修正年齢が書きかえられています。

42・赤い戦慄と窮地の助け

（赤い戦慄と窮地の助け）

リデルは転がりつつも何とか刃物をかわし、すぐに立ち上がる。状況を判断しようと視線を辺りにめぐらせた。すると、そこには剣をかまえた兵士がいた。

「なつ・・・どうして・・・」

何故たかだかメイドに襲いかかるのか。アリスもリデルも驚きに駆られていた。

「・・・・・」

兵士は無言で、2人に向かい剣を振り下ろした。

「つーーー！」

危ない。けれど兵士はたった1人。これくらいなら振り切れる。

「アリス！走つてーーー！」

リデルは後ろに、アリスのいる方へ叫ぶ。だが、返事は無い。リデルは不思議に思い、そつと後ろへ振り返った。

「アリスつーーー？」

激しい糾弾。^{きゅうだん}刃が風を切る音。戦慄^{せんりつ}が、はしる。

何とか、アリスは剣を避けていた。でも、駄目だ。

前の兵士の剣は避けたがアリスの後ろ。剣をかまえた兵士がきた。アリスは目の前の兵士にいっぱいで、それに気付いていない。たとえ気付いたとしても、今からでは避けれない。マズい。リデルは本能的に、そう感じていた。

「アリスっ！……危ない！！！」

「え？」

肉を切るような音が、やけに生々しくリアルに聞こえた。

赤い。目の前^{アリス}が、リデルの目の前が赤く染まる。自分が。自分が、紅い。アリス^{アリス}＝リデルから、血が流れる。剣が、確実に、リデルの胸を貫いた。アリスを庇^{かば}つて。口からも血があふれ出す。

赤、紅、朱、あか、朱、赤、あか、紅。あかい、わたし。

アリスは目を見開き、リデルを見た。

「リデル・・・？リデルっ！…」

ガシャガシャと金属のぶつかり合^う音がした。

それは兵士の鎧の音。兵士が集つてきているのが、言わずとも解かる。

どんなに解かりたくないとも、どんなに信じたくないとも、それが事実である限り、真実だ。

「あつ・・・」

目の前の兵士が、剣を振り下ろした。

アリスは血まみれのリデルを抱きしめ、目を瞑^{つぶ}った。歯を食いしばつて。

このまま、2人とも、死を迎えてしまつのか。
死ぬのは嫌だ。まだ、何もしていないのに。アリスがそう思つたときのことだ。

突如、アリスの近くで鈍い音がした。アリスは困惑しつつ口をゆつくりと開ける。

そこにいたのはこぶしを握りしめたダイヤ。

アリスに切りかからうとしていた兵士は、ダイヤによつて吹つ飛ばされていた。

フウと息をつき、ダイヤがアリスに振り向く。

「まつたく・・・女の口に手をあげるなんて、どんな教育されどんねん。

アリスちゃん、大丈夫やつた? そつちの子は・・・どつからどつ見ても平氣^{ひが}そうやない・・・な

ダイヤはリデルを見て顔を歪^{ゆが}めた。

「アリス!」

その声に反応し、アリスは声がした方を見る。

それは、アリスが思つたとおりの人物・・・ハンパーティーだった。

「ザンネンだけどお、感動の再会つてワケにはいかないみたいだね

エ

「チエシャ猫！無事、だったの・・・」

チエシャ猫はそのアリスの安心したような様子にペロリと舌をだし、指と指の間に小刀を2、3本がまえた。

兵士を殴り飛ばしながら、ダイヤはアリスの目をじっかり見る。それから

「早く、そのメイドちゃん、手当をしたら！」
には俺なりに任して

「やつだアリス！早く行つて！僕らを信じてくれ」

「後で十分にハグしてくれてかまわないからねえ」

そう、ぞろぞろと沸いでた兵士と応戦しながら3人が言つ。アリスはためらいがちに、リデルを背負う。

「みんな・・・ありがと。また後でー」

その言葉に、ひつそりと生きて余おつてこつ言葉をしのばせ、アリスは目的地の部屋へ向かつた。

リデルが、アリスの背でうつすらと田を開け、視線を強くしたこと

を知ることは無く。

43・消えた記憶と曇天の空

「消えた記憶と曇天の空」

アリスは部屋につくと、リデルをベッドの上に寝かせようとした。しかし、突然、リデルがアリスの腕を掴む。

「なつ・・・」

強く引っ張られ、アリスはバランスを崩す。すると、リデルの顔が目前まで迫った。

「リ、デル？」

何が、起こったのか。あんなに流れていたリデルの血が止まっている。

というよりむしろ、拭き取られたかのように血と傷が綺麗さっぱり消えていた。

「な、にが・・起つて・・・？」

「アリス」

リデルはアリスの名を呼び、まっすぐ真剣にアリスを見た。

「今から、話すこと。信じられないかもしれないけど、聞いてほしいの」

空の色をした蒼い瞳が、ただ、アリスの目を見つめる。

なんて、綺麗な色、なのだね。

まるで、サファイアの宝石みたいだ。

アリスはリデルの目の色に見とられながら、コクリと頷いた。

「まず・・・私の血がどうして流れてないかは・・・どう言つたらいいのか・・」

リデルは、アリスが混乱してしまわないように、氣を使つてくれているようだった。

「リデル。そんなに氣を使つてくれなくても平氣よ。

例え、その話が理解できなくても本当のことだと信じるから」

「そう、ありがとう。じゃあ言つわね。

私は、人じゃないの」

アリスはその言葉に驚き、というより驚愕を隠せなかつた。

リデルは人じやない。人間ではない。獣人でもない。だつたら、何？

「だから血も流れない。さつき斬られたときの血は他人から人でないと悟られるのが嫌だつたから、ちょっと細工したの。あなた以外から、私のことを知られるのは避けたかった」

「ごめんなさい。と謝られる。

今も兵士と戦つてゐるダイヤと、ハンプティー、チョシャ猫に対するリデルの懺悔したい気持ちがはつきりと伝わってきて、アリスは思わず顔をそらした。

「でも、リデルはどうしてそのことを私だけに教えてくれるの？それに、人じやないとしたら……あなたは、何なの？」

そう聞くとリデルは目を伏せ、静かに話し始めた。

「……黄昏の国に一人の女武官がいたわ。その武官は交渉のために、反響の国へ使者として行つた。

するとその国の皇帝に見初められ、求婚されたの。その武官は、祖国のため、承諾した」

アリスはハツとしてリデルを見る。その話は、アリスが今まで聞かされた、自身の話だつたからだ。

聞いたことのある、聞き覚えのある、一つの物語。

「そして結婚式当日。武官は、皇帝の姉に呼び出され、部屋に向かつた。

その皇帝の姉は皇帝のことを心から愛していた。故に武官が憎くて憎くてたまらなかつた。

なので自身の使える禁呪、相手に大きな害を及ぼせる黒魔術を使い、武官を殺そうとしたわ。

けれど、殺せば後々が面倒なことになる。だから、殺すまではしなかつたものの、

黒魔術の中の忘却魔術で武官の記憶を奪い、そして皇帝の補佐官にある術を使わせ、

黄昏の国と厄介なことにならぬように偽造工作させたの。それで

「ねえ」

アリスはリデルの顔を見ずにそう言った。リデルのした話はあまりにも同じだった。

「皇帝の補佐官の使つたとある術つて、まさか……式術?」

リデルは頷いた。これで、確信できる。
この話の、一人の女武官とは……

「その武官の名は、アリス＝リデルよ」

ゆっくりとアリスは目を閉じた。
リデルの言葉がすんなりと、心に染みるように入ってくる。

アリス＝リデル。その名前が意味するもの。

「私は、黒魔術で分離した、アリスの記憶なの……」

薄々気付いてはいたものの、やはり驚き、目を見開いた。

「ジョーカー。この騒ぎを見てくれ」

マントを羽織ったスペードは、反響の国の城の前で目を細めた。
大騒ぎになつたその場所を見て、驚くことしかできない。

『ああ、凄いな。これはまあ、1000年前の世界大戦よりは当然
劣るが、中々楽しそうだ』

1000年も前から生きていた異形の者に対し、スペードは呆れた
ような表情をする。

「この騒ぎも、楽しむよつなものでもないところの！」

「ナイトメアが来てる可能性が高いな。・・・ジヨーカー、はいかつ包括してくれ」

『分かった』

ジヨーカーはさう同意した。刹那、スペースードの体を闇が覆う。おどりおどりしきスペースードを取り巻く。

『だがスペースード、気をつけや』

『?』

『雨が、来るぞ』

ジヨーカーは曇ってきた空を感じ、そう告げた。

これから起る出来事の大ささを語るよつて、曇天の空は黒味を増していく。

スペースード、雨、ジヨーカーは法えるかのように空を見上げた。

44・1つの事実と多くの真実

（1つの事実と多くの真実）

真実は、多くある。そして事実はたつた一つだけだ。
人の信じた事の数だけ真実はある。だが事実は実際に起こったこと・
・つまり一つだけ。

アリスは大勢の人間から「真実」を聞かされた。
でも、今は目の前のリデルから「事実」を聞かされている。
「私の、記憶？・・それって・・・・・、」

アリスの言葉にリデルは頷きながら言つ。

「アリスの記憶が凝り固まつたもの。それが、私よ。
だから田を閉じると、アリスの小さいころから体験していたこと
が甦るわ」

だから、トリデル言葉を紡ぐ。

「アリスは私で、私はアリスなの」

アリスがリデルの顔をどこかで見たことがあって当たり前だ。
なぜなら自分自身なのだから。

「でもそれだとおかしいわよ！」

「何で？」

声を荒げたアリスに対し、リデルは静かに問うた。
アリスも一度心を落ち着けてからリデルに答える。

「リデルが私の記憶というのはおかしいのよ……だって、帽子屋と戦ったときや兎手に襲われたときに

私の記憶、一部だけ戻ったの。リデルが記憶って言うんなら、その一部の記憶は何？」

「……それは、言い方を悪くすれば残り粕ね^{かす}。一部だけ記憶がアリスの身体に残つたのよ。

ほら、見て？現に私の方がアリスより少し幼いでしょう？それは所々の記憶が抜けているから

これで説明は終わり、とリデルは言った。
アリスも他に聞きたい事も無いから黙る。

「じゃあ、アリス。あなたに私を……いえ、あなたの記憶を戻しましよう」

リデルがあまりに淡々というので、アリスは少し驚く。

アリスの記憶が戻る。すなわちリデルがアリスに戻ると云ひこと。

でもそうなれば、リデルはどうなる？
リデルという存在は一体どうなる？

「消えるわ。全て。私と関わった全ての人の記憶から消滅する。だつて、私は所詮、記憶だもの」

「え……？そんな……のつて……」

自嘲氣味に笑うリデル。

アリスは、どうしてリデルがそんな風に自らを嘲るのが分からない。理解などできやしなかった。

「私は人じやない。人から忘れられていく記憶よ」

確かに、人は記憶を忘れる。どんな形であれ、忘れさる。人間は様々な記憶を持ち、どんどん新しい記憶を手に入れる。だから、当然忘れられていいく記憶もある。

それは否めないので。

「でも、だからって、人の記憶からも消えるなんて、そんな。おかしいわ、そんなの」

人から忘れられ、存在がなかつたことにされてしまう。それが例え記憶であろうと、そんなこと悲しいじやないか。あまりにも、つらすぎるじやないか。

「だったら、私は今までの記憶はいらないし、リデルが人じやなくてかまわないから。

だから、お願ひ。存在が消えるなんてこと、止めて」

アリスはすがるよつに懇願した。けれどリデルは頭を横に振る。その顔には、慈愛に満ちた、優しい微笑みが浮かんでいた。

「ありがとう、アリス。でも、もういいのよ。あなたの記憶は大切だわ。一つ一つがかけがえのないもの。

それをあなたから奪うなんて、私にはできない。大丈夫。私は消えるけれど、あなたは覚えておいて。

私が視たりデルとしての記憶はちゃんと残る。残つて、アリスの以前の記憶と共にアリスに渡される。

私は死ぬわけじゃない。あなたが憶えていてくれるなら

アリスは小さく頷いて、言った。

「忘れないわ。決して」

それを聞いて、ふわりとリデルは微笑み、アリスに近付く。リデルはアリスの頬に両手で触れ、顔を近づけた。

鼻先とおでこがぶつかり合う。アリスは静かにまぶたを閉じた。

刹那にリデルから淡い光が発した。

記憶の、濁流。

一気に押し寄せて映像のように流れる記憶。

幼少期から現在まで。素早く、鮮明に。しつかり、くつきり、はっきりと。

頭がパンクしそうで、でも頭はその記憶をちゃんと受け入れている。

リデルの姿がおぼろげに、霧のようにかすんだとき、アリスは確かに聞いたのだ。

「アリス、赤い箱を開けてみて」と。

たつた独りきりになつてしまつたアリスは、言われた通り部屋の片隅にポツンと置いてあつた赤い箱に近付き、ふたを開ける。

そこには真新しいトンファーに、白い紙。水色のHプロンドレスに、右端にリボンのついたカチューシャ。

そして、アリスの目と同じ色、蒼い涙型のペンダントが納まつていた。

アリスはエプロンドレスの上に置いてある2つ折りにされた紙を開く。

そこに書いてあったのは、「ありがとう。ずっと友達よ」というわずか13字の文章だった。

知らず知らずのうち、アリスの瞳から涙が溢れていた。
そのとき、アリスは心の底から感じていた。

リデルが消えた、いや、最初から存在しなかった存在。だが違う。
リデルはアリスじゃない。アリス=リデルの記憶じゃない。
リデルという名のアリスの友達。リデルは生きていた。リデルは確かに在った。

アリスはすっと涙を拭^{ぬぐ}うと、髪をまとめていたゴムを外し上を見た。
その瞬間、アリスは『黄昏の国のアリス』となつた。
リデルという記憶を身体に秘め、メイド服のリボンを外す。

もう、寂しくないよ。もう怖くなんかないよ。

だって独りじゃないから。リデルという友達が傍にいるから。

45・女剣士と猫嫌い

「女剣士と猫嫌い」

青い靴。白い靴下。水色のエプロンドレス。リボンのついた白いカラーシャ。蒼い涙型のペンダント。

カラー・コンタクトを外し、メイクを落として武器を手に取ったなら、先の見えない黒い穴へ行こう。

その先に待つものは、善か悪か。

それは誰にも分からぬ。

アリスは走った。どうなるかなんて分からぬ。だけど、ただ進むことしかできないのだ。

そう、クイーンを助けなければならない。

狂眼が、黒魔術が、彼女を完全に飲み込んでしまう前に。であるから、今アリスが向かっているのはクイーンの部屋だ。

「早くしないと……」

ウロ覚えの記憶を頼りにクイーンの部屋へ向かつ。

そんなアリスは記憶を思い出すのに必死でその気配に気付くことができなかつた。

「アリス＝リデル」

アリスは急に誰かに名を呼ばれる。

ハツとその方向へ振り返れば、その人物は無表情に立つていた。

「ルーク……」

「どうも。私の部屋の前をうろついていたので驚いた。

確か貴方あなたは『茨の牢獄』にいたはずなのに。貴方一人であそこから脱出するなんて不可能。

一体、誰が手引きしたのやら？

アリスは心の中で、一人の僧侶の姿を思い浮かべた。
知られてはまずいという気持ちが心を占める。

「まあ、そんなことはどうでもいい、か。私は足止めせねばいけないの。

アリス＝リデル。貴方をここから行かせはしない

「なら、私が足止めしてあげますよ」

張り詰めた空氣の中、突如、介入する第三者の声。

それは片眼鏡をかけ、白い時計を胸に下げた、猫嫌いの人物。

「ルークがアリスを足止めするといつのなら、私がルークを足止めします」

もう一度、ゆっくりとこう言つて、時計兎はルークを見据えた。

ルークは「三月兎、か」と時計兎の通り名を呼び、同じように見据えるように相手を見る。

「できるの？私を足止めだなんて」

「できます。いえ、しなければなりません」

ルークが剣を構え、そして時計兎に向かつて走る。

時計兎はギリギリまで相手を引き付けてからそれを避け、鞭を一瞬でアリスにまきつけるとそのままルークの背後へアリスを投げる。

「え、えっ・・・!?

アリスはあまりに突然な出来事に焦るが、態勢を整え何とか上手く着地した。

だがやはり急に投げられたのにはしさか不満だ。

「時計兎! 何するの!?

そう訴えてみるが、時計兎はアリスの顔を見ず、ルークと対峙して言ひ。

「アリス、そのまま真っ直ぐ走ってください。すると聖堂につきます。

そこの中階段からクイーンの部屋の近くまで行けますから」

「つ・・・! 分かった。ありがと、時計兎!」

アリスはタツと走り出す。ルークもアリスを追おうとしたが、剣を持つルークの右手に鞭が絡みつき、動きを止めた。

先程、時計兎はルークの攻撃をギリギリで避けた。

と、思っていたが、僅かに刃が時計兎の頬をかすめていた。

時計兎は左手で血を拭うと、そのまま舐める。

親指に付いた血を、ペロリ、と。

「足止め、と言つたでしょ? 行かせません」

「……なら、貴公を倒して行くまで」

巻きつけられた鞭をとると、ルークはキッと時計兎を睨みつける。時計兎は相手の女剣士に向かい、感情を出さずに告げた。

「安心してください。僕は、女性といえども手加減しません。いいえ、手加減はしますが、アリス以外は女性と見れないもので。アリス以外はメスネコにしか見えないんです」

「安心できる要素が一つも無いけれど。それに、何故メスネコ?」

そう問うと、時計兎はにっこりと笑つて

「私の一番嫌いな動物は、ネコですから」

と答えた。

45・女剣士と猫嫌い（後書き）

最近は戦闘シーンが続くので、苦心です。
戦闘シーンってどうやつたら上手く書けるのでしょうね・・・

「同属嫌悪と火の道化者」
ヒロ

カツン、と靴音が響く。

誰一人としていない、聖堂で。反響の国の城にあるこの聖堂は、あまりに静かでたまらない。まるで、別世界のようだ。

「着いた……けど、裏の階段つてどい？」

そろりと辺りを散策する

周りが静かだと思わず自分も静かになってしまいます。

少し薄暗い聖堂で、ステンドグラスがただ1つ目立っている。そのステンドグラスのそばには扉があり、アリスはそこに向かい、階段を探そうと思っていた。

けれど、その刹那。

ガツシャンと音がし、何かがステンドグラスを突き破って転がり込んできた。

アリスは咄嗟にトンファー^{ヒツカ}を構えるが、入ってきたのが帽子屋だと分かるとトンファーをおろす。

その帽子屋は傷だらけだった。何があつたというのだらけ。

「帽子屋！何があつたの？大丈夫！？」

アリスがそう呼びかけると、帽子屋は平氣だという意味を込めて頭を縦にふった。

ジャリ、と割れたグラスの破片を踏みつつ、誰かが割ったステンド

グラスをぐぐつて入ってきた。

「ナイト・・・！」

ナイトは剣を構え、殺氣を放つてアリスたちに近付く。ナイトも帽子屋同様、体のいたる所に傷を負つており、帽子屋と交戦していただろうことがすぐに分かつた。

「反響の国の城で、キングの膝元でこんな騒ぎを起こしたナイトメア。

それは排除せねばならない・・・覚悟しろ」

こうナイトは静かに告げた。帽子屋も大剣を構え、立ち上がる。アリスは困惑しながらも2人を見る。どうしたら良いのだろう。

「俺も負けるわけにはいかないんだ」

帽子屋と、ナイトが激しくぶつかり合つ。

キンッ、刀のぶつかり合つ音が聖堂に響いた。

アリスは呆然とその成り行きを見守ることしかできない。

「つーーー？」

突如アリスは禍々しいものを感じた。頭で考えるより早く体が横に動く。

さつきまでアリスが立っていた場所に剣が下ろされていた。
そこには兵士ボーンがいた。操られし兵士。

兵士はアリスに剣を向け、襲い掛かった。

それを見たナイトは交戦中にも関わらず叫ぶ。

「止めるポーン……騎士の風上にも置けない！」

お前たちの主はクイーンでなくキングだろ？！氣をしつかり持て
！」

直属の上司に怒鳴られ、一瞬兵士は氣が戻ったのかピタリと動きが止まる。

しかし、またすぐにアリスに剣を振る。ナイトはハッとして、帽子屋を振り切りアリスを助けようとした。

「待て、戦闘中にどこに行く気だ？」

けれど、帽子屋がナイトの肩を掴み、そう言った。ナイトは少し煩わしげに帽子屋に振り返る。

「どこへ行く？そんなの分かりきっている。アリス＝リデルの所だ。俺の部下を止める。

イカレ帽子屋、貴様は助けないのか？とんだ人間だな。同じ国の
人間だというのに」

「いや、俺はアリスを見捨てる訳じゃない。ただ、俺が手出ししなくともアリスは自分で何とかする。

武官を、舐めてもらっちゃ困る。俺は、アリスを信頼してるんだ」「そう言い切った帽子屋とは対称的に、ナイトは眉間にシワを寄せた。この男と自分は合わない。そう感じたのだ。アリスがトンファーで兵士を倒すのを見て、ナイトは軽く鼻を鳴らす。

波長が合わないのだと、悟った。

そのとき突然バンッと音がして聖堂の扉が開いた。

そう思うより早く、アリスと戦っていた兵士が倒れた。一瞬の出来事。

血が、跳んだ。

「ポツポーン！何が・・・まさか、アリス・・・な訳はないか」

ナイトはアリスを見てから呟く。

アリスはダガーという刃物を持つてはいるが使っていないことは明らかだった。

だと、したら。この兵士を攻撃したのは、ダレ？

「誰だ」

帽子屋が低く問う。

その疑問を投げかけられた人物は、この場に不自然なほど馴染んでいて、気配も薄い。

まるで、最初からいたかのようだった。

全身をくすんだ黒いマントで覆った人物は、兵士たちの血がついた鎌を下ろすと、マントのフードを上げた。

警戒して、アリス、帽子屋、ナイトはそれぞれの武器を構える。

「道化者、ジョーカーだ」

ジョーカーと名乗った人物は、黒かつた。

マントもそうだが、髪も目も全て漆黒の色だ。

その黒真珠のような瞳はアリスを見る。

「安心しろ。用があるのはアリスのみだから」

そう言つて、その男はアリスに近付く。アリスは何故か逃げない。怖いとも、恐ろしいとも感じず、ただ、黒い髪と目で意識は惹かれていた。

それからアリスの手を掴むと、ジョーカーは聖堂から出て行く。アリスはされるがまま、ジョーカーに引きずられるようにして、ジョーカーと共に出ていった。

「アリス……」

帽子屋がジョーカーをおいかげようとするが、それをナイトが阻んだ。

「戦闘中にどこへ行く？」

先ほど、帽子屋の言つた台詞をそのまま言い返すナイト。帽子屋はフウ、と息を吐いた。

「負けん気、強いんだな」

「褒め言葉として受け取つておぐぞ、イカレ帽子屋」

ジョーカー。帽子屋はどうしてか、ジョーカーがアリスに危害は加えないと心のどこかで確信していた。

それは何でだろうと考えつつ、帽子屋は、大剣を構えた。

46・同属嫌悪と火の道化者（後書き）

ひさびさの更新すいませーっん・・・
アリスの下書きノート一冊目突破しそうです。
このペースで「行くと50話行きますよ（汗）
ナンテコッタイ。

小話2 ポモコ・ルート（注意！）（前書き）

この話は、アリスキャラを使つた遊びのよつなもので
本編とは何一つ関係ありません。
そしてこれは「死ネタ」です。

以上が苦手な方は戻つてください。
OKな方だけどうぞ。

ちなみにルークさんとナイトが登場します。

小話2 good night (注意ー)

· good night ·

自分自身ではいつも通り歩いているつもりだけど
身体がフラフラしてちゃんと歩けない。

歩いても歩いても辿りつけないもどかしさに苛々するけど、
やつとの思いで目的地に着いて、ノックもせずに扉を開いた。

そこは、幼馴染であるナイトの家。

ナイトは家族から離れて、一人森の近くに住んでいる。

いきなり開いた扉、そして入り口に突っ立っている私を見て、ナイトは翡翠色の目を少しだけ見開いた。

「絨毯の上、血が染み込んだら落としにくい。だから外で話そつ」

ナイトは一目見ただけで何か事情を察したらしく。

さつきは絨毯に落ちた血は落としにくいうことか言ってたくせに、
今は自分の服に血がつくのもかまわず、ようより歩く私の肩を抱
き、外まで連れてってくれた。

そして、無造作に並べられた丸太の上に私を座らせる。

改めて心を落ち着かせると、鼻をつく鉄の臭いがした。

毎日着ている近衛の制服が、見るのも嫌になるくらい血で濡れてい
る。

この血は、返り血と自分の血の両方。

正直、意識が飛びそうなくらいの痛みにも慣れてきた。

私はこんな致命傷を負つたことが無かったから、痛みには免疫がついてると思つてたけど、そんなことは無いと思いついた。そこには痛みには免疫がないから、そんなことは無いと思いついた。

本当の痛みは、頭がくらくらする。

そして、痛いはずなのに、思考だけはやけにクリアになるとこいつ二とも

今日、初めて知った。

「で？」

ナイトがそう聞いてくる。

私は仕事でへマした、とだけ答えた。

確かに私とナイトは恋人同士、という関係にはある。だけどなんで、どうして気力を振り絞ってでも来たのだろうか。自分自身、尋ねたい。

「この傷のせいで死ぬなあって思つたから、クイーン様に許し貰つてここに来た」

クイーン様は手当てしようつと何度も言つたけれど私は首を振つた。どうせ手当ても助からない。

だったら、最期に自分のしたいようにしたかった。

近衛になつてから、私の死に場所はクイーン様のお傍だとずっと信じていた。

だけど、実際はこうしてナイトの傍にいる。

自然に動いた足は、私をここへ導いた。

「何で、無理してまで俺のところなんだ？」

「わかんない」

視線を落とすと、未だお腹の血が止まつていらないのが見えた。
けど、田が霞んで、視界がぼやける。

息をするのも疲れてきて、もうそろそろかな、なんて思う。

「でも、死に直面したとき、真つ先に思い浮かんだのがナイトのこ
とだったから」

「そうか」

「うん」

どうして、ここに来てしまったのだろう。
どうして、この男を思い出したのだろう。
どうして、クイーン様の傍で死を迎えるなかつたのだろう。
どうして、この男と出逢ってしまったのだろう。

出逢わなければ、こんなにも胸がいたくなる、なんてことなかつた
のに。

でも、出逢つていなかつたら、こんなに穏やかな気持ちで死を迎
ることなんてなかつた。

あんなに毎日が、餡玉みたいにきらきらと光ることもなかつた。

なんて、乙女チックなことを考えてみる。

わたしは男勝りだったから、町娘の子たちみたいにおしゃれも人形遊びもしなかった。

だから、最期くらい女の子っぽい」と、考へても良いよね。

騎士である以上、どこでも死ぬ覚悟はできていた。
だけど、その覚悟を鈍らせたのはナイトなんだよ。

「ね、ナイト」

そう呼びかけると、ナイトは視線だけこっちに向かってくる。

そんな全く持つて意味ももたない、何気ないことも全て愛しいと思える私は、

どうやら自分で思っていた以上に田の前の男に惚れてるらしい。

「私の世界は、ナイト中心にまわってた。

一日だって会えなかつたら、つらかったよ

「・・・・」

ナイトは何も言わない。黙りこくつてるだけ。

それでも私は言葉を紡ぐ。

自分でも信じられないくらい、言葉がスラスラとする。
だつて、最期くらい素直になりたいから。

「今、私が死んでも

ああ、駄目だ。

「ずっと好きで」

田の前の景色が霞んで、頭が白い霧みたいなのに覆い尽くされていく。

「いて、くれる？」

最後のそれは、言葉になつていただろうつか。

私が倒れる間際に見たものは、
青い空と白い雲、視界の端に捕らえた緑の木々、
そして、田を伏せたナイトの姿。

これが、私の最期なんだ。

痛みがなくなつたら普通は元気になつて体力も回復していくのに、
今はお腹の痛みがなくなつた途端、力を奪われたみたいにこうして
倒れてしまった。

でも、痛みはもうない。

ただ、もっと生きたかったなあ、といつ胸の痛みだけはなくならなかつたけど。

「ルーク」

私が、温かくて優しい白い霧に包まれているとき^{くる}に、ナイトが私の名前を呼んでくれた。

あまりの心地よさに、田からあつたかい涙が零れ落ちる。

その声に誘われるよ、私は田を開じた。

ナイト、Jの世界の誰よりも貴方が好き。
前は中々素直になれなくてごめんなさい。

確か私の初めてのキスを奪つたのも、ナイトだつけ?
あまりに突然で、まだ幼馴染だと思つてたときにされたから、はつ
きりとは憶えてないや。

そういうえば、一度も私からキスしたことって無かつたよね。
だって恥ずかしかったから、できなかつたんだよ。

ねえ、ナイト。ひとつでいいから、迷わずちゃんとこいつをこきて
ね。
そしたら、私からキスしてあげる、から。

だから、悪いけど、あなたよつちよつと早く、
おやすみ、なさい。

小話2 ぱおな ニ・モナ（注意ー）（後書き）

最後に近づくにつれて、
ルークの一人語りも乙女っぽくなる感じを
味わってほしくて書いてみました。
いわば習作です。

これが40話記念とか言つたら、怒られる気がします。

47・黒魔術と女皇の本心

（黒魔術と女皇の本心）

「あなた、何者？」

アリスはジョーカーに尋ねる。だが、ジョーカーは無言で走る。
さつきからこんな調子だ。

「どこへ連れて行くつもりなの？」

「…………」

何がしたいのか分からぬ。
流石にアリスも焦りを感じ、手を振り解こうとした。
でも、ジョーカーは手を放そうとはしてくれない。
この華奢な手のどこにそんな力があるのだろう。

「あの、ジョーカーさ」「姦しいな。俺はお前を黄昏の国に送り返す
だけだ。少し黙つていてくれ」

その言葉にムツとして、アリスは目の前の男を睨む。
姦しい、黙つていろ？それだけじゃない。黄昏の国に連れてかれる、
なんて。冗談じゃない。

アリスはここにでせねばならないことがある。

「離して！私はここでしなきやならないことがあるの」

「そりがもしけないが、戻れ」

アリスはその言葉に焦燥し、逃げよつとした。
その時だ。

「つーーー！アリス＝リデル！逃げる。この先は、拙い。後ろに走れ
そうジョーカーに言われた。
でも、こんな奴に言うことなんて信用できない。
会つたばかりなのに。

「早く逃げる！」

声を荒げるジョーカーにアリスは反抗する。

「貴方は人に指図してばかりじゃない。
さつき会つたような人間、そこまで信用できるとでも？」

「そんなこと言つてる場合じやない。ともないと・・・

「さもないと、どうなる？」

突然現れた声。

嫌な予感が体中を駆け巡る。

アリスは汗を流しながら、ゆっくりと振り返った。
紅く彩られた唇。長い睫毛。白いドレスを着こなした、その人物。

「アリス」

名を呼ばれただけで、こんなに嫌な汗が流れたのは初めてだ。

アリスは横にいるジョーカーを盗み見すると、苦虫を噛んだかのような表情をしていた。

ジョーカーは本当にアリスのことを助けようとして、逃げろと言つた。

だが、アリスにとつて逃げなくて正解だつたのかもしない。アリスは今、田の前にいるこの人物の元に行こうとしていたのだから。

「良くも、まあ。あの牢獄から逃げ果せられたものだ」

「こり。と笑んでいる。だが、それは怖い。
つうと汗が伝つた。

会わなければ、と思つていたのに実際会つと恐ろしい。
けれど、アリスはちゃんとクイーンの双眸を見つめた。
本質を、見極めるように。

「クイーン……兵士を動かしたのは、貴方?」

内心確信を持ちつつも、アリスはクイーンに問つた。
クイーンは悪びれる様子なく、右手をひらひらと振つた。

「そうだ。まあ、あまり役には立たなかつたようだがな」

言い捨てるような物言いに、アリスは沸々と怒りが沸いてくるのを抑え切れなかつた。

「何言つてゐるよクイーン!……自分の都合で人を操つてい

とでも思つてゐるの？

人を操つて何かあつたときの責任なんてあなたにとれるの？
クイーンのすることは、人の命を弄ぶつことなのに・・・分
かっているの！？」

人のイノチを弄ぶ。アリスは何より心を痛めた。

国のトップにたつものは、人の命を手のひらに乗せているのと同様
だ。
自分の命めい一つで、生命せいめいを投げ出す人もいる。

アリスだつて、国を護るためならばそつする。
けれどそれを望まない人間を無理やり操つて命を投げ出させるなん
ていけないことだ。
それを分かつていながらすることは、もつとタチが悪い。

だが、クイーンはアリスに対し、くつと口元に弧を描く。

「何を馬鹿な・・・私は女皇クイーンだ。民草など、私のために命を投げ出
して当然」

アリスは愕然とする。

込み上げる怒りで心がいっぱいになる。

「そんなことつ 「アリス下がれ！」

アリスはクイーンに向かつて足を進めようとする。
だが、それはかなわずジョーカーに引っ張られた。

アリスをかばうように抱きしめるジョーカーの背中こしに、アリス

は見た。

クイーンの手から赤と黒の混じった色をした炎が発しているのを。
黒い靄^{もや}がクイーンの周りを囲うようにして渦巻いていた。

これが、黒魔術。

近寄つただけで足が竦みそうになる。

炎で熱いはずなのに背中は凍るように冷たい。

冷気が、アリスのすぐ横を通り過ぎた。

アリスは目を見開いて、その炎を凝視する。 動けない。

「アリスっ」

ジョーカーが苦しそうに呻いた。

炎による外傷はないようだが、炎とともに吐き出すよつてたあの
黒い靄に苦しんでいる。

靄に包まれながら、アリスは思つ。

この靄は、クイーンの苦しみ、痛み、怒り、妬み、憎しみ。

そして身を引き裂かれるほのどの悲しみ。

助けて。

この、救いを求める声、は。

「クイーン、の・・・本心・・・・・」

朦朧とする意識の中。

ジョーカーは意識を失つたアリスを横抱きにしながら、何とか靄か

ら抜け出す。

そして、気付いた。

アリスの頬に伝う、一筋の涙に。

48・黒い瞳と真紅の双眸

（黒い瞳と真紅の双眸）

ジョーカーは自分の腕の中にいるアリスを見て、ため息をつく。

信じてもらえたのは仕方ない。

自分でさえ、自分のことを探しと怪しいと思つ。

ただ、黒魔術の影響を受けているのは気になる。

自分も、あの黒魔術を避けようと思えば避けられたはずなのに。

ジョーカーはそっと目を伏せる。

そして、先ほどの状況を思い出していた。

スペードがあの炎を避けたがらなかつた。

アリスを炎から守りうとした。自分の身を^{てい}してまで。

これが人間の自己犠牲と愛情か。

そう思い、息をつく。

クイーンはまたすぐ自分たちを見つけ出すだらう。

見つかるより前に逃げなければ。

今はまだ、外に逃げることだけを考え、アリスを起しきれないように走る。

ジョーカーは雨が降っている外を見て、眉をしかめた。

ザアアア・・・といつ雨の音で、アリスは目を覚ました。

やけに近くで聞こえる雨音と、湿った土や、木々の匂いがした。ゆっくりと目を開けると、そこには自分を見る黒い目がある。

「フージョーカー？ クイーンはっ・・・」

辺りを見渡すと、そこは城内の庭園。

今はビーナスの木の下で雨宿りをしていろひじこ。

「クイーンからは逃げてきた。全べ・・・だから逃げると言つたのに。

黒魔術は普通は一度捕らえられたら逃げられない。使う方も、使われる方も。だから、厄介なんだ」

どこか棘々しさのある口調。

しかしよく見たら、アリスには寒さを考慮してか、ジョーカーのマントが被せられていた。

「でも、私は・・・」

「でも、何だ？ 止めるつもりか？ クイーンを。馬鹿らしくことは止めて、深窓の姫でもしておけ！」

「何で、そういうこと、言つて？ 私はクイーンを止めたい。だつてさつき、クイーンの本心が聞こえた。助けてって・・・」

その言葉にジョーカーは目を剥ぐ。

黒魔術の使用者の本心が聞こえるなんて、ない。ただの人間にはあり得ない。

けれど、アリスはただの人間。だとしたら。

そこまで考えてから、アリスの胸元の蒼いペンドントに初めて気が付く。

あれは、ジョーカーはアリスの記憶が無かったことを思い出した。そういうことだったのかと。

そんなジョーカーの心境を知つてか知らずか、アリスは口を開く。

「私の道は、私が決める。今までみたいに、色々な真実に振り回されたりしない。」

ちゃんと事実を知った上で、自分自身で道を切り開く。どんなに困難な道でも諦めたりしない。

だから、だから私は、助けてと願つたクイーンを止めたい、いえ、救いたい

アリスは立ち上ると、ジョーカーにマントを返す。
ジョーカーはマントを羽織ると、言つた。

「・・・誰にも、頼らないつもりか？」

「そう、かもしれない。今まで散々迷惑をかけてきたし、これ以上迷惑をかけたくない。」

個人の勝手な願いで振り回していいようなものじゃないと思つも

の

「今更」と、ジョーカーは呟く。

そして、何か吹っ切れたかのように、マントを羽織つていた手を止める。

それどころか、マントを脱ぎ捨てた。

ジョーカーは木に掛けおいた鎌の刃の部分を眺め、なぞりながら言った。

「アリス・・・俺は構わないが、せめて、“ここ”だけは、信じてくれないか」

「え？ ここ？」

「こことこのが何を指しているのか分からず、アリスは反復する。

するとジヨーカーは、自身の胸ポケットから一つの指輪を出した。ガラスのような透明な宝石のついた指輪。

指輪を左手の中指にはめると、指輪を擦るように右手で触れる。

「何を・・・？」

「まあ、良いから、黙つて見ていろ」

ジヨーカーはそう言つと、木の下から出て、雨を全身に浴びた。その瞬間、アリスは瞠目した。

何故なら、変わっていたから。

「スペー、ド？」

黒い髪は金の髪へ。黒い眼は真紅の眼へ。指輪のガラスの宝石は、紅い宝石へ。

染まるよに色が変わっていく。

スピードは悲しげな瞳で、アリスを見つめた。

「アリス・・・」

切なげに、かすれた声が発せられた。

「ど、ど、どうして……？」

「アリス」

驚くアリスに、またスピードはアリスの名を呼んだ。その声色に、アリスはそつと身体を震わせる。

「僕じや、黙目のかな……？」

悲しそうに、消えそうな声で言葉を発す。

「僕は、アリスを助けたい。アリスに頼つて欲しい。アリス……
僕じや、黙目？」

アリスは戸惑つて何も言えない。

答えようとしても、何を答えていいか、分からぬ。

「……好きだよ、アリス」

「……？」

「僕は皆に『王』だから、守つてもらつてゐる。助けてもらつてゐる。
だからそれと同じで、僕も、皆を助けたいんだ。」

僕は、好きだよ。黄昏の国も、皆も、それにアリスも。

それら全て、僕の手で守りたい。全て、守れるなんて思つてはないよ。

だけど、今までみたいに、最初から何もせず諦める」とは、もう、絶対したくない

スペースードは、天を見上げる。雨が降つて、しばらくは止みそうにな
かつた。

小話3 恋の病に薬なし（バレンタイン記念）

バレンタイン。

田頃つづましく想いを秘めた女性が愛をこめて想い人にお菓子をさげる日。

とはいえそれは誇称の国限定の行事であって、他の国では少し違うのだ。

黄昏の国も、誇称の国とのバレンタインとは少し違う。

「と、誇称の国では男女はそういうふうに2月14日を過ごすものだ」

ただいま会議室にて、ナイトメアと王とその近衛と補佐の男性陣でお茶会が開かれていた。

そんな中「時に、」とクローバーが誇称の国でのバレンタインの話をしたのである。

そして今に至るわけだ。

「へえー、そうなんや。この国では、お菓子だけを贈るってワケじやあないもんなあ」

ダイヤはクローバーの話を聞いて、うんうんとうなずいた。

帽子屋の入れた紅茶と同じ色をしたソファに座り、腕組みをする。

「カードとか花束とかやな。誇称の国みたいに女の子からだけでもないやる」

ダイヤはゆっくりと視線を後ろに動かした。

そこには先ほどダイヤが言つたよつて、花束やカード、綺麗に包装された箱が山積みになつてゐる。

「いやあ、モテるね」とスペードは

チョーシャ猫は猫舌のため、紅茶を息で冷ましつゝ呟いた。

山積みとなつた贈り物はスペード宛てのものだ。

スペードはとくと、その処理に困つた様子でため息をつく。

ちなみに贈り物は全てクローバーやナイトメアたちにより安全確認をされ済みだ。

安全確認の仕事が終わつた後、スペードがやつて来て、いい紅茶の葉が手に入ったからとそのままお茶会が開催された。

毎年恒例の出来事だ。

「モテても、ね」

フウッとスペードは目を伏せる。

きっと今、彼の頭の中ではアリスのことが思ひだされていることだらう。

「そんなこと言つたら罰が当たるだ

「でも、本当に欲しい人からじやないと意味がないじやないか。僕だつて貰いたくて貰つてるわかじやないのだし」

その言葉に少し軽蔑したかのような視線がスペードに集まつた。スペードはしまつた、と自分の発言を呪つた。

「うわー、サイテーやな」

「失礼すぎますね、スペード」

「女子の気持ちも考えて欲しいものだな

「スペードがそんな態度とるからア、アリスが女子から嫌われるんだよお」

「可哀想だ、アリスも女性たちも」

一同に責め立てられ、スペードは言葉を詰まらせた。
ちょっとでも口を滑らせるところしていじられる。
噂が広がらないだけマシかもしれないが、それでも後悔の念はやま
ない。

「し、仕方ないじゃないか・・・そうだ、ハンパーティーならこの気
持ち分かってくれるだろ?」

唯一自分を責めなかつたハンパーティーに助けを求めるが、ハンパーテ
ィーは予想していなかつたのか肩を揺らす。

「え、えーと」

「どう思つ?」

ハンパーティーは、期待に満ちた顔で自分を見るスペードに耐えられ
ず、
「うそ、まあ・・・」と言葉を濁しつつ答えた。

しかし、確かに貰えるならアリスから貰いたいのは皆同じだ。

すると、突然コンコンと部屋に控えめなノックの音が響いた。入ってきたのは、アリスとハートの2人。

「そろいもそろつて景氣の悪い顔しちゃって。何よ

ハートは何かを大事そうに抱え室内に入ってくる。アリスも何かを持っていた。

「アリス、どうしたんだ」

帽子屋の問いにアリスはふっと表情を和らげる。それから手に持っていた何かを差し出す。

「これ、菓菓子にと思つてね」

皿に乗つたそれはチョコレートクッキーだった。

「これは・・・」

「クローバーから聞いたの。今日は女性から大切な人にお菓子を贈るんでしょう?

皆は・・・私にとつて大切な人だからいいかな、なんて」

アリスの笑みに皆も顔を綻ばせてクッキーを食べた。

(・・・あまい)

サクッとしたクッキーはほどよく甘く美味しかった。

と、その時。

ハートが顔を真っ赤にさせながらハンパーティに、大事そうに抱えていた箱を突き出した。

「えっと、ハート、何かな？」

「うう、これ、作って余ったのー。だからあげるー。もつたいないしぃ」

あーあ、とアリスは呆れる。

あれほど予行練習と言つてアリスを巻き込んで、可憐なじくチョコを渡そうとしていたのに。

恥ずかしさからこのようなことを口走つてている。

ハート自身もその発言を悔やんだように表情を歪ませる、が。

ハンパーティーは箱を開け、チョコをゆっくりと口に運ぶ。

「おこしこみ、ハート。チョコ、ありがと」

ハートはその言葉にせりふ真っ赤になり、照れを隠すかのよつてリストのクッキーをかじつた。

微笑ましい、と思つと同時に、帽子屋はサラリとそれをやつてのけるハンパーティーを見る意味で尊敬した。

その気がないのに、そういうことができるなんて、と。

「あ、そういうば。アリス、これを」

クローバーが思い出したように手を上げる。

それから袖から白い箱を出して、蓋を開けた。

そこには、花をあしらつた練り切りが入っていた。

「あ、貰つていいの？」

クローバーは無言で頷いたのを見て、アリスはひとつ練りきつをつまむ。

「わ、凄い可愛い。器用なのねクローバーって。食べるのが勿体無いわ」

「姉から教わったことがあつてな。・・・この国では、バレンタインを男から送つても良いのだろう?」

アリスはその発言に驚きつつ、ゆうくつと微笑んだ。
それから、あ、と声を上げる。

「クローバーといい、誇称の國の人つてこういう行事を大切にするのね」

そのアリスの言葉に首を傾げる。

それは、どういう意味だ?

まさか、と思い至つてからダイヤが口を開いた。

「アーリスちゃん。それって、もしかすると・・・」

「ビショップからね、苺クリームの入つたお饅頭が届いたの。・・・
あつ他にもキングからカスミ草が」

カスミ草の花言葉「清い心」というカードとともに贈られてきた。
こうしてはおられない、とクローバー以外の男たちはアリス（とハート）に贈るための物を何にしようか思案する。

そんな中、ハートだけがまだ顔を染めながら呟いた。

「まさに男たちもあたしも

恋の病に薬なしつて感じね・・・

黄昏の国にもバレンタインが、流行の兆し、だ。

2月14日。

小話3 恋の病に薬なし（バレンタイン記念）（後書き）

はい。

よくわからないグダグダつとした話になりました・・・

とうあえず

ちゃつかりなクローバーさん

贈り物をするビショップとキング

赤面するハート

モテるスピード

いじられるスピード

がかけたので満足です。

ただ全部詰め込んだら訳分かんなくなりました（笑）

49・嬉し涙と女王の誘い

（嬉し涙と女王の誘い）

冷たい雨が、スペードに落ちる。
そうしていろときは、全て、苦しことも悲しことも忘れられる
気がした。

「駄目なんて・・・そんな」

「じゃあ頼つて欲しい。誰もみな1人で生きている人間なんていいな
いから。」

人から幸せや喜びを分けてもらつて、生きてる。アリスだって、
1人じゃない」

アリスは1人で、片意地張つて生きていた。
弱みを見せることは、母らしくも父らしくもないと思つていたから
だ。
だから誰にも弱みを見せなかつた。

「アリスは、アリス自身が思つていてる以上に、たくさんの人々に愛さ
れている」

それは、恋愛的な意味であつても、友情的な意味であつても。
大切に、想われていてる。

今度はアリスの目を見て、スペードは諭すようにアリスの頬に触れ
た。

「アリス……どう？」

スペードは頼つてほしいと言った。

アリスは少しも自分が背負つた荷を分けてくれない。
それがたまらなくもどかしい。

スペードだけじゃなく、皆もつ思つているはずだ。

「ええ……」「めぐ、なさい」

「謝るほどのことじゃないよ」

「……ありがと」

「お礼を言つほどのことでもないよ。これは、僕の我慢なのだし」

そうして、ふんわりと微笑んだ。

頼ることも弱みを見せることも、悪いことじゃない。
むしろ、1人で抱えて1人で苦しむことのほうが、よっぽど苦しい
のだ。

「そうだアリス」

アリスは何? といふ意味合ひを込めて首を傾げる。
スペードがどこか子供のような笑みを見せていた。

「ハートが

あれだけアリスのことを嫌つていた女王。

「アリスがもし無事に帰つてこれたら

アリスがいくら望んでも、決してアリスと仲良くしようとはしなかつた。

「一緒にお茶会しよう、つむか」

けれど、もつ。

アリスはハツとして、スペードを見た。

本当のことだとこう意味で頷くスペード。

アリスは女友達がいない。いたとしても極端に年下や、ごく僅かだ。アリスが武官になるための鍛錬を積み重ねている間、女の子達はお洒落や恋に夢中になっていた。

ハートもそうだ。

ハンパーティに恋をして、好かれるためにお洒落をした。だがハートがいくら自分を美しくなるよう磨いても、ハンパーティはアリスが好きだった。

だからこそ、ハートはアリスが嫌いだった。

挙句の果てには、政略結婚として嫁ぐはずのキングにも、アリスが好きだからと断られた。

アリス自身、ハートに嫌われていることはよく分かっている。もう、和解するのは無理ではないかとさえ思えた。だけど、お茶会と一緒にしようという誘いは

「友達、つむ思つていいのかしら」

「うん。・・・ここと思つよ」

ハートはもうアリスを妬み、嫌つていなか。自分がアリスにした仕打ちを悔やんでいる。

スペードの言葉にアリスは手で顔を覆う。

すこし、嬉し涙がでてしまったのを隠すかのように。

やつとあの不毛なサイクルから抜け出せそうな気がしてたまらなかつた。

『それでアリスは今からどうするつもりなんだ？まさかこのまま黄昏の国に帰るわけじゃないんだろうが』

指輪から発したジョーカーの声にアリスは頷く。

そして真っ直ぐ空を仰ぎ見る。

雨は先ほどよりもゆるやかになつていてあと數十分もしたらやみそうだ。

「私、人に頼ることはいけないと思つてた」

“リデル”だつたときも、誰にも頼らずに一人だけでなんとかしようと足搔いていた。

その結果、こんな大事になつてしまつた。

「だけど頼ることは悪いことじゃないのね。それを気付かしてくれて、ありがと。」

・・・今から私はクイーンのところに行くつもりよ。だから、着て欲しいの。クイーンを止めたい、から、「

「あ、ちるんだよ

クイーンを止めて。
クイーンを救いに。

「行ひ。全てを終わらせよ

～白雷と師匠の教え～

金属のこすれ合つ音。そして、式の音。

「ふつ！」

クローバーは刀で、ビショップは錫杖で。
攻防、どちらが優勢なのか、どちらが劣勢なのか分からぬ。
ただ戦つていた。

「オン ベイシラマナヤ ソワカ・・・式、白雷！」

ビショップがそう唱えると、式紙から雷が発した。

「（威力が、上がつている…）」

驚きを努めて顔に出さないよつにしながら、クローバーは白雷と対峙する。

まだ2人が誇称の国にいたときは手合わせをしていたが、あの時より威力は上がつていた。

「（それに、速さも…）」

光の速さで駆ける雷。

昔の手合わせではこれをくらつて氣絶したこともある。
それくらい、威力が強い。

ビショップは「わい、じつ切り抜ける？」と意味を込めほくそ笑んだ。

反撃してやりたいのはやまやまだが避けるだけで精一杯なのだ。しかし、そのまま避けていても何も変わらない。

ふと、クローバーの頭の中に昔のことなどがよぎった。

『もし自分がより強に敵と戦うことになつたらどうする？』

懐かしい師匠の声。

2人きりのとき、唐突にそんなことを言つたのだから、クローバーは少し戸惑つたのを覚えている。

『逃げる？それとも命^{めい}こをする？』

幼き自分はどう答えたろう。

師匠の問いかけに、どう返事をしただろう。

『それがしあげぬ氣も、命^{めい}こもせぬ。』

『やう、じゃあどうする？』

『たとえ勝ち目がなくともたたかう。』

この答えに師匠は言つたのだ。

その考えは命を無駄にするだけだと。

でもクローバーは逃げ出すことや、諦めたりすることが嫌いだった。クローバーにとっては死んだら死んだで仕方のないことだし、

逆に戦つて死ねることは武士にとっては光榮なことだと思っていた。

『でも黒。よく考えて『じりんなさい。死んでしまつたら何もできな
い』

師匠は黒、と愛称で呼んでから田を伏せた。

『死んだらもう一度と誰にも会えない。こうして私の授業を受ける
ことも、ね』

師匠はやう言つて、いじわるやうに笑つた。
何もできない。その言葉が当時のクローバーにとても重くのしかつ
た。

『それでも黒は死を受け入れることができる?
もう一生愛しいと思つたものと話せないし、触れることもできな
い。
それって、とても悲しいことじやないの?』

『・・・かなしい、こと』

死は悲しいもの。

死んだ本人だけでなく、残された友達や家族さえも悲しみに浸つて
しまう。

『だから強い人と戦つてもいいけれど死を受け入れるのは止めなさ
い。』

最後の最期までもがいて生きる道を選びなさい

最善の努力をつくしたついで死んでしまつたらそれは仕方の無いこ
とだけれど、と苦笑まじりに付け加えた。

生に執着し、必死に生きようとして足搔くことは決して恥ずかしい

「とにかく、

そう師匠は言ったのだ。

え・・・?

『でもこれは毘沙門たちには内緒ね。あの子達は、死を受け入れるなどいっても受け入れてしまうから』

小さく、しかししつかりと言われた言葉を思い出し、クローバーは
ゆっくりと刀を構えた。

盤田の言、たその聲

今こそ「優れな日本」
と「優秀といふのが日本力

「つ！？」

刀を構えた姿勢で、まっすぐ、ビショップに突っ込んだ。

流石にビショツプもこれには予想外だつたのか目を見開く。だがすぐに白雷をクローバーに落とした。

「ぐう！」

クローバーは苦しみからうつめぐ。

ビシミツフのその苦しげな声を聞き、無意識的に気を緩めた、が、刹那、横から刃が迫った。

「 しあわ ・・・ !」

式を発動させる暇もなく、錫杖で防ぐ暇もなく、その刃はビショップの肩を斬り裂いた。

式術は基本的に誰にでも使えるが、上手くなるには生まれ持った天性が必要だ。

それと同時に、本人のとてつもない精神力・・・集中力がなければ長時間使うことも上手く使うこともできない。

ビショップの集中力は半端じゃない。それこそトップクラスといえる。

その集中力が凄いからこそ戦闘にも実用でき、強いのだ。

だが今、不意をつかれたことによつて集中力が切れた。つまり、式の効力も消えたのだ。

遮音結界の式も切れ、水を打つたかのように急に騒がしくなる。白雷もまた、フツと搔つ消えた。

「まさか・・・真直ぐ突つ込んでくるとはな・・・」

ビショップは自身の肩を押さえ呟いた。
一方クローバーは僅かに口角を上げる。
白雷のダメージもかなりあつたはずなのに、だ。

「これは師匠が言つていたことだ。

致命傷を喰らつて死ぬより、緩い攻撃を喰らつてでも相手に反撃し、生きること。それが師匠の教え」

確かに白雷の威力は上がつていた。

けれど、強くなつたのはビショップだけない。

クローバーもまた、ビショップと同じように強くなつたのだ。

だから、白雷をひとつ喰らつても、以前と違い倒れたりしなかつた。

「なるほど。肉を切りせて骨を断つ・・・あの人らしい考え方であるな」

苦しげに笑い、こう漏らしたビショップの視界に何が映つた。
白い狼の形をした、何かが。

「つ・・あれは、」

目を見開いて、その狼を見る。

クローバーも不思議に思い、狼を見る。
やがてボウンと音がするどびことも狼はおらず、白い式紙のみが場
に残つた。

ビショップはその式紙を握り締めると口を開いた。

「悪いがこの勝負、お預けだ」

そう言つが早いか、タツと駆け出す。

「なつ、」

クローバーも急いでビショップの後を追つた。

「（あれば式神の術か・・・）」と心の中で考えながら。

50・白雲と歸匠の教え（後書き）

どうでもいい豆知識。

幼き日のクローバーは師匠から「黒」と呼ばれていました。
幼き日のクローバーは言葉遣いが幼い。

（式神と黄昏の童話）

式神とは要するに式術でつくつた使い魔のこと。

その姿は術者によつて様々だ。

おそらく先ほどの白い狼も誰かの式神で、ビショップの突然の行動から考へると何かの合図だったのだろう。

けれどここで決着をつける予定だつたクローバーにしたら面白くない。

特に途中で戦いを放棄など、もつてのほかである。

「待てビショップ！」

「待てといわれて待つような奇特な人間もいなかろう」

ビショップの逃げ足の速さに少し苦笑を漏らしつつクローバーは相手を追う。

未だスピードを落とすことなく走るビショップは、何を思つたか自身の懐をまさぐつた。

そして式紙を2枚ほど出すと

「ゆけ。式神」

こう言い放つた。

式紙はボウンと猫の姿に変化し、素早くその場を去つた。一方ビショップはどこかを目指し走る。

「ビショップ貴様、途中で戦を放棄するなど言語両断

「悪いが拙僧は僧侶だ！大和魂をもつた武士どもと同じにしないで
もらいたい」

そう言い争いをし、だが双方息を切らすこともなく走り続けた。

スペードは木の下に行き、雨を避けると紅い指輪に触れた。

「ジョーカー、ジョーカー。聞こえる？」

ああ、ヒジョーカーの低いような高いような良くなきわからぬ音程の
声が聞こえた。

そういえばジョーカーとは何だろ？

スペードが国に来ていたことに気をとられて、アリスはそれを考
えるのを忘れていた。

「そうだスペード。その、ジョーカーって何なの？その指輪も・・・

」

紅い指輪をちらりと横田で見ながらアリスは尋ねる。

ジョーカーという存在が考えれば考えるほどわからなくなる。
雨がかかるとジョーカーはスペードになつた。

「何と言つか、簡潔に言えば“火”かな」

「火？」

アリスはスペードの言つた意味が理解できず、そのままオウム返し

した。

無知は罪なり、というが今のアリスは罪だらけになつてしまつ。理解できないことばかりだからだ。

「うん、火。火の悪魔、火の神……言い方は色々あるけどね。とにかく、火をつかさどる人間ではない異形のモノ。それがジョーカー。アリスも知ってる……って、今は記憶、ないんだつけ？」

「あ、いいえ。記憶は戻つたわ。そういうばあ、いつていなかつたわね」

ただ、リデルのことは言わないつもりだ。
全てが終わつたら言いつつもりだから、今は言わない。
スピードはとくに記憶が戻つたことに喜び、また口を開いた。

「なら、アリスも知つてゐるだろ？『ライオンと火のピエロ』っていう童話」

ライオンと火のピエロ。それは黄昏の国の民なら誰でも知つてゐる
おとぎばなし
御伽噺。

とある森に住む動物の王様、ライオン。
平和に森を治めていたけれど、ある日突然どこからか国を寄越せと
火のピエロがやってきた。

当然王様のライオンはそれを拒否したけれど、寄越さないなら、と
ピエロは森を焼き、動物達を苦しめた。
そこで王様ライオンは火のピエロと対峙してそれを止めさせようと
した。
だけれどピエロは嘘つきだ。

ピエロが逃げみうとすみると、ピエロは足を滑らせ森の泉に落ちてしまつ。

森の仲間は助けようとはしなかつたけれど、ライオンだけはピエロを助けた。

命が助かつたピエロは、ライオンに感謝し、幾末までライオンの一族に仕えると約束した。

そしてこいつでも助けられるよひこと、ライオンのしていた指輪に入つた。

ライオンが危なくなつたときは、火のピエロが助け、森はそれからずっと平和だつた・・・といふ話だ。

「それが、どうした、の？」

「この話の舞台となる森は黄帝の国。動物たちは國の民。ライオンは黄帝の國の國祖。

「今まで言つたら、わかるだらう?」

アリスはゆつくつと頷く。

そう、その御伽噺の火のピエロとは、ジョーカーであることに。

「話の通りなら、この指輪にいるジョーカーは僕の先祖・・・国祖に助けられてその恩で僕も助けてくれている」

「でもなぜ、スピードが待つたく別の、ジョーカーになつたの?それここでじうじう雨でまたスピードに戻つたの?」

『俺の特技には包括と言つのがある。それは宿主に乗り移る技。だがな、俺は水が死ぬほど大嫌いだ。水以外の魔術を喰らつても痛くもかゆくも無いが、水だけは一滴も駄目だ』

だから雨を浴びただけで包括が解けたのだ。
そしてスペードに戻った。

『人間が俺のことを火の神と言おうが、火のピエロと呼ばうが関係
ない。』

ただそこに存在しているモノ。それで充分だ』

ハッキリとそういうつたジョーカーに、スペードはまるで我が子をい
つくしむように指輪を撫でた。

5.1・式神と黄昏の童話（後書き）

更新はしても話が全く前に進まないですね。

そしてついに五十話突破・・・

早いものですね。

それではここまで読んでくださってありがとうございます。
これからも頑張りますのでどうかよろしくお願いします。

～Hの役目とその感情～

流石に姿をバラすわけにもいかないので、スペードはジヨーカーに包括してもらつていた。

「アリス、これからクイーンの部屋に向かうが……ちゃんと付いて来い」

スペード・ユ・ジヨーカー。

それはスペードの意志はあるものの、喋り方もジヨーカー、外見もジヨーカーの色になる。

本当に誰だか見分けが付かなくななりそつだ。

「ええ、じゃ行きましょ~」

「スペードの部下に見つかると色々都合が悪い。だから見つからないよう、最善の努力はするつもりだ」

と、ジヨーカーは田配せしながら言った。

けれど突然、「そんな必要はない」とこじこじなかつたはずの誰かが言つ。

そこにいたのはキングだった。

いつやつて来たのかなんて分からぬが、こちから恭み寄つてきていた。

「キング……どうして……」

キングは一瞬アリスに視線を向けるが、すぐにジョーカーに視線を移す。

そこにいるキングは、見たことの無いような殺氣を纏っていた。

「どうして？…分からぬか、アリス。

ここは俺の城。反響の国の中北部であり、民の拠り所である城だ。ここで黄昏の国の武官と我が国の兵士が戦つてみろ。

平和に暮らしていた民が怯える。俺は国トップにたつ皇帝として、民を怯えさせる訳にはいかない。

だから、アリスといえども…・・・騒ぎの中心ならば、刀を向ける覚悟もある」

淡々とした、けれどしつかりとした口調でキングは告げた。

「ツ・・・！」

アリスが横目でジョーカーを見ると、ジョーカーは眉を寄せ、唇を噛んでいた。

こぶしを握り締め、目を伏せて。

「（ジョーカー・・・？）」

ジョーカーは苛立ちを感じていた。

それも全部、スペードのせいだ。

包括をしているときは、スペードの思考などすべて自分に伝わる。

そして今、スペードの苛立ちや苦しみという感情がジョーカーに流れ伝わってしまう。

この苛立ちは自分の感情じゃ、ない。

スペードの意思だ。

ああ、ビジョーカーは思う。

悔しいのだと。スペードのこの感情は悔しさからきているのだと分かつた。

近い歳で、国を治めているという同じ立場に立つ者同士。だが、スペードとキングには決定的な差があった。

それは、感情だ。

スペードはアリスを助けに国をハートに任せ、この国にきた。けれど、キングはアリスへの想いをおさえて、国のために刃を向けることもいとわない。

国のトップに立つ者としては、どちらが正しいのかは明白。

一国の主は、その国、その民、そしてその国が長い歴史をかけて作り上げた誇りをも背負いつ。

要するに、スペードの行為は、軽率そのもの。

いくらジョーカーの力あつたとしても、その命、落としていたかもしないのだ。

ジョーカーは心配そうに自分を見るアリスにかぶりを振つてから、もう一度キングと対峙する。

「だが、貴様も知っているんだろう。貴様の姉であるクイーンのしていること全て。

黒魔術に飲み込まれていることも、貴様に対する姉の思いも、だ

その言葉にキングはわずかに反応し、肩を一瞬揺らす。

キングは聴い。だから、この騒動の原因についても気づいているの

だろ？。

キングは口をつぐんだが、ジョーカーはその沈黙を肯定ととり、話を続けた

「なら、何故姉を止めない？姉を止めることを、弟である貴様ならできただろう。

・・・確かに、敵国の武官が戦つていぬことも危険であり、それを止めることが重要だ。

しかし民にとつては、自國の女皇が黒魔術に飲み込まれてゐるところの方がよっぽど恐ろしいのではないか？

よっぽど危険だと思わないのか？」

「・・・・そうかもしない。いや、そうだろう。だが、俺には姉を止める力がない。それならば」

姉でなく、敵国の武官の排除の方が良い。
自分が我慢さえすれば、民に姉の手が及ぶことはないのだから。

「歯痒いな」

ジョーカーは小さくそう呟いた。

キング
彼もまた、何もできない自分に苛立ちを感じているのだと感じた。

王は國や國民のためにできることは多くある。

けれど、それはあくまで王としてのこと。

一人の人間としてできることはあまりにも少ない。

大きな権力を持つ者は、同等に大きな責任を問われるのだ。
民を気にかけず滅んだ王はいくらでもいる。

反響の国も以前は王政だったが、王が民のことをかえりみなかつたため、今のような帝政になつた。責任といつ鎌は、とてつもなく重い。

「アリス、ここを去れ

「・・・できないわ」

「アリス。頼むからここを去れ。そうしなければ、俺は、お前を、殺すかもしれない」

まるで吐き出すように、言われたその言葉。
「殺す」というその言葉が、妙に響いて聞こえた。

52・Hの役目とその感情（後書き）

皆さん、お久しブリーフです。
(こきなり下品ですんません)

学校卒業、そしてまた入学いたしました。
環境の変化についていけず大変ですが

これからも頑張つて更新していくので応援宜しくお願ひします！

どうでもいいのですが、今回のサブタイトル、かつたいですね。
アリスつて何歳向けの話なんでしょうか。
何歳から何歳までが楽しめるのか、ちょっとした疑問です。
では、読んでください、ありがとうございました。

おまけ7 クローバーに50の質問

～おまけ・クローバーに50の質問～

01 お名前をどうぞ…！

本名は黒羽だ。

クローバーといつのは黄昏の国にきたときについた名前でな。

02 性別は？
立派な男児だ。

03 誕生日！

秋生まれだな。歳は18になる。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）
身長は…女子よりは高いが、男の中では低い方だ。
右頬に濃緑のクローバーマークの刺青がある。
髪は高い位置で結っている…そんなどうか。

05 動物に例えると？
動物・・・うむ、悩むな…。
鷹、しか思いつかぬ。

06 特技は？
物を憶えるのは得意だ。

黄昏の国の書庫の本の内容も大抵は憶えている。

07 ご趣味は？

刀の手入れ。

手先は器用な方だ。時折、武官たちから手入れを頼まれたりもする。

08 将来の夢など

近衛としてスペードを守った後、引退して穏やかに暮らせれば良い。夢であった近衛にはもうなれている故、満足だ。

09 好きな言葉とかある?

師匠の言つていた言葉だが、「本当に強い者については、弱い者を守れる者」というのだ。

それは幼い自分に影響を与えた言葉だった。

10 好きな動物は?

鳥は愛らしくないと思つぞ。

11 好きな色

落ち着いた色がいいな。藍色や蘇芳色などがそつか。

12 好きな料理

味が濃い、脂っこい料理は苦手でな。薄味のほうが好みだ。

13 好きな異性のタイプ

自分のすることに理解を示してくれる女性だ。

14 好きな同性のタイプ

同性の場合は落ち着いた者が好ましい。

少なくともビショップのような、人を小馬鹿にしたような者は嫌いだ。

15 座右の銘は？

成せば成る。やれば出来るという意味だ。

16 暇なときなにしてる？

鍛錬や勉学をしている。

やはり男たるもの、文武両道を志すべきだな。

17 旅行とか好き？

国の文化に触れるのは好きだが。

18 癒されることって何？

甘味を食べることだ。

だが正直、洋菓子より和菓子の方が正直舌が慣れているから、和菓子の方が美味しい。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

長らく会つていないうが、某の幼馴染（的存）だな。

20 ぶつちやけその人は恋人ですか？

いや。兄弟弟子の一人で、幼い頃から一緒にいた。

師匠が幼いそいつを拾ってきてな。

言つておくが、ビショップではないぞ。

21 ロンプレックスとかあつたりなんかしちやつたりする？

・・・童顔だ。

22 それを解消するために何か努力はしてる？

顔の造形を作りえるのは無理だ。かといって、歳より幼く見られるのは・・・

23 じゃあ逆に自慢できることは？

髪、か？

自分でいうのは何だが、中々綺麗な髪だと思つた。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

師匠に認めてもらえたことだ。

一人前の武人として、これからも精進してゆくつもりだ。

25 人生で一番驚いたことは？

武者修行に誇称の国から出て、様々な国を見たときだな。
自分の知っていた世界はとてもなく小さかったと思い知らされた。

26 人生で一番楽しかったこと

戦うことだ。

戦争は好きじゃないが、戦うこと自体は楽しい。
胸が熱くなつて高揚してしまつんだ。

27 人生で一番怖かつたこと

幼い頃の話だが・・・人斬りに襲われたことだな。

なんとか生きれたがあのときほど恐怖を感じたことはない。

28 人生で一番辛かつたこと

上の話で、人斬りに斬られたことだ。

浅かつたものの、傷口が物凄く痛んで、人を斬る痛みを忘れないようにしておつと思つたものだ。

29 外向的？内向的？

俺は初めて会つた人には警戒心が強い。
おそらく内向的だろ？

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうしますか？届ける。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使いつ？莫大な金は貰うのが億劫になるため、受け取らぬ。

32 子犬が捨てられていた！—愛らしく声で鳴いています。どうする？捨づ。

33 突然頼み」とをされました！ あなたなりびつするへできることなら承諾しそう。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよー…どうしよう…？冷静になれるまで頭を冷やす。

35 嘘はつけるタイプ？

つける、が、あまりつきたくないな。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？どうだろ？ 分からない。

37 何か癖ある？
特にね。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない？
そこまでたまつていなかから平氣だ。

39 あるつて答えたそこのあなた！ じゃあここの大に向かって思つ存分叫んでください！—！

・・・。

40 ・・・ 酸素マスクいる?
・・・。

・・・。

41 あなたにとつて一番大事なものは?
一番大事なもの、か。

一概には決められないが、時間だな。俺にとつて一番幸せな今が大事だ。
時間を惜しむことについては誇称の国の偉人たちも言っていたしな。

42 自分といつたらコレ! みたいのある?
・・・刀しか思いつかぬ。

43 崇拝してる人とかいる?
師匠だ。

44 どうしよう! 財布を掏られた!!
掏り返すか。

師匠に掏り方は教えてもらつた。

曰く、いつ必要になるか分からぬ、そうだ。

45 コレだけは誰にも負けないものつてある?
人としての誇りだ。

46 こいつには敵わないとていう人いる?
やはり、師匠以外に有り得ない。

47 全部答えてきたね? じゃあこのノリで普段なら言えないよう
な秘密トークをお願いします!!!

本当にどうでも良くて、秘密でもないが・・・

俺は一人称は「俺」と「某」で使い分けている。
某は少しかしこまつた時などに使う。

本当にどうでも良いものだ。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ?

どうだね? どちらが聞きたいくらいだ。

49 じじいばかりに生みの親になんでも言っちゃえ!

・・・そうだな。エシヨップとの戦いに決着を着けてもらいたい。

50 ここまで読んでくれた方に何か。

有難う。ここまで読んでくれたこと、感謝する。

オリキャラに50の質問

「Water Future」<http://waterfut ure.finito-web.com/orichara50.html>

53・騎士の剣と式神術

（騎士の剣と式神術）

速やかしい。風の切る音がした。

時計兔の肩をルークの剣がかすめ、ルークの頬を時計兔の鞭がかすめる。

ルークの頬を、僅かな血が伝った。

ルークも時計兔も、戦いのスタイルはスピード重視だ。音速とされるルークの剣技は男顔負けだ。

隙のない、その速さ。

一方時計兔は、鞭という扱いにくい武器を使っているに関わらず、完璧に使いこなしている。

鞭のように、長く、リーチがある分隙が生じやすい武器は相当の技量を持つた手練でないと使えない。

つまり、鞭の隙を補うためには、使用者の的確な腕と素早さが必要になる。

それを時計兔は兼ね備えているということだ。

「中々やるな

そう呟き、走りこむルーク。

キラリと光る振り上げられた銀の刃。ぞつとするほど、刃物の輝き。

速い。ルークのスピードが、また上がった。

時計兎はかろうじて剣を避ける。

が、続けざまに右、左とルークの攻めの手は止むことがない。振りかぶり上、右、踏み込んで左、再び上、右、右・・・

光る銀の流線と規則正しいリズム。基礎のなった攻撃。

これだけ同じリズムで同じ型を打ち続けるには相当な鍛錬が必要だ。それも全て、幼い頃からルークが培つたもの。

「くつ・・・・」

眉間に皺をよせる時計兎とは対称に、ルークは表情を変えず時計兎を追う。

一見すれば、ルークの優勢。
しかし、そうでもない。

時計兎はルークの攻撃を読んできている。

基礎のなった技だからこそ、次の一手も大体だが予想がつく。そう、ルークの攻撃は一向に止まないが、決定打にも至らない。しかも時計兎の対応も段々と変わってきている。

鞭をしつかり握り、ルークが剣を振り下ろすより前に避けているのだ。

やがて時計兎は何かが閃いた、というかのように時計兎の表情も変化していく。

ルークが下から上に斬りあげたその時。わずかな隙ができたのを時計兎は見逃さない。体をやや右向きに保ちながら重心を安定させ、時計兎は鞭を持つた右手をスイングさせた。

すると、鞭は意志を持っているかのように真っ直ぐルークの手元に

向かう。

柄にからみつくと、そのまま時計兎は右手を引く。ルークの剣が、不思議なまでにするりと手から離れる。一瞬のせめぎ合い。

「おつ・・・」

剣は鈍い音をたて地に落ちる。

息を一く瞬もなし、攻防

そして鞄は、今度は強くルークの鞄をたたく。背中を走る痛みにルークは顔をゆがめると、そのまま地に膝をついだ。

「さて」

息をついた時計鬼。

長いようで短くて、短いようで長い戦いたた

「これで終わりですね。あなたは地面に膝をついた。もう戦わないでしょう」

時計兔は鞭を手に巻きつけ回収すると、地に落ちていた剣を拾い、ルークに差し出した。

「埃尔梅」

תְּבִיבָה תְּבִיבָה תְּבִיבָה תְּבִיבָה

あまりに自然に差し出された剣。

ルークは思わずそれを受け取ってしまいそうだったが、敵から渡された剣をとるのを躊躇する。

「どうこうもつといわれましても、ね。別に深い意味はありませんよ。

ただ、試合相手に敬意をこめて握手をすると同じようなものですね」

殺し合いをするためにここに来たわけじゃないですから、と言葉を付け加え、時計鬼はルークに剣を渡す。

「剣というのは騎士の魂なんでしょう？　ま、私は鞭ですし、騎士でなく武官ですからよく分かりませんが」

ルークは信じられないというように、目を瞬かせる。そして、自分の手の中にある剣をみて、素直に礼を言いたくなつた。

この剣は尊敬する父から貰つたもの。

名のある名家から生まれた自分。父が王直属の騎士で、ずっと憧れていた。

最初は父も自分がおじとやかなお嬢様になることを望んでいた。しかし自分は父と同じ騎士になると強く訴え、毎日訓練した。

その姿を見て、当初は遊び半分じゃできる仕事でないと反対していた父も、

自分が本気だと認めてくれるようになった。

父が引退した日、父から譲り受けた剣である。

「では、大人しくしておいてくださいね。ま、あなたは後ろから人を襲うような人ではないでしょ？」

そう言い、時計兎がルークに背を向けたとき。
どこから来たのか白い猫がその場に現れた。

「猫・・・!?

驚く暇もなく、猫は煙につつまれ姿を消した。
その場に残っていたのは白い紙。

時計兎は警戒しつつ、その白い紙を手でつまむ。
だが、その紙は少し文字のかかれた何の変哲もないただの紙だ。
いや、ただの紙でなく、式紙ではあるのだが。

先ほどの白い猫は、と事情を知るルークは目を見開く。
白い猫はビショップの式神だ。その式神はルークの元にきた。
ということは、キング、もしくはクイーンに何かがあつたといつこと。

ほんの少しだがキングは式術が使える。
ビショップから少しながら習っていたからだ。

そこで、キングは式術のなかのい式神術に目をつけ、こう言った。
「ルークとナイトが無きとき、自分と姉に何かあればビショップに
自分の指揮を遣わせる」と。

要するに、キングかクイーンに何かがあつたときは、
キングはビショップに式神を遣わせ、ビショップに何かがあつたと
知らせる。

そしてそれを受けたビショップが、ナイトとルークに式神を遣わせ、
それを知らせるという仕組みだ。

キング式術を使えるといつてもまだ未熟。

式神を創るのにも力が必要る。

ビショップのように複数式神を創ることはできない。

つまり、1つしか式神ができない。

ナイトかルーク、どちらか一方に知らせて、ナイトとルークが一緒にいるとは限らないし、

もしキングとクイーンどちらにも危険等が迫つていれば、どちらか一方だけ呼んでも意味が無い。

故に、まずビショップに知らせる。
そういう風になつてているのだ。

その式神が、ルークの元へ来た。

おそらく今頃ナイトのところにも式神がいつていることであろう。

・・・式神がきたということは、敬愛するクイーン、もしくはキングに何かあつたということだ。

ルークは痛む背中のことも忘れ、駆け出す。

クイーンの身、ただそれだけを案じて。

時計鬼も、自分を抜かしてまで走つたルークを不審に思い、後を追つた。

53・騎士の剣と式神術（後書き）

今回のマメ知識です。

式神は使う人によって形が違います。
色は全部白に統一されていますが。

キングは狼、ビショップは猫の形になります。
ちなみにクローバーは鳥です。
しかしクローバーは式術を使うのが苦手なので
滅多にでてこないと思います。

54・炎の魔力と女皇の傀儡

「炎の魔力と女皇の傀儡」

去れと言われた。殺すかもしれない、と言わた。けれどアリスは去るつもりも、殺されるつもりもない。クイーンを止めに来たのだ。

「去るつもりはない、か」

動く様子がないアリスを見てキングは呟く。

キングはこの時、アリスが去ってくれたらどんなに良いだろう、と考えた。

愛しい人に刃を向けることはとても辛い。
けれど、姉にアリスたちが刃を向けることはもっと辛い。たった一人の肉親なのだ。

姉を狂わせたのは自分で、今この騒ぎを起こしているのは姉。
随分勝手な言い分だとは思う。
だけれど、自分では姉を止められない。
かといって、アリスでは姉に殺されるかもしれない。
それだけは絶対に嫌だ。
そうなれば、道は一つ。

アリスを国に帰して、自分が姉の傀儡かいらいになることしか、ない。

「アリス、俺の後ろに」

ジョーカーがアリスを庇うように、アリスとキングの間に割つて入る。

それを見て、キングの胸が締め付けられるようにキリリと痛んだ。

浅ましい嫉妬おびやだとキング自身分かつている。

アリスを今脅おびやかしているのは自分なのに、アリスをそんな不安そうな顔にさせることが憎たらしい。

不安そうなアリスを守れる、隣の男が恨めしい。

赤子のような独占欲と我慢。

自己嫌悪で、吐き気がする。

だがそれも、自分自身のせいだ。

キングは渦巻く感情を抑えながら、右手を前に突き出すと、静かに詠唱を始めた。

「氷に属する全ての粒子よ。創主を屠ほふつた我に従え」

氷の粒子がキングの右手に急速に収束される。
やがてその氷の粒子は形とつていく。

「氷刃」

三日月刀へと形を変えた氷を持ち、キングは斬りかかる。

氷は炎に弱い。だから炎の魔法を使い、対抗すればいいのだが、今
のジョーカーにはそれができない。

何故なら、氷を炎で溶かせば水ができるてしまうからだ。

一般人にはなんてこと無いただの水だが、ジョーカーにとつては、
一滴の水でさえも弱点となる。

それに、水を被れば包括が解け、スペードの姿があらわになつてしまふ。

それは避けたいことなのだ。

「ジョーカー退いてッ」

キングが斬りかかっているにも関わらず突っ立つて居るジョーカーの前に出て、アリスは氷刃を受け止めた。

だが、受け止めたトンファーが氷刃の影響でピキピキと凍つて居る。このままではトンファーを持つて居るアリスでさえと察したのか、アリスは氷の刃を弾いて、後ろへ体を引いた。鈍い音をたて、氷刃が地面に振り下ろされる。そしてアリスのトンファーと同じように地面が少しづつ凍つっていく。

氷刃に触れたものはいかなるものであろうと凍らせる。持つて居る術者は例外として。

「チツ・・・厄介だな」

ジョーカーは舌打ちして、氷刃を避ける。

水が当たらないように避けねばいいかもしれないが、万が一、水滴がかかつたとしたら・・・そう考えるとジョーカーは行動に移せない。

けれど、相手のキングは本気だ。本気で、自分たちと戦っている。もしかしたら、このままアリスも、スペードも討たれる可能性がある。

ならば、とジョーカーは決意したように鎌を握り締めた。
それから、心の中で、スペードに呼びかける。

・・・スペードは、ジョーカーの呼びかけに応じた。
「やつてくれ」と。

「下がってくれ、アリス」

ジョーカーはアリスにそういうと、キングに向かい手をかざす。

とてつもなく高い魔力を持つた者は詠唱なしに魔法が使える。
そう、ジョーカーは炎を司るモノ。

炎系魔力は計り知れない。

炎の粒子がジョーカーの手に集う。

「何・・・!?

キングの氷刃に向かつて、それは炎の渦を作る。

渦は、瞬く間にキングの氷刃を溶かした。

と同時に、溶かされた氷の雪が、ジョーカーの手掠める。

「ジョーカー！水が・・・!」

「ああ、そうだな」

ジョーカーはなんとも無いといつよつて頭をふると、ふ、と小さく笑んだ。

『スペード、頑張れよ』と心の中で言つと、目を閉じた。

やがて。

色が落ちていくように。色がはげていくように。

火のピエロが、黄金の獅子へ。

漆黒の髪は、黄昏の色をした金髪に。

黒曜石のような黒い瞳は、燃えるような火色の瞳に。

「つー？」

「キング・・・僕は、君を倒す」

黄昏の王が、そこに立っていた。

55・赤い薔薇と冷ややかな笑み 前編

「赤い薔薇と冷ややかな笑みーー

キングは田の前に立つ、ここにいないはずの人物を見て瞠目した。さつきまで黒髪黒眼だつたはずの人物が一瞬で姿を変えたことも、声の質が違うことも、すべて驚きの対象だった。

「・・・スペード王、か。黄昏の国の王が何の用だ？」

だいたい、家臣たちは何も言わなかつたのか？貴殿が単身でこの国に来るのを」

キングは努めて驚きを顔に出せなこよつにしなこよつにし、静かに問う。

スペードはぐつと歎を嘆んでから

「家臣は、欺いてきた。國のことは、優秀な妹に任せである」

と言つた。

その言葉を聞いて、キングは思つた。

スペードもキングも、好き好んで「王」なる存在になつた訳でないと。

立場は似ている。しかし、同時に立場は真逆。

似てゐるようで、似ていない。同じよつで同じじやない。

「キング、あなたがアリスに刃を向けるといつのなら、僕はあなたを倒す」

スペードは鎌を構え、キングを睨むように見る。キングはスペードを見返した。

「やつてみる」

見下されたその言葉にスペードは殺氣を張り詰める。キングにもスペードにも隙がない。

アリスは固唾を飲んだ。

先に動いたのは、キングだ。

「氷刃ツ」

「！」

また氷の刃が襲う。
スペードはそれをかわす。

アリスは何もせず、否、何もできず、ただ2人を見る。それでも、止めなければとアリスが一步足を出した。

が、その瞬間。

ゾクリとした空気が、耳元を駆けるのをアリスは感じた。禍々しい、いやな感じ。

その禍々しさのする方を、アリスは振り向いた。

「ク、イーン・・・」

背筋の凍るような冷笑。

口紅で赤く彩られた口元。

冷やかな目線。

『み・つ・け・た』

クイーンは、声こそは出していないものの、確実にそう言いながら、髪飾りに使っていた赤い薔薇を手で握りつぶした。

その行為に、アリスは狂氣を感じ、体を震わせた。

キングとスペードが争っている、こんな状況で、一番会いたくなかった人物に会ってしまった。

アリスは唇をかむ。

胸に煌く蒼色のペンドントをしかりと握つて、恐怖で震える体をおさえつけた。

「アリス・・・？」

動かないアリスを不思議に思ったのか、キングもスペードも動きを止めた。

アリスの視線をたどつたそこにいる人物に、2人は目を見開いた。

「姉上・・・」

「女皇っ！？なぜここに・・・？」

クイーンはなにも言わず、笑みを浮かべたまま、廊下の奥に消えた。

「姉上っ！待つ・・・」

クイーンを追おうと、アリスたちは足を踏み出す。だが、それは2人の男に止められた。

「動くな、スペード……そしてアリス」

「キングも、と言った所か。無闇に突っ込んでは、相手の思つ壺であるぞ」

「クローバー……それにビショップ！ よかつた、無事だったのね」

アリスは軽傷の2人を見て、思わず安堵の声を出す。

アリスにとって、2人は互いに自分を助けてくれた存在だ。どちらかが動けなるまでの怪我をしていなくて、純粹に喜んだ。

「おかげさまでな……無傷とは言わないが。まあ、それより

と、クローバーは視線をスペードに移す。

スペードはクローバーの視線に気付いたのか、肩をすくめた。

「クローバー……君に迷惑をかけたことはすまないとは思つけど、正直、後悔はしないよ」

クローバーはスペードの言葉に溜息をついた。

しかしそれは、気苦労、絶望、呆れといった感情ではなく、言つならば、大きな吐息のようなもだつた。

「とにかく、説教は帰つてからやつくりさせてもらひ。先に、2人に言いたいことがある。もう、争いはよせ」

キングとスペードを見て、クローバーは言つ。

争つても、なんにもならない。

国のトップに立つ者として、争つより前にすべきことがある。

「口がなつていな、異国の者。

それに・・・部外者は黙つていてもらいたいのだが? これは俺と姉の問題だ」

キングが見下すように囁ひつと、クローバーはあきらめた様子で、静々と頭を垂れた。

「それは失礼いたしました。それがし某は黄昏の國の王の近衛にござります。このたびは、とんでもない無礼を働き、申し訳ございません。しかし、アリスや國民を巻き込んでいる時点で、もう貴殿と姉君の問題ではないかと思われます。

「のまま闘つても、埒はあきませぬし、良い事などひとつもありません。どうかその刃、お収めいただきたく・・・」

スピードは久々に聞いたその口調に目を細める。

クローバーが自分のことを「某」というのもなかなか珍しかった。出会ったころは、スピードに対してもこの口調だったのだが、慣れるうちに素になつていった。

そのことを思い出し、スピードはこんな状況ながら、フツと笑みをこぼした。

「なぜ、良い事はひとつもないと?」

「、破壊は無を生み出します故」

「無から生み出される有だつてあるだろ?」

それに貴兄とて、この国に来て一度もその刀を抜かなかつたわけではあるまい?」

キングにそう指摘され、クローバーはぐつと喉を詰まらせた。

もともと、クローバーはこのような口上の争いは得意でない。ダイヤの方が、じつじつのは向いている。

そもそも城内で別れたのだが、ダイヤたちはいつたい何をやつているのだ?と

クローバーは苛々をまったく関係ないとじりじりぶつける。

ハラハラしながら見守っているアリスとスペード、ほくそ笑んでいるビショップ、冷やかに自分を見下げるキングの視線を感じながら、クローバーはその口を開いた。

55・赤い薔薇と冷ややかな笑み 前編（後書き）

全然更新してなくてほんとすみません！

新生活でかなり忙しくなつてしましました。

空いた時間を見つけてはなんとか更新していくたいと思つております。

いろいろがんばります。

56・赤い薔薇と冷ややかな笑み 後編

「赤い薔薇と冷ややかな笑み」

「ビショップがアリスを連れていたからと言ひ訳させていただきます。

確かに拙者は刀を抜きました。けれど、今はそんなことを言つている場合ではないのは、貴殿ほどの人物ならお気づきでしょう」

確かに、ヒギングは心中で思つ。

争いはよくないことくらい分かる。だが、いわばこれは各自の志、意志のぶつかりあいなのだ。

引くに引けないのだらう。

「・・・あの」

そのとき、黙つていたアリスが口を開いた。
眼は、まっすぐにヒギングを見つめて。

「みんなに、言おうと思つていた」とがあるの」

アリスはずつと思っていた。

守られ、大切にされるのを拒もつと。

なぜなら、守られ大切にされればされるほど、誰かに迷惑をかけることになるから。

アリスはそう思い、ひとりで何とかしようと考えていた。

そうすれば、迷惑は誰にもかからない。

だから、アリスは皆を拒んでいた。

仲間だなんだと言いつつも、心の奥底では、それを拒否していた。

けれどそれは違うのだ。

そのことを、教えてくれたのは、アリスが拒んでいた皆だった。

「私、以前クイーンの声が聞こえたの。クイーンの心の声がね」

「姉上の、心の声・・・・?」

「ええ。助けてって言つていたわ。私を、黒魔術から救つてほしいつて」

「黒魔術は一度捕らわれてしまえば、自分から抜け出すのは難しい。

それに力を操りきれなければ、己の心の闇を増幅させてしまう」

今まで傍観していたビショップがつぶやくように言つた。

クイーンの今の姿は、力に捕らわれてしまった典型的な“魔女”だ。

「だから、私はクイーンを救いたいの。キング、あなたの姉を助けたいの」

「どうして、そこまで・・・・?」

キングは疑問を口にする。

こう言えど何だが、クイーンはアリスに対しひどい仕打ちをしてきた。

なのになぜ、アリスは救いたいと思つていられるのだろうかと、そう思つてしまつ。

「・・・・クイーンと私は似てるわ。自分で全部を背負いこもう

とするところがね。

クイーンは自分ですべてを背負い込みすぎて、ああなつてしまつた・・・

アリスは、クイーンの姿を思い出しながら言葉を紡ぐ。

誰にも弱みを吐くことのできないクイーンと、誰にも弱みを見せることのできないアリス。

この一人は、性格は違えど、根本はよく似ているのだ。

「私も、このままだとクイーンによくなつていていたかも知れないわ」

「このまま一人で生き続けていたら、心が壊れていたかもしれない。」

「馬鹿な話だけど、今回、スペースに言われて初めて気付いた。

私は一人じゃなかつたつて。私は、人に救われながら生きてたんだつて。

「私には支えてくれる人たちがいたのよ。私の知らないところで、私を支えてくれてた人たちが」

だからこそ、アリスは今までまっすぐに生きてこられた。

ハンプティーという幼馴染や、自分を慕ってくれていた人々がいたから。

クイーンにもキングやルークみたいに自分を支えてくれる人々がいたが、

彼らの存在に気付く前に、精神が黒魔術に侵されてしまったのだ。

「一人じゃない幸せに、私は気付けた。ならばクイーンも気付けるはず。

・・・私は皆に救われた。だったら、今度は私が皆を、救う番よ。クイーンを救いたい理由なんてない。

ただ、苦しんできたあの人を、救いたいっていうだけ」

誰かが苦しむ。

その誰かが苦しみから逃れたいと思つてこらのなら、
救つてあげるのが、人の持つ愛情だ。

「私はクイーンを救いたい。でもそれは、私ひとりじゃかなわない。
だから皆、お願い。クイーンを、苦しみから救いましょう。
皆が皆、誰かに救われたみたいに」

返事はない。が、それぞれの表情ははつきりと、肯定を表していた。

クイーンは、部屋で赤い薔薇を弄んでいた。
その香りに、酔いつゝに、ひつとつとした目で笑む。

「もうすぐだ。もうすぐ、アリスが消える……」

嬉しそうに赤い薔薇に口づける。

自身の唇にひかれた紅は、薔薇のように鮮やかで、血のように紅い。
「キング……私のことおしい弟……ずっとずっと、永遠に、
お前は私のものだ」

部屋の前まで近づいてきた足音に、クイーンは笑みを深くした。
ゆっくりと立ち上がり、手に持っていた薔薇を地面に落とす。
そして、グシャリと、薔薇を踏みつぶした。

「アリス……来るがよい。お前との遊びも、もう終結だ……」

薔薇が、散つた。

56・赤い薔薇と冷ややかな笑み 後編（後書き）

えーと・・・五ヶ月も更新してなくて本当にすみませんでした。
気付けばもう十一月です。

お待ちしてくださった皆様、なんとか涼村は生きてますよー。
とうあえず、完結だけは絶対させますので、
どうか長いお待ちください。

とうあえず、頑張っていきます。

ねめか？ ダイヤモンドの質問

「おまけ・ダイヤに50の質問」

01 お名前をどうぞ…。

ダイヤひらゆーんせ。よろしくな。

02 性別は？

男やで、オ・ト・ン。

03 誕生日！

真夏に生まれたな。髪も暖色やから暑苦しかつたらしこで。
あ、歳は十九や。

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

左頬にダイヤマークがついて、顔は結構男前やと思ひナビなあ。
ん？だれや今、血画血贊言つたやつ。

05 動物に例えると？

クローバーに聞いたら、キツネやつて。
何でや…・・食えない奴ちゅー意味か？

06 特技は？

そら勉強することに關しては負けへんで。
仮にも国一の文官なんやし。

07 ご趣味は？

運動することやんない。

なんかスポーツとかすると頭も活性化するし、精神力もつんで。

08 将来の夢など

うーん、そーやな・・・

俺ンとこの銅の一族とスペードが、お互いを認め合えるようになれる
ことしか思いつかんわ。

俺の実家とスペードは折り合いかねるーてな、困るんや。

09 好きな言葉とかある?

ベタに愛とかゆうてみよか。

10 好きな動物は?

動物は全般に好きやで。かわえーやん。

11 好きな色

赤かなー。

どうでもええけど赤ってクローバーの故郷やと魔払いの色らしいわ。

12 好きな料理

辛い味が好みやで。

13 好きな異性のタイプ

ノリのええ子かな。あと笑うと可愛い子とかも好きや!

14 好きな同性のタイプ

同性やつたら・・・一緒にバカやれるようなあつかるーいな奴やな。

15 座右の銘は?

「継続は力なり」 やろか。

日々の努力を大切にせえよ。

16 暇なときなにしてる?

あんま暇がないから分からん。

多分、同じように暇な奴と話すんぢやない?

17 旅行とか好き?

嫌いではないけど、特別好きつちゅう訳でもないで。

18 癒されることって何?

小さい子とかとふれあつたときとか癒されるわー。

自分より小さいもんは、なんか守つてあげたくなるなあ。

19 一緒にいて落ち着く人はいる?

あんまおらんな。一番落ち着くんは一人のときやし。

そもそも俺の性格上、人と話してたりするとテンションが上がつてまづから。

20 ぶつちやけその人は恋人です!?

この質問、飛ばしてもいいやんな。

21 コンプレックスとかあつたりなんかしちやつたりする
コンプレックスなあ・・・

左目に眼帯しとる」とぐら」しか思いつかん。

22 それを解消するために何か努力はしてる?
こればかりは、な。
しゃーないことや。

23 ジゃあ逆に自慢できる!ことは?
うーん、明るいことねや。

・・・あと俺なあ、意外と空氣読むんやで。

24 人生で一番嬉しかったことは何?
そやな。シャッククラス王の補佐に選ばれたことや。

25 人生で一番驚いたことは?
同じく王の補佐に選ばれたことやで。
俺、銅の一族の人間やつたから、選ばれることはないと思ってたん
や。

余計驚いたわ。

26 人生で一番楽しかったこと

俺、最初は武官の方に所属しどうたんやけど、そん時クローバーと
手合させしたんや。

手合させゆうてもただの手合せやのーて、どっちも本氣で戦つた
んやで。

あのときほど高揚したときはなかつたかもなあ。

27 人生で一番怖かったこと

怖かつしたことなー。

・・・俺の祖母の説教や。怖いで、あれは。

28 人生で一番辛かつたこと

・・・辛かつたこと・・・ねえ。

母親に、この左目せいで蔑まれた時期・・・やな。

俺の弟や妹は母に愛されとつたのに何で俺だけ、つておもつとつた。

29 外向的?内向的?
外向的やろ。バリバリの。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします?
あんま金額でかいとな。捨うのも気がひこんで。
百円くらいなら捨つかもやけど。

31 じゃあ、1000万円もういました。どう使つ?
スペードに国費にしてもうひとつかもしれんなあ。

32 子犬が捨てられていた!! 愛らしい声で鳴いています。どう
でる?
絶対拾うで。

動物は可愛いしなあ。

33 突然頼みごとをされました！ あなたなりびつする？
いいで～って言つ。
人好しやな、俺も。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しあつたよーどいつしょ“つ”！?
場合によるわ。じつに非がないのに、自分から謝るのは嫌やし。

35 嘘はつけるタイプ？
あたりまえやろ。

話術が巧みやないと、補佐は務まらんで。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃつたりしない？
いいや。

でも、ま、気付く奴は気付くかもしれんけどな。

37 何か癖ある？
髪をかきあげたり、とか。

苛々したときとかについてしまうんや。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない?
あるでー。

39 あるつて答えたそこのあなた! ジャオイジの穴に向かって
思つ存分叫んでください!!!
いい加減、銅の一族もスペードを認めーやーー
スペードもや! 銅の一族と歩みよーーとせえーーー

40 . . . 酸素マスクーる?
. . 貰つとくわ。

41 あなたにとつて一番大事なものは?
友達やな。

42 自分といつたらコレ! みたいなある?
眼帯してる明るい男、やう?印象は。

43 崇拝してる人とかいる?
おらへんよ。

44 デウシヨウ! 財布を掏られた!!!
ああーあ、サイアクな氣分になるやろなあ。

45 コレだけは誰にも負けないものつてある?
話術と体術。どっちもそれなりに自負しどる。

46 こいつには敵わないつていう人いる?
えつとー。

王であるスペードと、祖母やな。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えない「」
な秘密トークをお願いします！－

・・・・俺はなあ、ハンパーティーみたいに虐待されとつたわけや
いんやけど、母が嫌いや。

あの人は、昔から俺はあつてないものみたいに扱つとつたから。

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場つてどつよ？
ムードメーカーちやうか？

49 じじいとばかりに生みの親になんでも言ひやえ！
アリストちゃんとの仲、ちょっとは進展させよ？

あとなあ、小話でええから銅の一族についてとか、書いてや？

50 ここまで読んでくれた方に何か。
お疲れさん。あんがとなー。

オリキャラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfuturae.finittoweb.com/orichara50.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1350d/>

黄昏の国のアリス

2010年10月10日19時44分発行